

# 第三章

## 緑丘の充実

——伴房次郎校長期

## 第一節 緑丘のルネサンス

「北に一星あり」

『小樽新聞』は「小樽高商十周年祝典」と題した一九二二（大正一〇）年一〇月七日の社説で、小樽高商の今後の責務として「真の北日本に於ける文化醸成の中枢機関」となることを求めた。その直後、校長は渡辺龍聖から伴房次郎に交代し、この責務の実現をめざすことになる。第二代校長となった伴房次郎の在任期間は、一九二一年一月から三五年四月までの一三年五カ月におよんだ。この間に小林多喜二や伊藤整を卒業生として送り出し、軍教事件では学生運動史上に記憶され、長崎・横浜と並ぶ「三大高商」（横浜ではなく山口とする説もある）の雄として名をはせることになる。

伴校長の退任後に一挙に飛ぶが、一九三六（昭和一一）年七月の創立二五周年にあたり、新聞『緑丘』第九四号（一九三六年七月五日）は「部説」の冒頭で、次のように記した。これが「北に一星あり」の初出と思われる。

渺々たり日本海、翠緑薫陶たる慈愛の丘、北に一星あり、小なれど其輝光強し、緑ヶ丘に築きたり廿五年文

化の跡

嗚呼諸君、今日ぞ迎ふ記念の式。喜ばしい哉

「北に一星あり、小なれど其輝光強し」という小樽高商・商大を象徴し、奮起させる一句は、伴校長期に次第に熟成され、創立二五周年を期して成句となったといえよう。創立以来四半世紀におよぶ教育・研究の結実が、この



伴房次郎

強固な自負をもたらし。先の「部説」は、「創立時代の我学園は当まさに日本資本主義の発展と共に生れたものとして、其が完成への時代的背景を持つて居た。大戦に依る其完成と一時的好況、而して其と共に潜在して居た不況の開始、思想的混乱等、さては又ファッショの嵐、……と学園は幾多社会の波にもまれた事であらう。学生が大言壮語せる時代も、ヒロイズムに捉はれた事も、或は又沈滞した事も、此時代的背景の下に理解されねばならぬ」とつづく。

その『緑丘』第九四号を瞥見すると、身内に近い寄稿者ゆえとはいえ、四半世紀を経た小樽高商の充実・高揚ぶりが伝わる。渡辺元校長とともに名古屋高商に移っていた高島佐一郎は、「小樽学園の社会的学問的業績の吟味」として、「地理上の疾風怒濤をつき破つて、この輝ける文化的殿堂を揺ぎなく築きあげた」と評し、さらに教授団・学生団・卒業生団の三位一体による「美しい倫理的協同体」を特筆する（貧しき追想と富める学園陣容の仰観）。また、一九二八年卒業の板垣与一は、後述する『商学討究』創刊・『大西猪之介全集』刊行・留学から戻った手塚寿郎による向学心の鼓舞などをあげて、「深い自省的精神と激しい究学的情熱とが渾然融合した緑丘」(LAUDATOR TEMPORIS ACTI)と回想する。

### 「守成耕耘の重責」

現在の学長選考と異なり、戦前の官立学校長は文部省の任命であり、一般的に高校や実業専門学校の長には文部省の局長級官僚が就任することが多かった（三年程度の在任）。小樽高商の場合、第二代校長として伴の就任に、渡辺龍聖の強い推薦があったことは疑いない。渡辺を新設の名古屋高商校長に据えるために、文部省は渡辺の意向を最優先に尊重するという事情もあったはずであるが、ほぼ生え抜きで首席教授の伴の就任は学校内外に順当な人事

と受けとめられた。京都帝国大学助教からの転任以来、伴の学識・人格には教職員・学生からも厚い信頼が寄せられていた。一九一八年入学の菅野裕司によれば、「教頭の伴さんの名声が遥かに校長を凌いでいる」（『楽我記』『緑丘』〔叢目版〕第五号、一九六六年一月）という。

一九二一（大正一〇）年一月一日の校長告別式において、渡辺は「創立の基礎成るや教年にして小樽を辞し」たいと考えていたが、「事に当るや其の業、意外に難」であつたため、「学を以て身を立つの望を放擲し、身を以て本校の爲めに盡さん」としてきたと述べたうえで、「十ヶ年も同一場所に居る時は自らは如何に努むるも、時勢の進運（おき）に後る、事多かる可し」と転出の理由の一つを明らかにした。名校長と謳われながらも、在任が長期に亘ることは「時勢の進運」（渡辺校長を送り、伴新校長をいたた）『校友会々誌』第三号、二三年一月に遅れると自戒し、後事を伴に託した。この交代は小樽高商にとつて新たな出発を図るうえで、望ましいことだつた。ただ、渡辺が新設の名古屋高商校長となることには、教職員や学生にあるわだかまりを残したことも確かである。

ついで就任の挨拶に立った伴は、「私はたゞ一時本校のお留守番をする丈で、即（すなわち）一時お預かりするのみであります。従て何時かはお返しする其時期の来る迄忠実にお守りするのみであります」と語つた（渡辺校長を送り、伴新校長を戴く）。この「忠実にお守りするのみ」という謙遜気味の発言は、まぎれもなく伴の真意であつた。過去一〇年間、渡辺の補佐役として緑丘の個性を形づくつてきたという自負の下、その継承こそ第二代校長としての役割であることを肝に銘じた。渡辺が強烈なカリスマ性を發揮して小樽高商の特性を開花させたのに対して、伴は前校長の敷いた軌道に沿つてその特性を結実させた。

創立二〇周年の『記念論文集』への序文に「先任者の籌策（ちゆうさく）を継承し、前諸を纂就（さんく）したしと思ひ、戦々兢々、立学の旨と付託の任とに背かないことを念として来た」と記すように、伴の真情は「守成耕耘（こううん）の重責」を負うことで一貫していた。退任後も、「折角創業時代養はれて来た精神を失墜（しだう）しないかといふのが、絶えず心配の種であつた、殊

に何分不景氣時代にあつては職業学校としては生徒の心も動揺し易いから、それを常に心配した」(『小樽新聞』一九三六年七月六日)と語る。第三代の校長就任の辞において、苦米地英俊も、伴が渡辺初代校長の「偉大なる人格的、又独創的教育」の「遺鉢を受け、十有余年の間孜々として学園守護に努力せられ、創業の完成に寄与せられた」(『緑丘』第八七号)と述べる。

実際には、「一時本校のお留守番」という限定的なつなぎ役とは裏腹に、渡辺校長よりも長い一三年以上の在任となる。伴に対する学校内外の信頼が厚かった由縁である。「商業学」・「商業実践」の椎名幾三郎は、「伴さんは控え目で虚名を求めず、新奇を好まない人だったから、小樽高商に重大なる変更を加えなかつた。積極進取の渡辺校長の後継者としては、蓋し適任者であつた」(『伴校長の思出』『緑丘』(纂目版) 第四号、一九五八年二月)と語る。

#### 「学園の慈父」

伴から苦米地英俊への校長交代も唐突であつた。伴退任に際して『緑丘』第八七号(一九三五年五月二五日)は、「二代校長として十三年間激務に就かれ、又学生の良き指導者として学園の慈父の如く敬慕せられてゐた」と報じた。「学園の慈父」とは、伴を想起する誰もが思い浮かぶ形容だった。さらに卒業後には「吾等の親父」と親しみを増した。退任半年前、伴は「満州国」の視察に出張するが、朝鮮や「満州」各地で同窓生が「親父」来る!と喜びに湧いて待ち構えていた(『緑丘』第八四号、一九三四年二月二三日)。学生として、また教員として伴に接した大野純一は、「在校中も、卒業後も、先生は決して固くるしい説教めいたものはなさらなかった。常に座談風に話をされたのである。しかし、良くかみしめて見れば、それは豊かな経験と高い識見からにじみ出た含蓄あるお言葉であり、しかもその底に流れるものは常に温かい親心であつた」(『小樽高商二代校長 伴房次郎先生書簡集』への「序」と記す)。

「本校が、開校当初の建設期に渡辺校長のような開拓者の覇氣に満ちた人材を迎え、つづく発展期には伴校長と

いう慈父の如き温厚寛容の人物をえたことは、まことに幸運であった」とする『緑丘五十年史』の評に付け加えるものはない。一九二〇年から五〇年まで英語教育に携わった小林象三は、渡辺、伴、苦米地英俊、大野純一校長（学長）について、それぞれ「the great, the good, the able, the gentle」（『緑丘五十年史』）という敬称を付すが、これも見事に各校長の個性を言い当てている。一九二六（大正一五）年一月二五日の『北海タイムス』コラムでは、「篤実謹厚の地獄坂のヌシ」と題して、「頭顱とうがくの光沢と面の面積とを加ふるに従つて、その人格も之と正比例を保つて、揮成の域に近づきつゝ、ある」とする。

威厳に満ちた渡辺と対照的に、伴はその風貌からも親しみをもつて迎えられた。草創期の学校運営と、軌道に乗つた段階での学校運営との差異、およびまだ明治の余韻を残す社会的雰囲気と、デモクラシー気運が社会全般にみまざる一九二〇年代の時代相との差異に、偶然とはいえ、それぞれの個性が照応するかたちをとつた。伴にとつて、一九二二年五月の最初の入学生に対する宣誓式の告辞は、次のような平易な、ごく常識的な内容だった（『校友会々誌』第二五号、二三年六月）。

此こ茲こに、諸君は多数の人の間から選ばれて目出度く本校に入学せられたのは、諸子の為に誠に結構であります。本校にあつても諸子の如き俊才の、将来ある人々を教育することは、誠に本



小樽光頭会（『北海タイムス』1933.1.25）

懐と致すところであります。たゞ願くは諸子が入学の頭初にもつた考を忘れることなく、三年は長からざる日で僅かのことでありますので、それをよく利用して諸子の頭初の目的を達せらるゝことを希望致します

学校に入つて徳を練り学を磨くは甚だよいことであります。その意志を実行するのは男子の本懐とするところであります。その間には、三年は短いといひども、予期せざることもあるであります。然し乍ら本来の初志を忘れず頭初の考を実行して、卒業の暁には成功を期せらるゝやうに諸子のために希望致します。

校則を守ることや社会国家のために勉学せよ、などと言わず、ひたすら学生個々の「頭初の目的」実現を尊重し、推奨する。校長就任三か月後の二三年二月には「同窓生一同へ」向けて激励の手紙を送り、「近時世間一般経済上の不況」下において、「事の張弛興廢は世の常に候へば、斯かる不如意の際こそ最も苦心の鉄石、心を鍛ふる好期と存じ候。願はくば徒らに焦心苦慮せらるゝなく、幾重にも隱忍自重して、徐ろに時運の復興を期せられ度候」(『小樽高商二代校長 伴房次郎先生書簡集』)と述べている。

### 「自由教育」の実相

「慈父」であるゆえに、学生らが「徒らに新奇を喜び、矯激を弄ぶ風」を極力戒めた。一九二〇年代半ばからの学生思想問題に関して、「学徒として研究進歩は一日も忽にすべきではない、宜しく読書もすべし、思索もすべき」としつつ、「奇矯偏執に流れてはならぬ」とする(『歳日所感』「北海タイムス」二六年一月一日)。一九二六(大正一五)年三月の卒業式の告辞でも、「秩序を尊び、礼讓を重んずるは社会生活の要諦なり、経験薄く、思慮足らず、徒に客氣に馳せ、猪突して噬臍に悔を貽すの事例乏しからず」(『小樽新聞』二六年三月六日)と警告を発する。

小樽高商の校長として毎年正月に『小樽新聞』への寄稿を常としたが、たとえば一九二九年の「年頭所感」には、次

のような一節がある。

かの階級闘争とか労使対抗とか徒らに兄弟牆まきに鬩せめぐをやめて、上下和会マし、戮力同心ろくしてひたすら国富の増殖を計らねばならぬと思ふ。とかく世の中には

よしあしを人の上にはいひながら身をかへり見る人なかりけり

で、他人を批評する前に先づ自己を反省することが肝要である、かくて各自の分を守りて発奮勉励し、内は國勢を隆昌にし、外は友邦と親善の關係を保ち、更に進んでは帝国の最高使命たる世界人類の福祉に貢献すると、これ実に大和民族の任務であり、又聖旨に副まひ奉るゆえんであると信ずる。

また、三一年元旦には、「宜しく泰西文化の精神を撰取して、更に人類發展のために寄与する所なくてはならぬ」としつつ、「近來自由とか解放とか称して往々国体にもとる者、或ひは放いつ淫靡なる文芸に沈めんする者の輩出は、なげかはしき極である」と述べる。声高に「国体」の尊崇を叫ぶことはしないが、教育者として学校内外に思想問題への警告を發しつつづけた。

『緑丘』第八七号の記事の見出しには「自由教育の慈父」ともある。ほとんど戦時教育体制期と重なる次の苦米地校長期と異なり、一九三〇年代前半を含みつつも、まだ伴校長期には校内に自由主義的な雰囲気きが漂い、それは伴による温厚柔和な人柄からにじみ出ていると考えられていた。後述するように、軍事教練事件を始めとする学内の思想事件に対しては抑圧姿勢を堅持し、「満州事変」以降には国家主義的教育に従順であったことからすると、「自由教育」を展開したという評価は下せない。とはいえ、統制的な教育の積極的主導者にはほど遠く、学生の自治的な活動を強権的に押しつぶしたわけではない。伴自身の個性にも照らして、学生の自主性を一定程度容認していた



といつてよい。

その「自由教育」の一端は、「その教育は、全体として、商業実習的であるよりも、かなり社会思想的であり、かつ文学的と言つていよいよ語学偏重主義であつた」、「何か盛りあがるような気分が教員と生徒との間にあつた」（『小林多喜二』『伊藤整全集』第二四巻）という伊藤整の回想によくうかがえる。その土壤のなかで、多喜二や整の文学への自由な志向が育まれた。

一九三三年四月、突然、伴の校長退任の噂が流れた。「伴小樽高商校長 辞意を漏す」（『時事新報』、三三年四月一六日）などと報じられた。「校長たることに既に十二年、そして今春勲二等に叙せられ、茲に功成り名遂げたのと、明年還暦を迎へることになつたので、後進に道をゆずるべく辞意を抱くに至つたもの」と観測された。伴が友人らに辞意をもらしていたことは事実のようだが、この報道を伴は否定した。これ以前に小樽市長の後任に擬せられたこともあつた。在任が長期におよぶなか、その退任の時期は迫つていた。

### 「学園の分解」を越えて

一九二三（大正一二）年三月に東京商科大学専門部に転出した武田英一（『簿記』・『商業学』）は、創立二五周年にあたり、「大正十年から十一年に亘つて起つた、学園の分解作用」、つまり渡辺校長を始め、「目星めぼしい教職員の、名古屋高商への大移動」を取りあげる。それは大変に深刻なもので、「この問題を廻つて、盛んに色々の明暗暗躍があり、表より請託が行はれ、裏より運動が行はれ、流言蜚語が伝はり、陰鬱な月日が過された。この事件を契機として、残留職員が四方に分散した」（『緑丘への追憶と希望』『緑丘』第九四号）という。

先の「渡辺校長を送り、伴新校長を戴く」にも、「当然解決さる可き未決の問題は伴校長の下にも依然として残されてる事には変りはない」という一文がある。「未決の問題」が何か具体的なものを指しているのかは不明だが、こ

これは「学園の分解」を暗示することになった。

危機の発端は、渡辺が、国松豊、高島佐一郎、石橋哲爾、小原亀太郎の四人を名古屋高商に引き連れてしまったことである（二二年一月に河合逸治〔英語〕も転出）。これで堰を切ったように、九州帝大に西尾広〔商業実践〕、二二年一〇月）が、東京商科大学専門部に武田が、大阪外語に目黒三郎〔フランス語〕、二三年四月）が、大阪高商に大平頼母〔英語〕、二三年七月）が、高松高商に根岸正一〔会计学・簿記〕、二四年一月）が、岐阜高農に小瀬伊俊〔商品理化・企業実践〕、二四年二月）が、高松高商に中村賢二郎〔英語〕、二四年三月）が、横浜高商に小幡孫二〔数学〕、二四年四月）が、文部省に小尾範治〔修身〕・「ドイツ語」、二四年六月）が、高岡高商に佐原貴臣〔経済学〕・「商業実践」、二五年七月）がそれぞれ転出している。主に新設の各高商に人材を提供する立場となった。

また、二二年二月には大西猪之介が急逝して、大きな衝撃を与えた（後述）。二四年九月には加藤録蔵〔「経済学」・「商業学」〕が、二五年四月に大熊信行〔「経済原論」〕がそれぞれ病気で辞職している。

こうした相次ぐ転出や辞職に対して、結果的に小樽高商卒業生を中心に、その後の学園の基軸を形成するような補充の人事が進められ、むしろ以前に比べても盤石の陣容が整った（詳細は後述）。『校友会々誌』第三三三号（二四年六月）の「同窓事務室から」の欄には、「先学年末まだ職員員の移動があり、伴先生も他人の知らぬ苦勞をなされたのでありますが、もうこれで動くだけは動いたと私には観察されます。これからこの方面の苦勞はすべて新しい計画による建設へと向けられることでありませう」とある。武田も、「この間に処して、伴校長の苦心は、唯々同情に堪へないと同時に、機宜の処置によつて、今日見るが如く、学園の隆盛を招致した」（緑丘への追憶と希望）と述べる。

緑丘のルネサンス

伴の校長就任から数年を経て、人事をめぐる「学園の分解」も収束し、「陰鬱な月日」も次第に消滅していった。その恩恵を受けて、一九二六（昭和元）年卒業の西野嘉一郎は、「校内には新鮮な空気がみなぎっていた」（『思い出の記』『緑丘五十年史』）という。図書館に入りびたっていた同期の吉田秀夫は、図書館便所の落書き（『壁新聞』）について、「在学した頃の初めの中はこの壁新聞の主要論題は、大西経済学であつた。大西全集発刊の遅延が壁新聞の全面的弾効を受けたのはこの頃の事である。その中に南教授着任の影響が現れて来て、経済哲学の論争が次第に旺さかんになつて来た。そして私が卒業する頃には、マルクス主義が可成り有力な地位を占めてゐた」（『図書館の便所』『緑丘』第九四号）と回想する。また、同期の西川正巳も「僕達が入学した当時の小樽高等商業学校には、非常に明るい自由な空気が漲っていた。入学試験という暗い重苦しい関門を経て上級学校へ入ったときには、誰しも何より明るい青春の気分を満喫するものであるが、大正末期の母校の空気の中には、特にそうした明るさと自由があつたように思う」（『西川正巳遺稿集 ひとすじの道』）と述べる。

西野や吉田・西川と入れ違いに入学した板垣与一にとって、「深い自省的精神と激しい究学的情熱とが渾然融合した緑丘」で成長していく契機の一つは、「入学当初の浮誇な中ぶらりんの生活態度を根底から破壊して、全く新鮮なる意気と覚悟を以て自己を鍛え上げる精神力、心構へを吹き込まれた」ことであつた。さらに板垣は、「吾々の学問的情熱が何よりも先づ全集発刊を機縁として蕩漉したもの不思議ではないか、大西ルネッサンス」（『AUDITOR TEMPORIS ACTI』）という。『大西猪之介経済学全集』全一一巻は、南亮三郎と高島佐一郎（名古屋高商）の編集によって、二七年五月に刊行された。この「大西ルネッサンス」から類推すれば、一九二五年前後の数年間は「緑丘ルネッサンス」と呼ぶことも許されよう。小林多喜二や伊藤整がこの時期に輩出したことは、偶然ではない。

『校友会々誌』第三四号（二四年八月）の「同窓会事務室から」では、野球・庭球・柔道・剣道各部の全国高専大会

出場、東京商大進学という好成绩を紹介し、「運動競技と学業とに対する堅実な態度につき、会員諸兄は母校学生に大なる期待を持つて下さつて差支ない」と断言する。翌二五年には四月の「学校規則」改正による選択科目の増加と二期学制の実施、六月の学校新聞『緑丘』の創刊、一月の山上グラウンドの竣工、二六年四月の第一四臨時教員養成所の設置、七月の研究雑誌『商学討究』の創刊がつづく（いずれも詳細は後述）。二七年度の卒業生は、「三年の間に五ツの収穫を得た」（先の四つに加え、武道場の新築）ことに加え、「敬愛し来つた諸教授が漸次中央学会に乘出して、我学園の意気を揚げつ、ある」として、「此の喜しき進展」（丘を去る）『緑丘』第一五号、二七年一月二六日付）と述べている。

その高揚感からは、「自由の学園」たらんという希求も導かれる。『緑丘』第六号（二五年二月二七日付）の論説「大正十四年を送る」では、「金力に走り、権力に媚び、信念を失ひ、戦ひ陥る、かゝる泥海に、毅然として聳ゆる緑ヶ丘の高台には、平和な自由研学の学園が静かに立つてゐる」と自負する。

### 「緑丘の沈滞」

一九二〇年代末、思想問題への抑圧の強まりや恐慌下の就職難などが重なるなかで、沈滞の打破が叫ばれるようになる。一九二八（昭和三）年四月二六日の『緑丘』（第二四号）の「新入生を迎えて」では、「我緑丘学園は、あらゆる意味に於て過去の沈退したる空気を一掃し、雄々しく更新の門出に向ふべき時期に当面してゐる」と述べる。同号の校友会規則の改正を求めた記事にも、「現在の学校の状態を見ると、實際情けなくなる」として、「今やしばらくの間溜つて腐つてゐた水が段々その量を増して溢れ出して来た」、「我々学生が我々の学校の再興に対して、学校側に後れをとつてはならない」という一節がある。

さらに『緑丘』第二五号（二八年五月三〇日）は「学園を充実させよ」と題する論説で、「我学園の内部を顧みて、其

処に沈退的<sup>ママ</sup>な一種のダレ気分が存在する」としたうえで、次のように論じる。

吾々が入学して来て、机上の古い落書などにより、既に昇格運動の歴史があつた——学園の基礎の漸く固まつた七、八年前に学生の熱烈な運動があつた——のを知つて一種異様の感に打たれた事があつた。(中略)斯かる先輩の遺業と現在の学園の之種問題に対する驚くべき冷淡さとを比較して、歎声を発するのみである。

学生の自治的精神は古くから叫ばれ来つた有名無実の合言葉であつたが、今や其の実行期に移り、北大文代会の自主化運動等、吾々は各種学校に於いて、之れが熱烈な要求を見るのである。

自治的精神の洗礼を受けていない学園の雰囲気、沈退気分の起るのは当然である。

第一次大学昇格運動がここで「歎声を発する」ほど全学生を巻き込む「熱烈な運動」であつたわけではなく、また「北大文武会の自主化運動」も全学生的なものではなかつたが、「学生の自治的精神」の發揮によるさらなる学園の充実を強く求める論者にとっては、現状は覇氣に乏しい「沈退的<sup>ママ</sup>な一種のダレ気分」と映り、焦慮を募らせる。

その後も、新年度を迎え、新入生を前に「緑丘の沈滞」を指摘し、「新緑丘精神の台頭」(『緑丘』第三〇号、一九二九年三月三日)への展望が毎年繰り返されるが、三〇年代になると「緑丘の沈滞」自体にも無関心な学生が増えてくる。創立二〇周年の『緑丘』記念号(第五七号、三二年一〇月三〇日)の論説「回顧より未来へ」では、「真理の殿堂としての学園も、今は何等の清新さを持たない」と手さびしい。『緑丘』のコラムから、さらに二、三を引く。

「ファツシヨ政治と議会議会政治のカクテル内閣出来上る、だが緑丘内は唯ウワツシヨウワツシヨの流行か、目覚めよ学人」(第六三三号、三二年五月二九日)

「初夏の緑丘に吹く敗残の悲風、南に大学の転落を歎じ、北に緑丘スピリットの転落を嗚つ」(第七四号、三三年六月二五日)

「学園の危機である。灰色分子よ、清算されて意気を持つたら如何だ。学園の大半よ」(第七八号、三四年三月二六日)

こうした沈滞自体を意識しないまでになってしまった緑丘の現状への打破となるのが、次章で述べる苦米地英俊新校長の校内改革と、学園の戦時体制への突入である。

これに関連して、苦米地新校長就任につながる学園の変容が起りつつあった、という観測もある。三四年三月卒業の学年の「座談 緑丘時代を振り返って(東京地区座談会)」(小樽商大昭九会「丘友便り」第一七号)によれば、「街の軍国調一色と違って学園では自由が一杯、のびのびとしていた」雰囲気が、三三年後半から「反自由主義の締め付けが非常に厳しくなってきた」という。「伴さん、中村さん、南さんらの所謂自由派と、それに対立する苦さん、木曾さん、それに恐らく配属将校も加わっての軍国主義同調派が激しく争い、結局苦さん一派が勝ちを占めた」(「中村さん」は中村和之雄)。新聞『緑丘』に対する学校側の検閲が強まったことと、「学校では苦さんが表に出て来て、伴さんの発言が弱くなってきた」ことが関連づけられる。この対立の背景には、軍国主義への大きなうねりとともに、緑丘学園における「プラグマティズムかアカデミズムか」の主導権争いがあったようである。

それでも伴校長の在任中、小樽高商にはまだ自由主義的な空気が漂っていたという証言もある。一九三五年卒業の平間義は、大西猪之介の影響が「現諸教授の頭脳を通して今も学園に流れてゐるのを見ると、私の居た当時の学園が専門学校に珍らしいアカデミックな雰囲気を多分に蔵してゐた様に思はれる。従つて昭和八、九年頃の緊張した社会状況の中にあつても、比較的自由な真摯な気風がみなぎつてゐた」(「頑張ったあの頃」『緑丘』第九四号)と語る。

## 第二節 教育体制の展開

### 最初のカリキュラム改革

伴校長在任の間、二度の大きな学科課程（カリキュラム）改革がなされた。一度目は一九二五（大正一四）年四月の年度から実施されたもので、『校友会々誌』第三四号（一九二四年八月）には「要点は、従来の三学期制をば廢して北海道に特殊なる運動季節に支障なき方策によつて二学期制を採用し、成績の評定と発表とに改良を加へ、再試験制度を採つて従来の落第の制度の欠陥を除き、学科の整理を行つて三年の課程を更に効果あらしめ、選択科目を設けて以て学生の自由研究の余地を大にした等であります」と報じられている。

文相宛に「学校規則」の改正案を稟請したのが二四年六月二八日であることから、校内では以前から検討が進められていたと推測されるが、その経緯は不明である。先の『校友会々誌』に「之が完全に実行さる、暁には、授業上の面目が一新せらるゝことでありませう」とあるように、開校以来の初めての大幅なカリキュラム改革の断行であった。文部省に提出した「規則改正案」の資料には、次のような改正理由が付されている（『小樽経済専門学校規則』第三冊 国立公文書館所蔵）。

(一) 今回本校学科課程表全般ニ亘リ比較的大改正ヲ加ヘタキ理由ノ重ナルモノ、次ノ如シ

(イ) 時勢ノ進歩ニツレ、高等商業学校卒業者ニ対シ社会ガ要求スル各種ノ知識技能ニシテ、従来本校ニ於テ教授シ居ラサリシモノヲ新ニ加ヘタルコト

(ロ) 第二外国語ノ教授ヲ有意義ノモノトシテ之ヲ課スル目的ヲ貫徹センニハ、之ヲ第一学年ヨリ教授スル

必要アルコト

(ハ) 第三学年生ニ対シ毎週六時間<sup>付</sup>選択科目制度ヲ採用シ、生徒卒業後ノ志望ニ応シ、其ノ最モ必要トスル学科目ヲ任意選択履修セシメ、以テ一層実社会ニ処スル上ノ便宜ヲ計リタルコト

(ニ) 従来一学年ニ課スル学科目数余リニ多キニ失シ、生徒学習上ノ効果ヲ減退スル傾ニアルガ故ニ、出来得ル限り一定時ニ学習スル学科目ヲ減少シタルコト

(三) 一週ノ教授時数ヲ三十四時間ニ減シタルハ、従来ノ経験ニ鑑ミ、三十五時間ハ余リニ多キニ失スルガ故ナリ

(四) 前表中ニアル「科学一般」ナル学科目ノ内容ハ物理、化学、博物、生物学等ノ総称ニシテ、商業学校出身者ハ他ノ学校出身者ニ比シ、此ノ種ノ知識程度比較的低キニ失スル傾向アルガ故ニ、之ガ補充センガタメナリ

(五) 商工実践ハ従来ノ擬営実践及企業実践ヲ併称シタルモノナリ

(六) 海外経済事情ハ専ラ英語ヲ用ヒ、主トシテ海外ノ地理、財政、貿易、商工業等ニ関スル一般経済社会時事問題ヲ研究セシムルモノアリ

第三條 學科目及履修ノ方針

科目	第一学年		第二学年		第三学年	
	履修	単位	履修	単位	履修	単位
英語	○	10	○	10	○	10
第二外國語	○	5	○	5	○	5
算術	○	5	○	5	○	5
商業地理	○	5	○	5	○	5
商業簿記	○	5	○	5	○	5
商業英語	○	5	○	5	○	5
自然科	○	5	○	5	○	5
物理	○	5	○	5	○	5
化学	○	5	○	5	○	5
生物	○	5	○	5	○	5
衛生	○	5	○	5	○	5
公民	○	5	○	5	○	5
歴史	○	5	○	5	○	5
地理	○	5	○	5	○	5
美術	○	5	○	5	○	5
音楽	○	5	○	5	○	5
体育	○	5	○	5	○	5
職業科	○	5	○	5	○	5
商工実践	○	5	○	5	○	5
海外経済事情	○	5	○	5	○	5
英語	○	5	○	5	○	5
第二外國語	○	5	○	5	○	5
算術	○	5	○	5	○	5
商業地理	○	5	○	5	○	5
商業簿記	○	5	○	5	○	5
商業英語	○	5	○	5	○	5
自然科	○	5	○	5	○	5
物理	○	5	○	5	○	5
化学	○	5	○	5	○	5
生物	○	5	○	5	○	5
衛生	○	5	○	5	○	5
公民	○	5	○	5	○	5
歴史	○	5	○	5	○	5
地理	○	5	○	5	○	5
美術	○	5	○	5	○	5
音楽	○	5	○	5	○	5
体育	○	5	○	5	○	5
職業科	○	5	○	5	○	5
商工実践	○	5	○	5	○	5
海外経済事情	○	5	○	5	○	5

学科目表 (1925)

科目	第一学年		第二学年		第三学年	
	履修	単位	履修	単位	履修	単位
英語	○	10	○	10	○	10
第二外國語	○	5	○	5	○	5
算術	○	5	○	5	○	5
商業地理	○	5	○	5	○	5
商業簿記	○	5	○	5	○	5
商業英語	○	5	○	5	○	5
自然科	○	5	○	5	○	5
物理	○	5	○	5	○	5
化学	○	5	○	5	○	5
生物	○	5	○	5	○	5
衛生	○	5	○	5	○	5
公民	○	5	○	5	○	5
歴史	○	5	○	5	○	5
地理	○	5	○	5	○	5
美術	○	5	○	5	○	5
音楽	○	5	○	5	○	5
体育	○	5	○	5	○	5
職業科	○	5	○	5	○	5
商工実践	○	5	○	5	○	5
海外経済事情	○	5	○	5	○	5

一、商業中商部ヲ付シタルノ商業學校出身者ノ履修方針ニ付テハ、商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 二、第一外國語ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 三、第二外國語ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 四、算術ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 五、商業地理ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 六、商業簿記ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 七、商業英語ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 八、自然科ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 九、物理ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 十、化学ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 十一、生物ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 十二、衛生ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 十三、公民ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 十四、歴史ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 十五、地理ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 十六、美術ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 十七、音楽ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 十八、体育ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 十九、職業科ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 二十、商工実践ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ  
 二十一、海外経済事情ノ履修方針、商業學校出身者及商業學校出身者以外ノ履修方針ニ準ズルコトナリ



まずこの改正の第一眼目である「時勢ノ進歩ニツレ、高等商業学校卒業者ニ対シ社会ガ要求スル各種ノ知識技能ニシテ、従来本校ニ於テ教授シ居ラサリシモノヲ新ニ加ヘタルコト」は、学科目表の上ではつきりしないが、三年生における「選択科目制度」のなかに具体的に現れる。表の「備考」欄には、次のように規定されている。

三、前表選択学科目ノ種類ハ、左記学科目中ニツキ学校長ニ於テ便宜之ヲ定ム

(イ) 商業学ニ属スルモノ 金融、交通、保険、会計学、商工実務

(ロ) 経済学ニ属スルモノ 経済原論、経済学史、統計学、社会政策、農業及植民政策

(ハ) 法学ニ属スルモノ 憲法及行政法、国際法、手続法、破産法、商事法令

(ニ) 其他 論理学、心理学、社会学、文明史、国際事情

特に「社会政策」・「手続法」・「破産法」・「心理学」・「社会学」などは、それまでの学科目中になかったもので、「時勢ノ進歩」に相応した「社会ガ要求スル各種ノ知識」といえよう。先の理由では、「一層実社会ニ処スル上ノ便宜ヲ計リタル」とされる。

次に大きな変更は、第二外国語を一年生から配当したことで、在学中一〇時間（それまでは七時間）が振り向けられる。その分、英語の時数が三年間で、従来の二九時間から二五時間（ただし、商業学校出身者は二七時間）に減る。

また、一週間の時間数も「三十五時間ハ余リニ多キニ失スル」として、学生の負担軽減のために三四時間となる。

「備考」欄には「学校長ノ承認ヲ経テ特定学科目研究上ノ指導ヲ受クル者ニ課スル選択科目時数ハ、毎週四時間

トス」という規定がある。「特定学科目研究上ノ指導」とは、ゼミナールを指すと推測されるので、卒論を含めたゼミ指導は三年次の週四時間となる。

こうした学科課程の大幅な変更は、「時勢ノ進歩ニツレ、高等商業学校卒業業者ニ対シ社会ガ要求スル各種ノ知識技能ニシテ」という認識があるように、前後して他の高商および新設の高商によっても進められていた。

山口高商では早くも一九一八年一〇月、「(一) 授業時間数、(二) 法律学・経済学、(三) 商業学・商業地理、(四) 英語・体操・書法及商業文、(五) 第二外国語、(六) 数学・理化学・簿記及計算学、(七) 応用理学及商品学の各部門に互つて大規模の学科改正を行ふと共に、(八) 新に選修科目を設置」という改正を試行的に実施し、さらに二二年六月にはこれら「試行学科課程の精神を更に拡大」する方向で、再改正をおこなっている。選択科目をみると、一八年改正時の「計算学・経済学・商業学・統計学・外国語及東洋経済事情」に、二二年改正で「新しく社会学を加へ、更に経済学・法律学の内容区別を明確ならしめん為、前者は之を経済原論・経済政策論・財政学とし、後者は之を法学通論・民法・商法とした」という(以上、『山口高等商業学校沿革史』)。

長崎高商では一九二三年四月の「画期的の大改変」により、「時代の進展につれ、従来の教授科目は、総合的な長所はあつたが、其数過少に失するに至り、一科を数目に分つて悉く之を履修させる一方、選択科目及び随意科目を新設して生徒に自由自学の便を与へ、又本科第二学年には予備演習、同第三学年には演習の制を設けて、生徒各自の研究を指導し、一層外国書学修の実力を養はしむると、もに、研究科目に対する精深の知識を得しめること、なつた」(長崎高等商業学校三十年史)。

小樽高商の学科課程の改編も、このような高等教育全般の大きな変化の流れのなかに位置づけられる。総じて授業時間数を減らす一方で、選択科目を設置し、学生の主体的な学習を促そうとしている。

「成績表」から実際の履修状況を一瞥しよう。一九二八年度の三年生のあるクラスを例にとると、一七の必修科

目（「第二外国語」を含む）のほか、「農業及殖民政策」「哲学概論」「金融」「保険」「文明史」「心理学」「商工実務」が選択科目となっている。そのなかでは高岡熊雄の「農業及殖民政策」は大半の学生が履修するのに対して、「文明史」（室谷）は四名（五〇名中）、「金融」（平尾）は五名、「心理学」（藤井）は六名、「哲学概論」（藤井）は七名という具合である。学年全体では三〇名前後の、関心と熱意のある学生が集まったはずで、かなり贅沢な授業が展開されたといえよう。

### 二学期制の採用

この「学校規則」の改正により、開校以来の三学期制が二学期制に変わった（すでに長崎高商では一九一一（明治四四）年六月から、山口高商でも一五年四月から二学期制を採用しているほか、新設の高商もすべて二学期制であった）。第一学期が四月一日から九月二〇日まで、第二期が九月二日から翌年三月二日までである。春季休業が四月一日から一〇日まで、夏季休業が七月二日から九月一〇日まで、冬季休業が十二月二日から翌年一月七日までと規定された。

改正の理由は、「三学期制ヨリニ学期制度ノ方、凡テノ点ニ於テ好都合ナルニヨル」とされるにとどまるが、試験に追われる回数を三回から二回に減らしてほしいという、学生の要望も考慮されたと思われる。これにより従来に比べて一〇日間程度の余裕ができるが、それは授業時間の一時間減少を埋め合わせることになったらしい。

なお、当初、夏季休業の開始が一〇日間早まる案も検討されていた。その理由は「例年七月十日ヨリ二十日ニ至ル間ハ、当地方ニ於テ暑氣最モ烈シキ季節ナルノミナラズ、本校所在地付近ニハ濃霧頻繁ニ発生シ、為之寄宿舎生ニシテ各種ノ病氣ニ冒サル、者連年少ナカラサル」というものであったが、他高商に比べて休業期間が長期にわたると判断されたためか、この部分は取り下げられた。

しかし、一九二六年の九月上旬の試験では「種々の点に於て不便の点ある」（『小樽新聞』一九二六年六月二七日）として、一月上旬の実施となる。二学期制に移行したばかりの二五年には九月に一学期末の試験期日が設定されたため、その変更を望む声があがっていた。そこでは対案として、七月中旬の試験期間が挙げられた（『緑丘』第三号、二五年一月六日）。これに対して、学校側で三学期制の復活を検討すると、学生側は反発した。『緑丘』第一八号（一九二七年六月二四日）は、「突発した三期制度へ 復帰の噂に驚いて 生徒反対の氣勢を揚ぐ」と報じる。五月一七日、学生大会を開催し、「徒に脅威的試験を以てして学生一般を緊張せしめ得る事の可能を信じるは誤りであつて、而も制度を改正するに何等生徒の意見を徴しなかつたは遺憾であるとの理由により、現状維持を希望する旨決議し」、学校当局に申し入れた。その結果、この復活案は撤回されることになった。

同記事は「試験に関する事文に、生徒の動揺は可成甚しかつた」と結ばれるが、そもそも二学期制への移行は学生の長年の希望だった。この問題に関連して、三月卒業したばかりの「一卒業生」は『小樽新聞』に投稿し、次のように述べている（一九二七年五月二三日）。

現制度である二期制は、丁度小生の一年生の時に制定されたものです。当時の在校生一同は、従来の三学期制の弊害を痛切に感じ、その結果幾多の波瀾曲折があつたにも拘らず、遂に吾々の努力は酬ひられ、吾々の熱望が容れられて現在の二期制度の制定を見るに至つたのです。（中略）

試験地獄の弊害は今更喋々を要しないことでせう。（中略）更に一年の殆ど半を雪の下に過ごさねばならぬ小樽の特殊事情の下では、学生は春の来るのをどんなに期待してゐるでせう。春から夏秋にかけて、研究に運動にどんどん延びてゆく時季です。しばしノートをはなれて、充分活躍すべき時季に、試験のために脅迫されて、真の自己の実力の涵養を阻止されるなんて学生にとつての大恐慌です。

学生大会で「制度を改正するに何等生徒の意見を徴しなかつたは遺憾である」という決議をしたことは、学生の自治的な気運が高まっていたことを示そう。「二卒業生」も、「学生の自由獲得」「学生の自治確立」をめざせ、と呼びかけている。

なお、この時期の『学校一覽』掲載「教授要目」を見る限りでは、科目の統合・分化などはあるが、第二章で紹介したものと大きな相違はない。もちろん、実際の授業の程度・内容に変化はあるはずだが、それらを知る術はない。

### 試験の諸相

「学校規則」改正に戻る。第一条は無試験検定（推薦入試）についての規定だが、その出願資格が変更されている。それまで中等学校の最後の三学年間、「其ノ学年級ノ及第者全数ノ三分ノ一以上ノ席次」であることなどの出願条件を、「五分ノ一以上」などときびしくしたのである。「近時中等学校卒業生ノ数年々増加ノ傾向アル」という理由が付けられる。

「再試験」制度も整備された。病気などによる追試験は認められていたが、再試験の規定はなく、したがって「学校規則」第二九条（「前条ノ考査ニ合格セサル者ニハ、次学年ノ始ヨリ原学年ノ課程ヲ再修セシムルモノトス」）により、いわゆる留年となるが多かった。これを是正し、「学年評点五十点未満ノ学科目ニ就キテハ、其ノ修了ヲ認メス、但修了ヲ認メラレサル学科三科目以下ニシテ、且学科総評点ノ平均六十点以上ヲ得タル者ニ対シテハ再試験ヲ施行スルコトアルヘシ」（成績考査ニ関スル細則）という救済策を設けることになった。

やや後年のこととなるが、「学業成績」のつけ方は次のようなものであった（小樽商大昭和十三年会『緑丘回想（卒業五十周年記念）』）。

学業成績は一学科目一〇〇点を満点とし、五〇点未満のものは修了を認めないとされていた。五〇点未満の成績をわれわれは「ツカム」といい、六〇点以下の成績を「低空飛行」といつていた。

学業成績の評点や成績序列は公表しないことになっていたが、父兄には欠点科目と平均点を記入した通知書が送られてきた。平均点は、優秀甲、乙、丙、良好甲、乙、丙、普通甲、乙、丙、不合格の十段階に分れていた。修了を認められない学科三科目以下で且つ学科総評点の平均六〇点以上を得たものに対しては再試験が行われた。再試験は七月と十二月に実施された。己むを得ない理由によって試験に欠席したものについては、追試験の制度があった。追試験得点の十分の八がその学科の成績評点となっていた。

また一学年間の総欠席が授業総時数の十分の四を超えた場合や無届欠席が総欠席時数の二分の一以上で、その総欠席時数が授業総時数の十分の二を越えた場合などには、試験が受けられないことになっていた。

第二学期の期末試験を終えると、進級教官会議によって進級者が決まる。一九三二年四月の新年度は、「一年生の落第者約五十名、二年生約十五名」という「痛ましき清算」（『緑丘』第六号、三年四月二六日）をもって迎えた。また、三五年三月二八日の『緑丘』第八六号は、「悲喜哀楽の進級者発表」と題して、「二年―三年 一七六名」、「一年―二年 二一三名」が進級可能（さらに追試験合格者が加わる）と報じる。「事故者」、つまり留年者が決定したのは「一年十二名、二年八名」、再試験の機会を与えられた者は「二年五七名、一年七九名」で、「発表を踵を切らして待つてゐた学生は、夜に至るも三々五々校門をくゞり、喜ぶ者、悲しむ者、赤点を見て苦笑する者等、忙しい総決算日の光景を展開した」。一年に留まることになった二二名のなかで二度目の者が半数いたという。

その学年末試験風景について、先の『緑丘』は、「一、二年を通じてコレボンが最も学生を苦しめ、又民法等も一

年生に悲鳴を上げさせ、二年では手塚教授が俄然予想を裏切り、大野教授の為替も伝統を裏切つたとの事である」と伝える。「予想を裏切」とは、いわゆる過去問になかった出題がなされたということだろう。

再試験や落第などの事態を避けようと、カンニングに走る学生もいた。「緑丘」第二一号（七年二月九日）に「怒号生」は「学期試験に際し、カンニングの多かつたのを遺憾とします」と投書する。その理由として「二学期制の為、量の多い事」「ノートの制度なる事」「論文制が行はれない事」「監督不備なる事」「点数過重視の気分を皆もつてゐる事」をあげる。また、一年生も「不正への驚愕」として、「本校に於て始めて「堂々たる」不正の横行を経験した」と投書する。

三三年二月二四日の『小樽新聞』「三三年春行状記」には、試験を前にしたある高商生の姿——「彼はホンの申し訳的にノートの整理をする、まるで出席簿みたいに、サボツたところだけが真つ白に抜けてゐる彼のノートだ、サボらないやつのを借りて、ブランク一頁埋るごとに白銅十銭一枚をその報酬として机の上に置く、それが二十銭になつたとき、机からポケットとの中に置きかへて、彼は街の喫茶店へ出かけて行く、そこで彼は一杯のコーヒーを一時間かかつて飲みながら、つらつら試験地獄の抜け道カンニングの新技巧を考へる」——が描写される。

## 二度目のカリキュラム改革

一九二五年度の大福なカリキュラム改革について、三二年度に二度目の大きなカリキュラム改革が実施された。

この前後の『緑丘』が欠号のため、学内の改正気運がどのように醸成されたのかは不明であるが、三一（昭和六）年四月八日付の文相宛「本校規則中改正許可申請」には、次のような「改正理由」が付せられている（『小樽経済専門学校規則』第三冊）。

軌近実業界異常の發展変遷を遂げ、学界亦斬新分化の学科目を加へ、従来之学科課程にては規定の修業年限時数を以て社会の趨勢に順応し、實際に役立ち実務に創意を懐かしむる教育を施すことを期し難きに至る。修業年限の延長は頗る望ましきも、実現容易ならざるを慮り、授業時数の増加も亦強いて行はゞ不可能にあらざるべしと雖も、其結果は直ちに体育運動を抑圧するに至らんことを恐る、本学科課程改正理由は序上明白なるが如く、現規定之修業年限及授業時数を変更することなく、新学科目を取入れ、社会之要求に適応し、生徒の将来之目的及びその能不能に従て学科目を選定せしめ、以て教育之効果を高むる一方、又生徒之保健を顧慮し、体育運動を益々奨励し得るやう課程を編制せんとす。これ本改正之眼目とする所なり。

これを含む「学校規定」は六月一七日の文部省令第一八号によつて改正されたが、おそらく四月の年度開始とともに、実際の授業は先行的に進められていたと思われる。この学科課程の「改正之要点」は次のようになっていた。(同前)。

- 一 必修学科目数を減少したること 商業科目は通論の性質を帯ぶるもののみを必修とす
- 二 英語の必修時間を五時間とす 但し第一学年は従来通りとす
- 三 第二語学は総て選択科目とし、第一学年第二学期より授業開始のこと、す
- 四 選択科目数を増加したること
- 五 英語の選択科目二時間選択、四時間選択の二種となしたること
- 六 所謂リベラル、アーツに属する選択科目を加へたること
- 七 学科目中従来より授業時数を減少し一学期完了となし、授業法を改良し同一能率を上げ得る様になしたる



こと

八 研究指導の制度を課程に加へたること

まず大きな特徴は、必修科目を精選し、選択科目を増やしたことである。法律学では、「法学通論」「民法」「商法」が必修に、商業学では「商業通論」「経営論」「金融論」「為替論」「市場論」「交通論」「保険論」「外国貿易実務」が必修に、経済学では「経済学原論」「貨幣論」「商業政策」が必修とされた（他に主な必修科目は「商業簿記」「会计学」「財政学」「統計学」など）。英語も二年次で四時間、三年次一学期で四時間、同二学期で二時間の減少となる（一年次は従来通り）。それを補うために、第二外国語に英語（甲四時間、乙二時間の二コース〔ただし、「甲八成績優良者ノミニ之ヲ課ス」〕を正規におくこととした。四時間コースのクラスはAクラスと呼ばれた。

選択科目は、旧課程の二〇科目から四一科目に倍増となる。ただし、旧課程で選択科目とされていた「会计学」「財政学」「統計学」は、必修科目に変更された。これに関連して、第二外国語がすべて一年次二学期からの選択科目となる（「支那語」という名称は「中華民国語」に変更される）ほか、「哲学史及哲学概論」「教育学」という「所謂リベラル、アーツに属する選択科目」（「論理学」「心理学」「社会学」を配置済み）が加わった。

すでに二五年度の学科課程改正で「特定学科目研究上ノ指導」の実施が可能になっていたが、この改正で「研究指導」（ゼミナール、最大五時間）が正式に課程上に位置づけられた。所属人数は一五名までとされる。選択必修のため、「研究指導」を受けない学生は三時間に相当する選択学科目を履修することとした。

これらにより、学生が選択できる学科目数は一年次二学期の二時間、二年の九時間、三年の一一時間となった。いずれも週三四時間中の割合であり、三学年を通してみると、この学科課程では全体の時数のほぼ二割が選択科目に割かれたことになる。

選択科目・時数の多さ

戸田正志『商業教育総論』（一九三七年刊、戸田は愛知県半田商業学校長）は、「高等商業教育の現状」を分析するなかで、官公私立の高商の教育を一覧し、「選択科目を最も広範囲に行つてゐる一例」として小樽高商をあげている。二度目の「学科課程」改正の結果、「選択科目数は四十科目の多数に上り、その中より各自の目的により自由に選択せしめてゐる」とする（選択科目の最も少ないのは東京商大付属商業専門部で、第二外国語のみが選択科目である）。

小樽高商における一九三一年（昭和六）度の学科課程改正は「現実業界異常の発展変遷を遂げ、学界亦斬新分化の学科目を加へ、……社会の趨勢に順応し、実際に役立ち実務に創意を懐かしむる教育を施すこと」という現状認識の下でなされたが、それは他の高商でも同様で、いずれもこの前後の時期に大幅な学科課程改正を実施している。

山口高商の二九年五月改正の学科課程では、「経済学及法律学の二学科は国家観念の養成に資せんが為、三箇年間の授業時数総計を一週一時間宛増加」、<sup>づ</sup>「会計学の時数を一週一時間増し、新に経済統計を新設して夫々<sup>し</sup>斯学の発達と社会の要求に<sup>し</sup>応ぜしめ」などが試みられている。選択学科目は外国語を含めて一四あり、それらから三年

学年	科目	時数
第一学年	英語	12
	算術	12
	簿記	12
	国語	12
	社会科	12
	理科	12
	体育	12
	音楽	12
	美術	12
	職業科	12
選択科目	12	
第二学年	英語	12
	簿記	12
	国語	12
	社会科	12
	理科	12
	体育	12
	音楽	12
	美術	12
	職業科	12
	選択科目	12
第三学年	英語	12
	簿記	12
	国語	12
	社会科	12
	理科	12
	体育	12
	音楽	12
	美術	12
	職業科	12
	選択科目	12

学年	科目	時数
第一学年	英語	12
	算術	12
	簿記	12
	国語	12
	社会科	12
	理科	12
	体育	12
	音楽	12
	美術	12
	職業科	12
第二学年	英語	12
	簿記	12
	国語	12
	社会科	12
	理科	12
	体育	12
	音楽	12
	美術	12
	職業科	12
	選択科目	12
第三学年	英語	12
	簿記	12
	国語	12
	社会科	12
	理科	12
	体育	12
	音楽	12
	美術	12
	職業科	12
	選択科目	12

学年	科目	時数
第一学年	英語	12
	算術	12
	簿記	12
	国語	12
	社会科	12
	理科	12
	体育	12
	音楽	12
	美術	12
	職業科	12
第二学年	英語	12
	簿記	12
	国語	12
	社会科	12
	理科	12
	体育	12
	音楽	12
	美術	12
	職業科	12
	選択科目	12
第三学年	英語	12
	簿記	12
	国語	12
	社会科	12
	理科	12
	体育	12
	音楽	12
	美術	12
	職業科	12
	選択科目	12

学科目表 (1931)

間で四科目（一二時間）を選ぶことになっている。

三〇年四月改正となった長崎高商の場合は、「(一) 一般商業学及び経済学の基礎的学科としての通論及び原論類学科目の新設又は教授時数の増加、(二) 英語教授時数の増加、(三) 予備演習の廃止、

(四) 選択学科目の増加」などという内容で、授業時数も週三四時間減らし、「生徒に自学自習の機会を多からしむる」(『長崎高等商業学校三十年史』) ことが意図された。英語以外の外国語選択を除き、選択科目は三年次に一八科目のなかから六科目（一二時間）を選ぶ。

二四年の「創立当時制定の学科課程が羅列主義であつて、基礎学と専門学との間に体系が樹てられてゐない憾みがあり、その合理的整頓は爾來多年の懸案であつた」横浜高商では、三二年四月から実施された。「学科の体系的配列」のほか、「第三学年は選択科目を主体とする」、「ゼミナール重要視」を柱とする新学科課程への変更である(『横浜高等商業学校二十年史』)。選択科目の履修は三年次からで、英語以外の外国語を除き、一九科目中から四科目ないし五科目（八時間ないし九時間）を選ぶことになっている。

四年間の検討を経て、二八年六月に実際された和歌山高商の学科課程改正でも、「旧課程では第三学年のみに配当されてゐた選択科目を、第一、第二学年にも配当して、生徒が各自専攻せんと欲する学

The image contains three tables representing subject catalogs for 1931. Each table has multiple columns, likely representing different years or levels of study. The text is in Japanese and includes a title '学科目表 (1931)' at the bottom. The tables are arranged vertically and contain columns for subject names, credit hours, and other details. The text is in Japanese and includes a title '学科目表 (1931)' at the bottom.

学科目表 (1931)

科を修学し得る機会を能ふ限り多く与へる」方針に立ち、第二外国語を含めて三三の選択科目から六科目以上（八時間から一五時間）を選択するとした。こうした選択科目の重視は「教授ニハ其講義ノ自由ヲ、生徒ニハ其ノ聴講ノ自由ヲ与ヘル事ニ依ツテ、教育ノ本質ヲ明カニセントスルモノ」（「時間表改正ニ関スル私見」、以上『和歌山高商十年史』）という発想から導かれていた。それは、小樽高商を含めて、多くの高商に共通する流れだった。

このようにみると、やはり小樽高商は他高商に比べて、「選択科目を最も広範囲に行つてゐる」（戸田）といえる。その幅広さも際立ち、「哲学」や「社会学」「心理学」などの「リベラル、アーツ」と認識されているものを積極的に取り入れている点にも特徴がある。これは、戦後の新制大学への単独昇格にも寄与したといえよう。

ここでも実際の履修状況をみよう。三三年度の三年生のAクラス（選択英語四時間の、成績優秀クラス、したがって、このクラスは全員がすんなりと卒業している）を例にとると、一九の必修科目（このうち、選択英語は「解釈講読」二つと「fast reading」の三科目）のほか、「研究指導」を含めて二〇の選択科目が開講されている。そのうち、「経済学史」（手塚）、「手続法」（木部）の受講者は一人（二八人中）、「殖民政策」「農業政策」（高岡熊雄）は二人ずつであった。なお、必修課目で「統計学」を担当する手塚の試験成績は他科目に比べて低く、学生たちには難関であったようである。後述する「研究指導」（ゼミナール）は一人を除き全員が選択し、その半数が苦米地・浜林・小林ゼミに集中する。

一九三三年度の三年生のAクラスの時間割は次のようなものであった。一年生・二年生に比べて比較的余裕があり、空いた時間はゼミや卒論の作成に当てられたのだろうか（山崎潔「小樽を回顧して」、小樽商大昭九会『丘友便り』第一七号）。

カリキュラム改革実施後、三年を経過して、「其の実績も大体試験済み」となった三三年末、「学則改正の気運漲る」と『緑丘』第七五号（三三年一月二八日）が報じた。「選科の選択に当つて必ずしも理想型の系統的科目が選ばれずして所期の目的に適はず、授業時間の不揃ひから種々の方面に不便を与へ、頻繁にして嚴重なる試験は生徒の労力と時間を徒費するにしか役立たず」という問題点が明らかになり、「今や学生間には真剣にこの問題は論議せられ」、一部の教授も再改正の必要性を認めているという。「理想型の系統的科目が選ばれず」とは、学生が成績取得の容易な科目やゼミナール指導と関係の薄い科目を選択する傾向を指す。

本格的な学則改正は苦米地校長期となるが、三四年一月の教授会で、選択科目を「数類に分割し、その類別ごとに選択」させ、「自由選択より統整

土	金	木	水	火	月	
商法	景気	社会政策	／	商算	英(中村)	①
	景気	英(ダニエル)	統計	商法	海外経済	②
	マッキンノン	英(浜林)	体育	修身	コレボン	③
	英(中村)	会計	体育	コレボン	統計	④
	商法	商業政策	会計	／	商業政策	⑤
	英(小林)	ダニエル		／		⑥
	／			社会政策		⑦
	原岡					⑧



合併授業

ある、しかも学科が普遍的に」なるよう、運用を改善することを決定し、四月の新年度から実施することにした（小樽新聞）三四年一月三二日）。

### 修業年限延長問題

一九二八（昭和三）年一〇月二五日の『小樽新聞』において、第三回経営学会に出席した室谷賢治郎は、第一日目の題目「商業教育に関して」、次のように語る。

高商と大学については議論が沸騰して高商と大学との実質如何といふような問題も出たり、高商を四年制にした方がよいとか、又は分科制を採つた方がよいかとの意見開陳があつた（中略）この会議において著しく目についたのは、教育家と実業家との意見に懸隔がある事である（中略）教育家は現在の高商なり商大なりの教育に対して、今一段理論に進め度<sup>た</sup>いとの意見に対し、実業家は實際的（此の實際と理論の分界は至極困難であるが）に進められ度との主張であり、又一週における授業時間の如きも、前者は少くせよとに対し、後者は多くせよとの如きものであつた

後半部分の「教育家と実業家との意見」の懸隔は、現在に至るまで埋められていないといつてよい。実務的な即戦力を求めがちな実業界とせめぎあいながらも、理論的な研究に傾きがちな学校側は、「社会の趨勢に順応し、實際に役立ち実務に創意を懐<sup>いだ</sup>かしむる教育を施すこと」（前掲「改正理由」）を最大限に追求して、学科課程の再編をおこなつてきた。

前半にある四年制への延長は、大学昇格運動とも関連しつつ、常に実業専門学校において求められていた。毎年

の高等商業学校長会議でもこの延長は話題になる。一九二六年五月の会議から帰樽した伴校長は、「各高商長連は現在の修業年限の三個年では高商として充分の授業を行ふことが不可能である、高商創立の当時に比較せば、教授を要する学科目が非常に増加してゐる、信託の如きもその一つである、そこで修業年限を四個年に延長し、場合に依つては高等学校と同様に中学の四年から直ちに入学せしむるを可とすべしといふ意見に一致して、多少当局にも運動もしたが、現在の形勢ではどうも実現が覚束ない」（『小樽新聞』一九二六年五月二八日）と語っている。先の学科課程の「改正理由」にあつた「修業年限の延長は頗る望まじきも」は、こうした意味である。

三一年一〇月の全国高専教務主任会議でも修業年限の四年への延長が議題となつた。この会議に出席した苦米地英俊は、「学科の点に於ては可成りの負担軽減になるが、経済的に見て如何かと考へられる。而し、早晚此制度が実施されるのではないか」と語る。また、「高等専門学校を職業大学として特殊な地位に立たしめ、純理論攻究の大学と対等の地位に立たしめ、充分其の特質を發揮せしめたいと云ふ意向」（『緑丘』第五七号、三一年一〇月三日）が校長らのなかで強まっていると観測している。

戸田正志『商業教育総論』は「現行高等商業学校の教科目は、其本来の教育目的を達せんとして達し得ざる、途半端の学科課程たるに過ぎない」として、「専門学校改善の要点」を次のようにあげる。

(イ) 大学と専門学校とが我国の如く上下の階段の如く存在する制度はない、目的を異にし、種類を異にしたる大学と並ぶ制度とすること。

(ロ) 教科内容も土地の状況により一定する必要なく、又修業年限に差異あつても差支へない。

(ハ) 今日商業専門学校は実業従事者の最終の準備教育としては不十分の感がある、専門学校出は人間の幅が足らぬし、専門知識も不足し、何となく余裕がない。職業準備教育の最終のものとするには、修業年限

の延長が必要となる。

こうした論は、初代校長の渡辺龍聖の持論とよく似ている。

一方で、卒業後は実社会ですぐに活躍したいと考える学生もいた。「簿記」「商業学」の糸魚川祐三郎と「民法」「商法」の木部林二が在外研究から戻ると、「二年K生」は、「日本の学校の勉強はどうも応用のきかぬ千変一律の実際に疎い、役に立たぬものであらうし、愉快に実社会にもつと役立つ方法はないものか」、「商業学に於ても立派な学者の説も有難いが、実際の商業金融研究は必要な事と考へる。日常起る金融経済問題を控へて、お互いに研究し、判断する事はきつとい、事に違ひない」（『緑丘』第二七号、二八年一〇月六日）と要望している。

### 手塚寿郎の講義

「緑丘ルネサンス」が多くの同窓生によって回想されるとき、大西猪之介に源流を發するアカデミックな学問的雰囲気が焦点の一つとなる。それは、前述の二度の「学科課程」改正との関連でいえば、「所謂リベラル、アーツに属する選択科目」の多さとともに、原論的な科目への傾倒である。その中心は手塚寿郎だった。

「当時の校風はまだ蛮からで、オーソドックスで、*経営学* や *会計学* 等もうける学問などは新しがり屋のするものだ。*学* *が* *じ* *ゃ* *な* *い* *な* *ど* *と* *う* *そ* *ぶ* *く* *連* *中* *も* *多* *く*」と述べる一九三〇（昭和五）年卒業の水垣敏正は、手塚寿郎について、「そんな時代だからあの難解な先生の講義は人気があった。尤も出欠もとらないし、眠っかけてもいびきさえか、ねば誰にもとがめられないし、そして如何にも高等学府での講義らしいムードもあるので何か栄養を吸収したような満ち足りたものを感じたものだ」（『白紙答案で再試験を逃れる』『手塚寿郎先生の追憶』）と回想する。

三一年卒業の横川義雄が受講した手塚「経済学」のノートの第一頁は、「理論と實際との乖離するもの、世に其の





手塚「統計学」授業

数が多いが、保護貿易主義と自由貿易主義の理論と実際ほどこの乖離の甚だしいものは、恐らく他に二つとないであろう」と始まったという（プリントに偲ぶ学園のさまざま『緑丘五十年史』）。その講義の難解ぶりは誰もが語ることである。三六年卒業の高橋巨は、「私も経済原論、経済学説史、統計学等の講義を受けた一人であるが、その講義はレバートリーが多岐に亘り、論理が奔放に飛躍し、高等数学が出てきたりして私の様な単純な頭にはとてもついて行けず、

よく全貌を理解することが出来なかった。唯講義のまにまに奥行きの深い大変な学者であろうと思っただけであった」（『青空を見て暮しましう！』『手塚寿郎先生の追憶』）という思いは多くの卒業生に共有されている。

山本安次郎（一九二七年卒業）によれば、手塚が「講義の際よく話されたことは、海の表面は風波がたついても深海は動かない、この動かない純粹理論こそ本物である、という考え方であった」。そして、「愉快にも痩せ形の、風采あがらず、体裁かまわず、野暮そのもの、われわれ田舎者にはその純真さが尊いものと思われた。研究室をノックすれば、「アントレ・ヴ」で、ど肝を抜かれる。しかしどんな質問にも返答は懇切丁寧を極め、あの特有な眼を輝かせ、口角泡を飛ばす態ていのものであり、その笑顔は魅力的であった」（『回想の手塚さん』『手塚寿郎先生の追憶』）。学問に向かう真摯さ・きびしさや情熱は、講義内容が頭に残らなかつたとしても、学生たちの胸に強く響いた。

伊藤整（一九二五年卒業）が「その教育は、全体として、商業実習的であるよりも、かなり社会思想的であり、かつ文学的と言つていいほど語学偏重主義であつた」（『小林多喜二』『伊藤整全集』第二四巻）と呼ぶ状況も、先の「学科課程」改正と密接にかかわつてゐる。その伊藤の回想にも登場する英語のマッキンノンの授業よりは、長年の経験と蓄積で堂に入つてゐる。三一年入学の寺尾八郎によれば、「マッキンノンさんの会話は他に類例のない事であるが、全然テキストを用いながつた。その代りマッキンノンさんは使用ひん度の高い「言い回し」（イクスプレッション）を五十位選んでそれぞれの短い疑問文と応答文を対にした問答文を五十組作り、それらを我々に繰返し繰返し練習させた。マッキンノンさんが編み出したこのドリル方式は効果てきめんで、我々の英語を聞く能力と話す能力はめきめきと上達した」（『一年の英語』、小樽商大昭九会『丘友の便り』第一七号）という。

「社会思想的」という点でいえば、山本安次郎は、手塚とともに、「新カント派経済学認識論とマルクスへの開眼」を導いた南亮三郎や「本格的なマルクス研究」の高松勤らの名前をあげる。また、短期間の在任ながら、大西猪之介の後任として「経済原論」を担当した大熊信行について、小樽を去つてからまとめた著作『社会思想家としてのラスキンとモリス』の紹介のなかで、小林多喜二は『緑丘』第一八号（二十七年六月二十四日）の広告欄に次のように記している（『小林多喜二全集』未収録）。

このラスキンとモリスを論じ得る——従つて又論じ尽せる資格は、経済学者には半分しかない、又芸術家には他の半分しかない。何故なら、ラスキンとモリスに於てはこの二つものは有機的に結合されてゐる。自分はいふ点、大熊先生にその完全な資格を見出し得るのである。その繊<sup>さい</sup>犀な芸術的直覚が経済学的検討と相待つて、生き生きとしたラスキンとモリスは諸兄の前にその姿を表はしてゐる。ことに現下社会思想の混乱を極はむる場合、同先生の直接の薫育を受けられた人は勿論、凡ての同窓諸君によつて親しまれなければならない

名著であることを信じる。

大野純一の「貨幣論」の講義も「その論旨が著しく哲学的で、若い学生間に人気があった」という。「よくカテゴリだのアープリオリなどという哲学用語が飛び出して来て、僕等に「哲学」すること——自ら哲学するところに学問の根本があることを教えてくださったのは、大野先生であった」（西川正巳『ひとすじの道』）。

一九三一年三月卒業の和田徹三は、在学中のことでまず胸に浮かぶのは浜林生之助の講読で、「発音がきれいな上にやわらかで、どこからこんな言葉がでてくるかと思われるほどの名訳であった。テキストはゴールズワーズィのフォーサイト・サーガであった」（『夜の河』『和田徹三全集』第五巻、一九八四年）という。

#### 「商業擬営実践」

三年生の履修する「商工実践」は詳細な「実践科仮規定」にもとづき実施されていたが、横川義雄は一九三〇（昭和五）年度の配布プリントを紹介して、その具体的な授業ぶりを伝える。たとえば、「商取引は小樽と東京、函館と大阪の隔地間取引であつて、中央事務部の鐘の合図にみんなが賑やかに取引を始めていた」。そこには、次のような「経営に関する事項」が注記されていた。

○各商店ハ単純ナル売買業ノミナラズ、問屋営業ノ仲立業及ビ代理業ヲモ兼営シ得ルモノトス。

○商店ハ都合ニヨリテ転業ヲナスコトヲ得ベシ。但シ転業ノ場合ニハ其理由及ビ転業ノ時ニ於ケル貸借対照表ヲ作製シ、管理部ノ許可ヲ受クベシ。

「転業」が想定されているように、一九三〇年前後の経済不況を反映した、文字通りの「擬営実践」となっている。「営業に関する学生の創意と工夫が重要な採点基準であった」（以上、「プリントに惚ぶ学園のさまさま」という。一九二九年に小樽高商を卒業し、まもなく書記（月給五〇円）として勤務することになった服部政一は、椎名幾三郎の下で「商業実践」の書類整備の業務に従事した。「商品は小樽から各都市へ出荷するもの、国外は主として英国へ輸出するものを選んだ。国外商品としては、蟹缶詰（Canned Crab Meat）や青豌豆（Green Peas）などの売買が多かった」（服部『若き時代の回想』）という。

一九三五年前後の作成と推測される小樽高等商業学校実践管理室編の『擬営商業実践必携』という小冊子（総説篇」と「運輸・倉庫・保険篇」、非売品）が図書館に所蔵されている（岡本理一寄贈）。それまでのプリント類を集成して教科書としてまとめられたらしく、具体的な授業内容がわかる。たとえば、「総説篇」第一章の「擬営上ノ種々ナル取極」のうち、「銀行」については次のように記載されている。

- (1) 銀行ノ営業ヲ次ノ如ク定ム。
  - (イ) 諸預金 当座預金、定期預金、通知預金。
  - (ロ) 諸貸出 営業手形、荷付為替手形、手形貸付、当座貸越。
  - (ハ) 為替 送金（電信、普通）。当座振込（電信、普通）。諸手形取立。
  - (ニ) 代理業務 公社債利子ノ支払、配当金ノ支払。
  - (ホ) 保証業務 船荷証券到着前貨物引取保証其他。
- (2) 為替約定ハ北海道方面銀行ト内地方面銀行トノ間ニノミ開設スルモノトス。
- (3) 営業継続中トス。

商品や貨幣、有価証券は「カード」で代用された。「商品カード」には「商品名、銘柄、品質、数量等」が記されている。「切手・印紙」は実践室所定のものを用い、それらの「代金ハ営業費ヲ含メテ中央事務部之ヲ取立ツ」とされた。「擬営曆」としては、「実践授業開始ト共ニ五日ヨリ始まり、三十分毎ニ五日ズ、推移シテ三時間ノ授業ヲ終ル時ニ三十日ヲ以テ一ヶ月ヲ終ルコト、ス。曆日ノ推移ト共ニ日付標示器面ノ数字ヲ変更シテ振鈴ニヨリ合図ヲナス」。

各論にあたる「運輸・倉庫・保険篇」が作成されたのは、小樽・北海道にとつて必須の業務であり、卒業生の有力な就職先ということもあるだろう。その「組織」については、次のような内容となっている。

- (1) 運輸部、倉庫部、保険部、総務部（出納係、計算係、庶務係）ヨリ成ル。
- (2) 運輸部ハ海運業、陸上運送業、小運送業、埋立地木材置場、鉄道構内石炭置場ノ経営ヲナス。
- (3) 倉庫部ハ倉庫現場関係事務ヲ除ク一切ノ営業ヲナス。
- (4) 営業各部ニ於テ取引ヲ整理処置シ、各部ノ補助帳及営業日誌ノ記録ヲナス。
- (5) 営業各部ハ現金収支ノ取引ヲ伝票ニヨリテ仕訳シ、出納課ヘ廻付同課ヲシテ現金ノ収支ヲナサシム。
- (6) 営業各部担当者ハ各部事務ヲ遂行スルト共ニ各部支配人代理トシテ会社印捺捺ノ権限ヲ有ス。
- (7) 倉庫現場及本船ノ事務ハ別ニ定メタル部署ニ於テ之ヲナス。

#### ノート制度批判

この時期に限らず、創立以来の小樽高商・経済専門学校時代を通じて、多くの授業は、教師が準備したノートを

読み上げ、学生はその筆記に追われるという形態をとっていた。それは、小樽高商に限らず、日本の高等教育機関のどこでもおこなわれていた授業風景である。『緑丘』第八七号（一九三五年五月二五日）の「緑丘学人 もんたあぢゆ（新入生の巻）」欄には「第二景 講義」として、次のような一コマが描かれている。

合併教室、約百五十人程居並ぶ後の方で居ねむりする者あり

教授 茲に於てか法律は（学生熱心に筆記する、いびき軒の音付近よりクスクス笑声起る）…… 故意又は過失によ

り他人に対し障害を与へたものに

学生C 早いです

教授 故意又は過失により

学生D（至極真面目に）先生、コイのコイはどんなコイを書くんですか（忽ち大爆笑、居ねむりしてゐた学生、

驚いて飛起き、訳も分らずに奇声を発して笑ふ）

このノート制度には批判が強かった。初期の新聞『緑丘』には、そうした論説・投稿が散見する。創刊号（一九二五年六月五日）の第一面では、木嶋克己が「現在のノート制度に就いて」を展開する（一部破損）。「吾々二年級に於ては一週六日間を通じてノートする学科は毎日三科目より少い日はありません」として、履修する一九科目中一一科目がノート筆記と述べる。授業の内容を「理解も出来ずに、貴重な一時間をノート製造の為に費すのはどう考へても惜しい」、「最も忌むべき傾向である試験勉強、一夜潰勉強と云ふ弊風を来さしめる」などと論じ、対案として教科書制度の採用を求める。

『緑丘』第二一号（二七年二月二五日）では、一年生の和田鉄男が「ノート廃止論」の論陣を張る。「多大の貴重な

る時間とエネルギーとを浪費し、且何の効果も無きノート制度」を手きびしく批判し、ノート制度擁護の「筆記中に充分記憶出来ると云ふ理由」「本を読むよりも効果ありとなす理由」などを一つ一つ論駁する。それらは「筆記の時は自己の主観——自分の頭から筆記するのでないから実に複写機——而も不正確なる——に等しい」という観点からの批判であり、主体的な自主的な勉学への希求にもとづいている。

この「ノート廃止論」に触発されて、次号（二八年二月八日）に投稿した「石川生」は、学生の「何一つ自分で解決しやうとしない脛齧りの傾向、依頼心等が濃厚では無いか」と指摘しつつ、「ノート改善会、ノート制度研究会と言ふ様な一時的の相談会」設置を提案している。

その後、『緑丘』紙上ではノート制度についての論議は聞かれなくなったが、批判がたえず渦巻いていたことも確かである。学生の文化サークル「北海道経済事情調査会」の活動記事のなかに、「ノートにだけ齧ちり付く学生は軽蔑すべき存在だ。学校で得たノートの知識を生かさねばならない。そうする事に於てのみノートの価値が見出される」（『緑丘』第七三号、三三年五月三日）という一節がある。また、『緑丘』第八〇号（一九三四年六月三日）の論説「意識の欠如」には「惟ふに学園そのものに対する意識も持ち合せなく、生活の意識すら明確に有たず、単に学園と云ふ建築物への肉体の移行運動、そしてノートすると云ふ頭脳の筋肉運動がその大半であるかの如く、無意識的にその日その日を送るのが多くの人の現状ではあるまいか？」という一節がある。

### ゼミナール

すでに「特定学科目研究上ノ指導」は一九二五（大正一四）年度の学科課程改正で実施されていたが、三一年の同改正で「研究指導」（ゼミナール）が本格的に実施されることになった。『緑丘』第六二二号（三三年四月二六日）が「多大の期待をかけられたゼミナール制度 一年を経過して」という見出しの記事を載せるように、学生からの要望

もあって実現したようである（三一年の『緑丘』は欠号が多く、この間の経緯は不明である）。他高商でも「研究指導」（長崎高商）、「特殊問題研究」（和歌山高商）として実施しており、なかでも横浜高商では創立以来「研究指導」を取入れ、「十人内外の少数の生徒を一人の教官が毎週一、二時間、専門学科の指導をするとともに、親しく生徒に接して教養上の相談相手となるといふ、この制度は継続強化され」（『横浜高等商業学校二十年史』）ていた。

先の『緑丘』の記事は「最後のあわたしき三年一ヶ年の研究に、その多大の効果を期待することは出来得ようか」と指摘して、「少くとも二年生にもこの制度を拡張して、その効果を来さしめなければならない」と提案する。また、学生を放任する弊があったとして、「教官が進んで学生に対して積極的な指導を与へ、充分適切な研究をなさしむべき」、「人格の陶冶なる点にも重きをおき、人格的交渉を保ちつゝ、薫育しなければならぬ」という注文をつける。ゼミナール制度が「一年を経過して」、まだ定着するに至っていないかといえよう。

つづいて『緑丘』は第六三号（三二年五月二九日）から「指導宜しきを得ればこの上もない収穫、指導宜しきを得ざればアイドル生にとつては絶好の避難所となる怖れあるもの、現代画一大量生産式教育法の欠陥を認め、古に復し、寺子屋式を再現しやうとする企である」として、紙面で「指導研究室を覗く」と題するレポートを連載する（二一回）。第一回は「財政学商業学」の平尾丹治である。平尾ゼミでは「実社会に働く際、一般実業家として敗を取らない程度の時事問題に対する智識を与えること」を目標とする。「中央銀行兌換券制度とインフレーション」「為替管理問題」などを研究課題としているが、学生は「実利的」に過ぎ、「学理の殿堂に学ぶ者の論文としては少し学理的研究が足りないといふ傾向」があると平尾は指摘する。

浜林ゼミは「現代は疑問の時代 オースリテイに対する反感と挑戦 先づ汲め、現代の一般的思潮を」と紹介される。「読書法も一字一句の教科書式でなく、辞典の厄介にならず、全文の大意を掴むを目的」とし、「一人の学生の報告によつて、各学生は間接の研究を行ったことになり、又同時に英国の国民性、風俗習慣を知ることができる」





大野ゼミ

(第六四号、三三年六月二八日)。

大野ゼミでは「第一学期間は各員の力のテストと、論陣の張りかたの練習を兼ねて、夫々向ふところに進み、各週毎に論文の提出を行ふ。第二学期よりは、時事問題の花形インフレーション問題と金本位制の運用問題(例へば管理通貨問題如き)に、力を注ぐ」(第六八号、三三年二月二六日付)。西田ゼミの五名の学生は、「それぞれ紡績方面に、

或は澱粉に、魚采類に、毛織物、セメントにつき、異つた方面より商品学的研究を続けて居る」。西田の指導法は「学校内で書により研究するより、むしろ実際に工場を視察する方がより効果」(第六九号、三三年一月二六日)をあげる、としている。

『緑丘』第七三号(三三年五月三日)は、「本年度ゼミナール人員数」を次のように掲載している。

若松教授十六名、平尾、苔米地教授各十五名、大野教授十四名、南教授十三名、小林、木村教授各十二名、糸魚川、室谷教授、久木助教授各十名、中野教授七名、浜林教授六名、原岡、高橋教授各四名、木部、井上教授、伊藤、三箇助教授、スミルニツキー教師各三名、西田教授、高崎講師各二名、田上、手塚、橋本教授各一名、指導ナキ者六名

その後も、おおよそこうしたゼミ所属の傾向がつづく。数理経済学を



苔米地ゼミ

学ぶ前提としてフランス語などの語学と高等数学のマスターを必要とするため、手塚ゼミは例年少数だった。そのため、「一学期一回位集つて貰つて研究の結果を報告させ、足らざる部分を補つてつつ込んだ研究をさせ」（指導研究室を覗く）『緑丘』第六四号、三三年六月二八日）ていた。

ゼミ所属は、二年生を対象に一月末締切で募集し、面接で決まつたと思われる。『緑丘』第八五号（三五年二月一日）では「来年度ゼミナル紹介」をおこなつている。「恐らく学校で最も実のある時間は、そして学生生活の有効か否かの岐れ目はゼミナルにあるといつても過言でない」と確認したうえで、「来年度の経済商業学方面のゼミナルの一般的傾向はテキストに原書を使用すること」と報じる。また、語学関係では「一般に学生の自由研究を主とする方針であるが、放縦に流れるのを防ぐ為、小テキストを使用する」。それでも、「従来兎角之等語学ゼミナルは有関学生の避難所に利用され勝ちなのに鑑み、今年度は厳選主義とのこと」という。

この結果は、苔米地新校長となつた三五年度となるが、『緑丘』第八七号（三五年五月二五日）で「純粹学理より実証主義へ 依然多い語学研究者」と報じられる。語学関係が全体（一七七名）の約三分の一にあたる六二名で、前年度より一〇名増という。理論的研究方面は「八、九兩年の二三名前後に比し、一六名と云ふ淋しさ」なのに対して、「経営学等社会の動態的研究は四八名に激増し、従来より十名も殖えてゐる」と述べて、次のような観

測をしている。

要するに、学生の関心が実社会への認識を深めんと努力してゐる事は明かで、此の傾向は喜ぶべきであるが、他面之を通じて学生の末梢神経的気風をうかゞふ事も出来る、従来真理の探究をモットーとした学生氣質が急角度の転換をして街頭に進出する此の傾向も、世知辛い時勢にもまれて功利的になり行く彼等の姿を反映してゐると言へよう、学問的進歩か、退歩かは暫く別としても現代学生層の切迫した欲求を見逃す事は出来ない。

### 卒業論文の多様化

一九二五（大正一四）年の学科課程改正の以前、卒業論文は「商工実践」中の「調査論文」という位置づけだった。前章で述べたように、一九一〇年代末から、実業的なものに限定されず、理論的なものや社会問題をあつかつたものでも許容されるようになっていた。一九二二（大正一一）三月卒業の内藤満寿夫は椎名幾三郎指導のもとに「婦人職業問題ニ関スル一考察」という卒論を提出している。「序二代へテ」では、一九世紀において「女権運動」が社会運動中の重要な部分を占めてきたと述べたのち、第一次大戦後には「資本対労働ナル新問題ガ婦人ノ前ニ提供」され、「今ヤ婦人職業問題ハ婦人問題ノ中核トシテ当面ノ大問題」となつたと、自らの問題関心を明らかにしている。同年卒業の池浦清は、東京で見聞した次のシーンを胸に刻んで、「貧の研究」という卒論（佐原貴臣指導）を書きあげる。

私の眼の前を一人の職工が傘もなく、恐らくは三四年も被つたであらう汗臭い古パナマで雨を避け乍ら、力なく、うなだれて通りかゝつた。すると其側を一台の大型の自動車が二人の紳士を乗せて駆せ去つた。と見ると、

それだけでなくとも貧しい職工の着物が今の自動車がはねて行った泥でべとべとに汚された。そんなことに何の頓着も無しに日本橋の方へ消えて行った自動車の影を睨んで立ち止まった職工の其瞬間の顔が、今此の静かな自分の室で暖かい火を囲んで自分の机に向って居る私の胸に、まざまざと甦って来る。私はぞつとして一種の恥しさを感ぜずには居られない。

池浦はこの卒論を「第一章 緒論 貧の概念」「第二章 貧の原因 救済」などと展開していく。もう一つ、大塚光「文化生活論」（椎名指導 一九二二年卒業）をみると、「本論の目的とする所は、実に公平なる富の分配によりて与へらるゝ各人の文化生活が、如何に社会国家の向上発展に必要な欠くべからざるものなるかを、理論的に論究する」ものであった。

この時期は、後述の「研究指導」（ゼミナール）の成果というべき卒業論文の位置づけと異なり、まだ教員による継続的指導とは連動していなかった。したがって、二四年三月に卒業する小林多喜二の場合、直前になっての泥縄式の作成となった。最終的にアレフレッド・スートロの戯曲「見捨てられた人」の全訳とクロポトキンの『パンの征服』（麵麩の略取）の第五章「食物」の訳に、「自序」を加えた卒論（二四年二月四日提出）を提出するが、「自序」の末尾に次のような付記がある（『小林多喜二全集』第六巻、なお本学図書館には木田橋喜代慎による筆写本を所蔵（原本は行方不明））。

始めゴッセンの価値論をやろうとして、柄でもないことに気付いて止め、期日のせまったことから、常々研究していたストリンドベルヒについて論文を書こうとした。そして、杉岡独逸語講師をわずらわして、図書館から、その書物を借りて頂いた。が、純文学は駄目だ、と根岸教授にしかられ、とうとう糸魚川教授にお願いした。

そしてカアペンターのものを訳す積りであったが、図書館にその書物がなく、とうとう畏友乗富道夫兄などをわずらわして、一年の斉藤という人から、このクロポトキンの本を借りることが出来た。そして、一月十五日から始めた。そして、約四日間で訳了してしまった。スウトロの方は正月中に訳して置いたので都合がよかった。

限界効用理論のゴッセンは高商の卒論にはふさわしかったが、多喜二は「柄でもない」として、「常々研究していた」ストリンドベルク論に転換しようとする。しかし、「商業学、簿記、企業実践」を担当していた根岸正一（二四年一月に高松高商へ転出）から「純文学は駄目だ」として拒否されてしまう。そこで「簿記、経済学」担当の糸魚川祐三郎に相談し、この二つの翻訳による卒論提出を認めてもらった。おそらく糸魚川が読んだはずで、八〇点の成績を付けている。なお、乗富道夫のちに多喜二の「蟹工船」取材の資料を提供した友人、「二年の斉藤」とは、のちに軍教反对運動の中心となる斉藤磯吉である。

多喜二と同期の卒論を一覧すると、翻訳もかなりある。多喜二とは別に宇野長作がクロポトキン『パンの征服』（第一章から第三章まで）を訳している。「マルクス労働価値説の研究」「ロバート・オーエン」「社会思想家としてのウィリアム・モリス」もある。一九二〇年前後にはかなり目立った労働・農村・婦人などの社会問題をあつかった卒論は、少なくなった。

なかには「ウパニシャッド哲学の教理」という異色な卒論もあるが、新たな領域である広告論や心理学研究も増えてくる。たとえば、「アダムス著『広告及其の心理的法則』中の「記憶」に就きて」という卒論（指導教官中村賢二郎〔英語、商業英語〕を提出した高松勲は、「緒言」のなかで、「商売ニ心理学ノ応用ガ必要ナ様ニ、広告ニモ之ハ欠ク事ノ出来ナイ大切ナモノデアリマス。商業心理学ヲ巧妙ニ運用スル人ガ商業ノ成功者トナル様ニ、広告心理学ヲ上手ニ応用スル人ハ広告ノ成功者トナル」として、「之カラノ商人ハ是非トモ広告ニ研究ヲ加へ、力ヲ注ソガネ

バナリマセン。時代ニ適合スル能率的ナ広告、ソレハ商人ヲ成功ニ導ク武器デアリマス」と論じていた。

一九二六年卒業の西野嘉一郎は、「マルクス理論の研究が学内にも漸く盛んとなりつあつたとき」、河上肇の著作を熟読するも、「どうしても唯物論にはなじめ」ずにいたところ、「学園内の革新思想の指導的立場にあつた高松勤」

（「思い出の記」『緑丘五十年史』）からの勧めでウィリアム・モリスに出会い、傾倒していった。「社会改造家としてのウィリアムス、モリスの思想と生涯」と題した卒論は、「彼の社会改造思想が現代の社会主義に如何なる影響を及したか、又彼の共産主義原理が彼の史観に如何なる役割を演ずるか」を明らかにしようとした。そこでは、モリスから「吾人の欲する所は、単なる物質的安定のみではない、日常生活に於ける自由と喜悅である」点などを導きだしている（この卒論は『校友会々誌』第三七号（二六年二月）に掲載、そこからの引用）。

残念ながら一九二三年度の卒業生提出を最後に、卒業論文を図書館に収蔵する制度がなくなつてしまつた。その後の期間には、わずかに室谷賢治郎ゼミの卒論が残されている（編纂室所蔵、『小樽商科大学百年史編纂室紀要』創刊号に目録を掲載）。「消費組合の将来」と題する卒論を提出した一九三三年卒業の大沢一雄は、その「序」において、「指導研究制なるもの、意義」を「自分の考へを統一し、思想をまとめ、物事に対して見透しをつけることが出来たこと」とする。このテーマの選択は、「私の故郷に於ける信用組合の破産につき、之が復興を計らんと志してゐたこと、及我室谷教授の経営経済学の講義を受け所謂協同組合精神に深い興味を覚えたこと」からという。

三二年卒業の村田毅策の卒論「現今に於ける百貨店問題の研究」は、「現代資本主義の流れはあらゆる事業を駆つて大資本化大組織化せしめた、然してこの流れが一度販売戦線に延びるや、そこに我々は群小小売業を圧するネオン、シャンデリアに、見る目も眩い栄華の殿堂百貨店の聳え立つを見るのである」と始まる。そして、「百貨店の発達進歩につれて小売商は益々窮地に陥ると称せられてゐる」として、「商品券問題、不当販売問題」を取りあげたうえで、「小売商の積極的対策」を論じる。他の卒論も含め、現状の問題点の把握から出発し、社会的解決に結びつけ

て論じようとしている。

### 「軍事教練」の開始

小樽高商の名を一躍全国に知らしめることになった一九二五（大正一四）年の軍教反対事件については第五節で述べることにし、ここでは正課の授業としての「軍事教練」についてみよう（詳細については、荻野富士夫「小樽高商軍教事件」『小樽商科大学史紀要』第二号、二〇〇八年三月）参照）。

学校における現役将校による「軍事教練」の実施は、文部省と陸軍省の協定によって決まった。それまで、小樽高商を含め、中等学校以上では体操の時間内で「兵式訓練」が実施されていたが、あまり熱心に取組まれているわけではなかった。岡田良平文相は「兵式訓練は明治二十年以来行はれて来たのであるが、時勢の進むにつれ其訓練が緩み、現今の学生は懦弱に流れ、服従、規律、義勇、奉公の念も稍々薄らいで来た。之が矯正には修身その他の学科もあるが、兵式訓練が最も有力と思ふ。而して退職将校では軍人精神が次第に薄らぐから、現役将校を之にあってたい」（『東京日日新聞』、二四年二月二七日付）と述べて、軍縮による余剰将校の活用を図った。陸軍でも、「軍事教練」の目的を文部省に同調して「学生生徒ノ心身ヲ鍛練シ、団体的觀念ヲ涵養シ、以テ国民ノ中堅タルヘキ者ノ資質ヲ向上シ、併セテ国防能力ヲ増進スルニ在リ」（「教練実施ニ関スル要項」 文部省『学校教練』第一冊、国立公文書館所蔵）とした。

文部省・陸軍省の「教練ニ関スル覚書」（二五年二月）と「教練教授要目」（二五年四月）によれば、師範学校・中学校などでは「各個教練 部隊教練」「射撃」「指揮法」「陣中勤務」「軍事講話」などの教材が学年ごとに細かく配置されているが、高校・大学予科・専門学校ではそれらは「適宜配当」して実施することになっていた。小樽高商の場合は、毎週二時間（週三四時間中）が「体操」の時間だったが、一・五時間を「軍事教練」にあてることになった。

小樽高商への配属将校の着任の時期は一九二五年五月ころとみられる。新聞『緑丘』創刊号（二五年六月五日）には、



鈴木平一郎少佐

「先生の移動」欄に、他の二人の新任教官とともに、「鈴木平一郎少佐 旭川第廿七聯隊に御奉職の由、この度本校に御見えになられて以来、我校の士氣益々振ふの感があります」という記事が載る。赴任時は四〇歳前後だった。軍教事件惹起によっても更迭されることはなく、任期を全うし、二七年四月、姫路の歩兵第三九連隊留守隊の連隊付少佐となる。

鈴木に対する学生の評価は低いものではなかった。『緑丘』第二号（二五年七月一日）には、新聞部員の官舎訪問記事（一部破損）があり、親しみやすさがうかがえる。部員の「一年志願兵」についての質問には「入営後はなまけちや駄目です」と答え、「規律と礼儀の国に二十何年も居た者の目には諸君のやり振<sup>が</sup>り」は不適切だとして、「教師よりも先に出て行く学生を見たが、些細な事だが授業の前後は一斉に敬礼するとい、と思ふね」と苦言を呈する。「極めて磊落、決して磊落、決して学校教育を軍事色で圧倒するというような態度は見られなかった」

（大塚武雄『緑丘』新聞創刊のころ）『緑丘五十年史』、「軍人らしからぬ非常に常識豊かな人格円満な人であったため、学生も鈴木少佐個人には親しみを持ち、何んのトラブルも起きなかった」（大和田正彦「軍教事件の思い出」『小樽商大緑丘会報』第三号、一九六七年一〇月一〇日）という学生の鈴木評もある。

鈴木少佐の着任後まもなく、五月末から「軍事教練」が始まった。六月二五日には、三年生による「斥候搜索、中隊教練、接敵運動」という第一回野外演習が高島で実施され、「頗る成績良好」だったという（『小樽新聞』、二五年六月二七日）。その際の想定は「敵艦一隻、突如塩谷近く頭<sup>あ</sup>はれ、早くも上陸せる報達し、市民愕然<sup>がくぜん</sup>色を失する所、精鋭なる高商義勇軍、最新戦法によつてこれを手宮公園付近に喰止め、撃破する」というものだった。この想定の大仰さ・勇ましさぶりは一〇月の演習想定に通じるものがあり、鈴木少佐の好むところだったともいえる。『緑丘』第二号（二五年七月一日）は、これにつづけて、「風雲急を告げし手宮の空も我軍の向ふ所敵なく、小樽は再び安らかな商業市



に返った。小樽高商義勇軍万歳」と無邪気に礼賛する。さらに七月一日には一年生の、七月八日には二年生の野外演習が実施された（想定は不明）。

そして、一〇月一五日、小樽高商の全学年の参加する野外演習がおこなわれる。その想定とそこに発した反対運動の惹起については、後述する。

### 事件以後の「軍事教練」

軍教事件後の小樽高商の「軍事教練」の実施状況を、新聞『緑丘』を中心に概観してみよう。

軍教事件直後の一九二六年一月二七日の教練査閲は、「本校は曩に想定事件ありて、社会より疑惑の念を抱かれ居るも、今回の査閲成績が其の疑惑を一掃せる」（『緑丘』第八号）とあったように、緊張感に包まれておこなわれた。その後もまだ余波がつづいていたことを推測させるのが、二六年一〇月の第七師団による「札幌對抗学生大演習」である。鈴木少佐を指揮官とする西軍は、小樽高商や小樽中学などの二〇〇名と軍隊側からの騎兵・野砲隊・機関銃隊の各一中隊で構成され、北大予科などから成る東軍と手稲平原で遭遇戦を演じた。『緑丘』第二二二号（二六年一月一日）は、「両軍は夫々砲兵援護の下に戦線一里に亘つて歩兵の大展開を為し、野砲、小銃、機関銃等の断続的轟声に天地を震驚せしめつゝ、最後に雨中泥濘を飛ばして壮烈極まる突撃戦に移た」と描写する。その後、こうした大演習は実施されないことからみて、軍教反対に揺れた学校・札幌地域を引締めようという意図があったように思われる。

その後の特徴的な点をみると、第一にスキー教練の実施があげられる。その導入は懸案だったが、二九年冬からおこなわれるようになり、『緑丘』第三八号（三〇年一月二七日）は「スキー教練は普通の教練と異なる所なく、身体の鍛練、団体的精神の涵養を目的とし、ウインタースポーツとしての自由は絶対許されず、かなり厳肅な紀律の下に行



軍事教練

はれ、殊に最近は銃を負はせる等、スキー教練は案外好評ある実績を挙げて居る」と報じている。これは小樽高商の恒例となり、野外演習や教練査閲でも実施された。三六年『教授要目』中の「教授事項」をみると、各学年とも「各個教練」「部隊教練」で「冬季ハスキーヲ利用シテ行フ」とされている。

第二に、「満州事変」後、野外演習が本格化したことである。三三年五月、二・三年生の野外演習が、初めて札幌月寒の連隊兵営での宿営（三日間）で実施された。「前進又前進と云ふも勇ましいが、汗で体中はビツシヨリ、砂埃で手も顔も真黒、銃を持つ手は疲れ、足は棒の様に。軽機関銃の音も引つ切りなしに響き、演習気分横溢。進め。伏せ。の連鎖で敵陣へ。休戦ラツパが鳴り響く」（第七三号、三三年五月三日）という訓練が展開された。三四年五月の一年生の兵営宿営でも、「平射砲と曲射砲との兼用新式歩兵砲を見学、終つて愈々戦闘教練。炎熱の中を走り疲れて頂く罐詰の肉とパンの昼食の素敵なこと。それより重、軽機関銃及毒ガスマスクの見学をなす」（第八〇号、三四年六月三日）という演習ぶりである。以後、三年生の野外演習がこの月寒連隊での兵営宿営として実施されることが多くなった。

第三に、陸軍の学校「軍事教練」重視方針と関連すると思われるが、小樽高商に配属される将校が少佐クラスから中佐クラスに格上げされることである。鈴木少佐の後任が中佐（佐藤種季）となったことは、軍教事件の影響かもしれないが、その後は中佐クラスがほぼ定着する。三二年四月赴任の深草厚之、三三年九月赴任の米山米鹿、三七年四月赴任の嵯峨亮吉である（その前任の川村脩は少佐）。嵯峨の在任

は四四年三月までの長期にわたり、この間に大佐に昇任する（後任の箕輪代次は大佐）。また、これ以外に教練科に中尉クラスの教官が配属されている。

第四に、「軍事教練」の厳格化である。年一回の教練査閲については一般に「優良」「良好」などと賛辞されることが多く、実際の状況は不明ながら、小樽高商のような専門学校の場合は大学や高校と異なり、概してルーズなところは少なかつたようである。『緑丘』第二五号（二八年五月三〇日）の「緑丘人の叫び」に、「C.C.C.」という学生は「教練に於ては服装は正装にあらずして、略装であつてもいゝと思ふ。一枚しかないヨソ行洋服で、通つたり、寝つたりするのは、やりきれない、ではない、従つて動作も鈍くなるワケ。此点前の鈴木サンの頭のいゝことを感謝する」と投稿する。前任の鈴木少佐は学生の服装の規律にやかましくなかつたが、次第に厳格さが求められるようになった。三四年三月二六日の『緑丘』第七八号の編集コラム欄に、「愈々新学期から教練服とやら云ふもの着用に及ぶべしと云ふ、何処やらの中学校では制服もカーキ色とやら。それにゲートル巻いて、鉄砲片手に腰にはサーベル、書物を背囊へと云ふことになるかも知れぬ」とある。学生たちの反発と諦観が入り混じる。五月一日の『小樽新聞』は、「制服は上下とも茶褐色で青年訓練所生をほうふつせしむるが、惜気なく伏せる姿勢でも何でも出来る……目下の処、黒茶の鹿の子まだらである」と報じる。その三四年の査閲の場合、「北大各学部平均出席率は六割五分」という程度だつたのに比べて、小樽高商は八六%という「著しく良好な出席率」であつた（『緑丘』第八四号、三四年二月三日）。

三六年度の「軍事教練」に関する「教授要旨及方針」は、次のようになっていた（『教授要旨』）。

1. 本校生徒将来ノ社会的地位ニ鑑ミ、軍事諸般ノ問題ニ関シ正當ナル理解ヲ得セシメ、又衆心ヲ掌握シ、之ヲ意図ノ如ク指揮運用シ得ル如ク統御ノ真諦ヲ体得セシムルニ努ム

2. 教練ノ実施ハ、其教材ノ如何ヲ問ハス専ラ生徒ノ精神的鍛練ニ資スベキ主旨ヲ強調シ、人格ノ陶冶ニ努ム、就中国国家の觀念ヲ明徴ニシ、帝国伝統ノ精神ノ涵養ニ遺憾ナカラシム

この時点ではまだ「軍事予備教育」という側面ではなく、「生徒ノ精神的鍛練」に重きが置かれていた。各学年二時間（全体は三四時間）で、年間では二年生がもつとも多い六七時間（そのうち一七時間は「他教材ト併セ実施」と野外演習四日間という規定であった。「体育」の内容はすべて「教練」となっていた。

小樽高商創立まもなくから二四年間の前半は「体操科」教師として「兵式訓練」を、後半は配属将校の補佐として「軍事教練」を指導してきた菅安右衛門は、三五年三月の退任にあたり、「軍事教練」が始まった当時は「社会情勢が盛んで、教練も種々困難な事態に遭遇したこともあり、今日から見ると今昔の感が致します」（『緑丘』第八七号、三五年五月一五日付）と述べている。軍教事件から一〇年を経て、「軍事教練」は定着したのである。

### 図書館の閲覧状況

『緑丘』第六号（一九二五年二月一七日）のコラムで、図書館の主たる鼠は「吾輩の日々眼に触る、所、僅かに二三十」と閲覧者の少ないことを嘆いている。また、第一三号（二六年二月一五日）の松山洋一「図書館の書籍に就て」では、図書の無断持ち出しや切り取り、「赤筆で、ペンで、又鉛筆で色とりどりに彩色された」書き込みなどが続出していることに、警告を発している。

一九二九（昭和四）年度の図書館の閲覧状況をみると、閲覧者は一日一一五名、冊数では一日一七三冊となっており、盛況といつてよい。経済・財政や商業の多さは当然としても、「文学及語学書の閲覧が意外の多数に上つて居るのは注目に値すべき事で、なほ政治、哲学の方面に読書傾向が進出して居るのは面白い現象」（『緑丘』第三八号、三〇



図書館

年一月二七日)と観測されている。

おそらく思想問題に関連して学校当局がおこなった学生の読物調査の結果が、『緑丘』第三七号(一九二九年二月二九日)に載っている。図書館蔵書に限ったものではないが、書籍では文学書が圧倒的に多い。作家別では夏目漱石が群を抜き、徳富蘆花、吉田絃二郎、島崎藤村、石川啄木らとつづく。経済書・哲学書は二年生以上に読まれている。雑誌では『経済往来』を筆頭に、『改造』・『中央公論』のほか、一年生で『キング』と『雄弁』がよく読まれている。

ところが、一九三〇年代になると、学生の気質の変化か、あるいは「緑丘の沈滞」も影響してか、図書館の利用状況は低調となる。一九三四(昭和九)年九月二四日の『緑丘』第八二号に載った「図書閲覧傾向調べ」によれば、四月から七月にかけての利用状況は、一日あたりの平均利用者数三八名(前年は三三名)、和書の閲覧冊数約三五冊、洋書約三冊となっている。「商業方面の雑誌」や文学関係が多く、「歴史、地理、教育、科学等は僅かに月数冊」という。これは数年前と比べると、半減している。

『緑丘』第八六号(三五年三月二八日)の記事には、「各月に最も多く読まれるのは、四月文学、五月辞書、六月文学、七月語学、九月経済財政、十月商業と文学、十一月商業、十二月語学、一月文学、二月商業と経済で、約半分も占めてゐる」とある。試験期間中、閲覧者数は減るのに、図書館が混雑するのは「ノート読みばかりの空景気」という。

さらに三五年二月五日の『緑丘』第九一号では、「全国高商図書閲覧調」を掲げている。官立の一二高商のほか植民地の京城・台北両高商、私立の同志社の蔵書数など（一九三四年度）を比較したもので、小樽は蔵書数で三位（和書二万四六四六冊・洋書一万六九六五冊）なお首位は山口）、学生の年間利用回数では約二四回で二位、年間閲覧冊数では約三六冊で三位（後二者の首位は横浜）となるという。とはいえ、開館日数でみると一日に一回図書館に通う程度であり、蔵書数の割にはあまり熱心な利用状況とはいえない。この記事の見出しは「勉強校！小樽高商」となっているが、本文では「実務教育が如何に高調されても実社会の真の闘士となるには、何よりも根本的理論の把握が必要である、小樽高商生よ、更に読書すべきだ」と要望する。

一九三〇年前後の図書館の図書購入予算は九千円前後で、和書・洋書を合せて二五〇〇冊程度を購入している（『緑丘』第四六号、三〇年九月二十五日）。

この図書館の主ともいふべき存在が、書記の木田橋喜代慎だった。『緑丘』第八三号（三四年一月一日）は、図書分類の苦労と、「一番困るのはその日の中返さぬ人、之は一冊の本が公平に見られませんか。こつちは全学生と云ふ事を始終念頭に置いてゐますから、つい情を矯めて強制的に返して貰ふ様な場合もありますし、全く縁の下の力持ちですよ」という「嘆き」を伝える。同記事には「木田橋氏は大の手塚教授最良である、又一度見た書物はその背側装釘ですぐ探し当るのも自慢の一つ」とある。

館長にあたる主幹は、大西猪之介のあと、長く苦米地英俊が務めていた。

#### 入試の緩和から激化へ

伴校長期の入試の志願状況を概観すると、一九二四（大正一三）年を例外として、二〇年代を通じて低水準にあるといつてよい。二九年の志願者数六二五名（募集人員二二〇名）という落込みを境に、三〇年代はほぼ増加傾向

に転じる（苫米地校長期の三十九年にピークに達する）。

他高商との比較でみると、長崎・山口高商は小樽よりも志願者を集め、また新設では都市部の名古屋・横浜高商のほか、大分高商が創設と同時に高水準を保っている。明らかに二〇年代の小樽高商の志願者数減少は、経済不況の影響とともに、新設高商の相次ぐ出現による地理的なハンデに起因している。三〇年代の増加は、他高商および他の実業高等専門学校全般につうじてみられることで、高等教育への進学気運の高まりを反映する。

一〇六四名という一九二四年の志願者が、前後の年に比べて格段に多かつた理由は不明である。『校友会々誌』第三三号（一九二四年六月）では、「新入生諸君が千百に余る志願者中から選りに選り抜かれた一騎当千の士だけあつて、學術に秀で運動に勝れ、元氣旺盛なる事」を歓迎している。

『緑丘』創刊号（五年六月五日）に「新入学生に関する諸統計」が掲載されている。中学出身者の志願者六〇九名から入学者一二二名を出すのが、「本年卒業」（現役）が約半分、「昨年卒業」が三分の一である。実業学校出身者の志願者二五六名中の入学者五七名の割合は「本年卒業」が八割強、「昨年卒業」が一割であり、中学校出身者の割合とかなりの差異がある。現役率が高くなっていることから、この一年生の平均年齢は一九歳三月だった（八月一日現在）。二八年では「現役」率は七六％と高い（『緑丘』第二五号、二八年五月三〇日）。その後、「現役」優勢の傾向はつづく。

また、二五年度の各学年の北海道出身者は、五一名（三年）、六三名（二年）、七五名（一年）となっており、各地に高商が開校することにより、小樽高商では必然的に北海道内の割合が高くなってきていた。この傾向は次第に強まり、二〇年代後半には北海道出身者は全体の三分の一から二分の一以上となる。二八年入試では特に顕著で、一八五名の入学者中、一二五名が北海道出身者である（『緑丘』第二五号）。

先の二五年入試の「新入学生に関する諸統計」には、各受験科目の入学者の最高・最低・平均点が中学校・実業学校別に集計されている。いずれも平均点は六一点であり、開きはない。

志願者数の漸減とともに、憂慮すべき事態が生じる。入学許可者のなかから毎年辞退者が続出し、定員割れが生じたことである。たとえば、一九二六年の入学者二〇一名（中学一四一名、実業学校六〇名）のうち、四七名（中学三八名、実業学校九名）が取消しとなり、実際の入学者は一五四名にとどまった（募集人員は一八〇名）。「理由は二校入学許可ならん」（『小樽新聞』二六年四月二七日）と観測されている。翌二七年でも二四〇名の合格者が発表されたが、実際の入学者は一五九名だった。道内出身者は別として、道外出身者にとって小樽を辞退する可能性は高かった。宮北治平は、小樽高商の受験失敗のあと、東京で予備校に通い、一九二七年に「小樽と慶応の理財科」に合格し、「当然のことのように小樽を選んだ」（『私の履歴書』『友に歴史あり』）が、それは旭川出身という理由が大きいと思われる。

一九二六年から、全国の高等商業学校は高校の入試と歩調を合わせて、受験生の便宜と入学難の緩和を図るために、三月中旬からの試験を第一班と第二班に分けて実施することになった。神戸・長崎・山口・彦根・和歌山・横浜・大阪（市立）が前半の三日間、小樽・名古屋・福島・大分・高松・高岡・東京商大専門部が後半の三日間で、受験生には二回の受験の機会が確保されていた。なお、小樽高商では、この時期、試験会場を小樽のほか、東京（主に東京外国語学校）と京都（京都帝大）に設置している。

一九三一年から、おそらく志願者数の増加と辞退者数の減少を目標に、小樽高商では入試期日の大胆な変更に踏み切る。前述の二班体制から離脱して、三月下旬に単独の日程を設定する（三一年は三月二八日〔体格検査〕、二九日、三〇日）。三〇年六月の実業専門学校長会議で伴校長が提議し、了解を得た。

これが功を奏してか、三一年の志願者は千人を越え、「本校はいつかな受験者の群に難関小樽として思考される様になった」（『緑丘』第六二号、三三年四月二六日）。東京試験場は小樽本校に匹敵するほどの人員となった。後述するような就職戦線の好転に即応して、『緑丘』第七八号（三四年三月二六日）は「受験群像 入学試験迫る 好景気の呼声裡に」





「高商入学試験のぞき一けんべい画く一」  
 (『北海タイムス』1934.3.31)

という見出しで、次のように報じている。

毎年入試が後班に属する本校は勢ひ志望学校へ目指して薦進する余力を以て「ついでに」受験する者が大半を占めてゐると云ふ状態である。徒らに量のみの結果ではなく質的方面をも考慮する余地がある。

無試験検定に依り入学を許可すべき予定の者は、昨年度より十三名の減少を見てゐる。受験者に於て見れば、商業学校出身者は八名のみの増加であり、依然中等出身者が大半を占め、東京受験者が四十五名の激増振りである。

三三二年から合格者の氏名はラジオ（札幌放送局 IK）で放送されている。三三三年四月には、北大予科とともに、「失敗の原因は何れにあるか、どんな答案がパスしたか」という講評の放送がなされ、苫米地が「英語に関する答案と落第する答案」を担当している（『小樽新聞』、三三三年四月一〇日付）。また、三三三年一月から二月末まで、札幌放送局から「受験英語講座」が放送された（夕方の三〇分）。苫米地英俊が和文英訳を、浜林生之助が英文和訳を隔日で担当した（『緑丘』第六九号、三三三年一月二〇日）。これは「受験者に大持て」で、新たに小林象三も加わり、四月から七月まで放送された（同、第七二号、三三三年四月三〇日）。

## 入学者の変化

志願者数の増加は、試験期日の遅めの設定による「ついでの」受験に起因していたが、入試戦線は年ごとに激化していく。その影響を受けて、一九三〇年代には、無試験入学者の漸減と実業学校（実質は商業学校）出身者の漸減という傾向があらわれる。

三四年の入試について、苦米地の語るところによれば、宮崎と沖縄を除く各府県のほか、「樺太は勿論、朝鮮、満州、関東州、台湾等からも少数ながら出願して来てゐる」一方で、道内の出願者が四八・七％に達している。これについて苦米地は「北方文化開発の重責を分担してゐる本校の使命から考へても、亦本道発展の上から見ても同慶に堪へないところ」としつつ、北海道出身者の「入学率は中学出身者に於ては二四・七％、商業出身者に於ては二六・五％にしか当らず、然もそれが或限定された少数の学校出身者に大部分を占められてゐるのは相当考慮すべき点ではあるまいか」と問題視している（なお、この年の入学者には、樺太二名、朝鮮・満州国・関東州各一名がいる）。商業学校出身者も二〇年代には全体の三割以上であったが、二割程度に下がっている。苦米地は「入学試験評点総計の比較に於ては、寧ろ中学出身者の方が遥かに優秀である」（以上、『小樽新聞』三四年四月三日）とする。

道内における「少数の学校出身者」とは、三三年入試の場合でみると、札幌一中が一六名、札幌二中が一五名、小樽中が一六名、市立小樽中が一〇名、小樽商業と函館商業が五名であった（『緑丘』第七二号、三三年四月三〇日）。

三五年の入試についても、新校長に就任したばかりの苦米地が言及している。試験問題を易しくした結果、「新卒業生の合格率が向上したこと」のほか、「都会地存置の中等学校出身者の合格率が目立つて多かつた反面に、地方の成績が頗るよろしくなかつたこと、本道よりの入学率が著しく低下したこと」（『小樽新聞』三五年四月一〇日）をあげる。北海道出身者は全体の五五％であった。また、三五年の合格と発表された者は中学出身者二五七名、商業学校出身者五二名であったが、実際の入学者は合計で二三七名にとどまった。二割以上の辞退者があつたことになる。



難関の入試（『小樽新聞』1935.3.29）

一九二六年に卒業し、根室商業学校を経て、故郷の宇治山田商業学校の教師となっていた西川正巳は、『緑丘』第七一号（三三年三月一二日、欠号だが、この記事がスクラップ・ブックに残されていた）に、「入学試験期日に就て」という寄稿をしている。

一昨年教へ子の一人にすゝめて、母校に無試験の願書を出させた。幸はひにも無試験入学を許されて母校に入学すべきであつたその教へ子は、生憎と、同時に願書を出して試験を受けた某高商の入学許可の通知の方が無試験入学の許可よりも一日早かつた理由で、遂に母校への入学を断念して了つた。又、今年も或一人に母校への願書の提出をすゝめてみたとき、その生徒が「小樽は試験がおそいから、月末にまたわざわざそのために京都迄出掛けて行かなければならぬ、他の一班二班をかければ連続して同一地方で二校の受験が出来るから、その方が都合がよい」と答へた。

さらに、西川は小樽の試験が三月末と遅いため、試験問題が受験雑誌などに掲載されることが少なくなつてしまつてゐることも指摘して、「母校は宜しく第二班に入つて、他校とその期日を同じくせよと叫びたい」と記している。しかし、こうした声は届かず、その後も三月末の試験日がつづく。

さらに西川は『緑丘』第七九号（三四年五月一〇日）に寄稿した「御入学を祝ふ」のなかで、「入学願書受付が他の官立高商よりも十日も後おそれてゐることは、母校にとつて生徒募集上極めて不利なる一大障碍ではあるまいか」と述べている。

さて、新卒業生の入学者を増やすことは、学校側の方針であった。そのため、各科目の出題も中等学校の教科書の水準でなされるようになる。三五年の入試問題をみると、英語では「受験勉強による付焼刃を防ぎ、実力本位に重きを置いた」うえで出題したとされ、ほかに「自由作文」（次ノ題ニテ五十語内外ノ英文ヲ綴レ What I want to be.）を出題している。数学科でも「教科書本位」の出題であるが、それでも「従来も良い者は非常に良く、悪い者も極端に悪かつたが、今年度はその傾向が実に端的に表れて、非常に驚いてゐる」（『緑丘』第八七号、三五年五月一五日）という講評となった。また、この年から「思想国難、国際危機の叫ばれる今日、国史を等閑に付するは教育の本義上面白からず」（同、第八二号、三四年九月二四日）という全国高商校長会議の申し合わせにより、新たに「国史」が入試科目に加わっている。出題は「一、聖徳太子の御事蹟を記せ。二、近世における我国と海外諸国との交通に就て述べよ」（一時間半）というものだった。

三四年の中学校出身者用の「国語漢文科」には、次のような漢字書取の問題があった（『緑丘』第七九号、三四年五月一〇日）。

今や改造のキウン（ ）が世界に満ち、これまで多くカンキヤク（ ）されてゐた東方文化がチュウシ（ ）  
 の的とならうとしてゐる、我が国に於ても各種の改造運動と共にコテンフクコウ（ ）、「国文学研究のフクテ  
 ウ（ ）が起つて来た、排外のメイム（ ）は先づ若い人達の中から覚めかけて来た、老年達が無自覚に  
 排外の鈍い空気のなかにシユンジユン（ ）して、古いシフクワン（ ）の保守にフシン（ ）してゐ

る中に、却つて若い人達の中に自覚的な活動、シサク（ ）がいろいろと起りかけてゐる。

作文の出題は、三〇年代の社会相を反映して「社会生活と秩序」であつた。また、商業学校出身者用の「商事要項」の出題は、「(1) 現代社会ニ於ケル商業ノ作用ヲ論ゼヨ (2) 荷為替取組ノ手續並ビニ之ニ要スル一切ノ書類ニ就テ述ベヨ」などというものであつた。

### 長びく就職難

学生の最大関心事を反映して、新聞『緑丘』は就職・進学関係の記事を積極的に掲載する。例年秋になると、就職状況の予測が載り、卒業を控えた一・二月頃は実際の就職の内定状況と今後の見通しが報じられる。

一九二五年は「財界好転の徴あるためか、本年は割合早くよりかなり申込あり」(『緑丘』第六号、二五年二月一七日)と就職難はやや緩和したが、二六年以降、再び就職戦線は厳しさを増した。『緑丘』第一三三号(二六年二月一五日)の「新卒業生百七十名の就職問題、目睫に迫る」という記事では、次のように「当局は推薦を惜む勿<sup>なか</sup>れ」と要望しており、学生たちの切迫感が伝わる。

這般は今年の申込先の中にて最も有望なりと観られて居た大阪野村銀行(注 現りそな銀行(大和銀行))に成績優秀なる者五人を推薦して、東京に於ける面会の結果、一名の採用者も見なかつた。吾人は学園新卒業生百七十余名の中に同銀行の希望条件に適合し得る人物が皆無なりとは考へ得ない。勿論学校当局としては公平なる推薦を為さんとすれば、勢ひ成績得点の順に拠るの他無い次第であるが、申込先の所謂成績優良なる条件は一種の極<sup>きま</sup>り文句であると云ふ丈の如才なさが有つて欲しい。

又今年よりは未だ一回の推薦を受けざる者が多数有るとき、同一人を二度三度にわたつて推薦するが如き推薦法を改められん事を切望する。毎年の例よりして、今年も亦之有ることを予想して、学生間に早くも不平の声高まるを聞く。

また、同号のコラム「緑丘ゴシップ」には「就職推薦に対する不平を訴ふる投書、編纂室机上に累を成す」とあり、就職難のなかで、学校側の推薦のやり方に不満が高まっていることがうかがえる。

現在の就職活動は早くも四年生の春から始まる青田買いが主流であるが、戦前の実業専門学校卒業者の場合は最終学年の秋に開始され、不況期の卒業時には半分以下の内定にとどまるということが一般的だった。このきびしさに拍車をかけたのが、二九年以降、「今後就職申込は卒業後に行ふ旨」、東京・大阪方面の「一流の銀行会社」が協定を結んだことである。このため、「雇主側よりの申込が三月以降となれば、学校当局よりの生徒の詮衡<sup>せんこう</sup>推薦はとうなるか、生徒は卒業後と雖も学校の推薦を保つため、数ヶ月も滞在しなければならぬ事も起り得る」(『緑丘』第一五号、二八年五月三〇日)などの問題に直面することになる。

その二九年一月の段階では「例年の今頃はポツポツ契約済も出来てゐたが、今年は面会を終つたのも数へる位、一層の困難は免れまい」とされる。学生たちは「目ぼしい宛がない故か」、動かず、「三井三菱安田等の大物を宛にして、三月過ぎまで自重してゐる秀才もあるだろう」(同、第二九号、二九年二月一日)とみられていた。

こうした就職先の開拓・確保は学校側にとって大きな課題であった。伴校長は就任後まもなく、二三年二月一日で「同窓生一同へ」送つた書簡のなかで、「昨年度、菲才校長就任の初<sup>はじめ</sup>、不幸実業界不振の期に当り候に付、社会に送り出すべき多数卒業生の前途に対して非常なる危惧の念を抱き居候処、意外にも夫々処理することを得候。(中略)然る処、本年も世上景気今尚回復に至らず候上、卒業すべき人員も俄に増加致候様の状態にて、その就職に関

生徒銓衡表														
大正 年 月														
No.	族籍・氏名	年 齢	兵役編制	出身地	家 庭	學業成績	特長・教科	筆蹟・文才	短 所	健康・運動	動作・容 格	性 格	卒業後	備 考
	小 林 多 喜 二	明治三十二年一月一日	陸軍少尉候補 充 夫	鹿児島県北郷郡吉野町	鹿児島県北郷郡吉野町 父 喜三郎 母 幸子 兄弟五人、次男		筆蹟 文才 弟 喜三郎 多喜文彦	小説		健康 運動 良好	動作・容 格 小作、容整、長し、造家	上野性	卒業後 小樽商科大学 （小樽商科大学） （小樽商科大学） （小樽商科大学）	酒煙草ヲ飲マズ 水釣出シ地ヲ好ム 應援者印

生徒銓衡表 小林多喜二（小樽商科大学史料展示室）

しては或程度の自信を抱き候も、尚意の安んぜざる点有之候。小生等は職責上十二分の努力を払ふ覚悟に御座候へども、若し各位の援助によりて新卒業生の為に相当の地位を得らる様御尽力下され候はば、本懐これに過ぎず候」（『小樽商商二代校長 伴房次郎先生書簡集』）と就職活動への協力を求めていた。伴校長は機会を見て各地の同窓生を訪問するほか、就職を担当する監生部の下部岩太郎部長らが東京方面に出張を繰り返かえしていたが、経済恐慌の嵐のなかで、事態はより深刻になってきた。

二九年一月九日の『緑丘』第三七号は、「御話にならぬ 就職受難の年」という見出しで、「今に至るも僅々数々の会社より申込あるのみで、例年にならない不成績さを示し、此には学校当局も全く手を上げ、先日校長は一同を集めて覚悟の程を言ひ渡し、各人それぞれ縁故などを辿つて個人的な運動をする様に勧める所があつた」と報じている。そして、第三九号（三〇年二月三日）では、「就職する人、させる人」の「希望・感想を漁る」という特集記事を組んでいる。見出しのみを拾えば、学校側では下部「悲観もすな 楽観もすな」とは、はて読めぬ謎」、苦米地「一般人間の達し得る地位はしれたもの」、平尾丹治「勧誘員が嫌とはもつての外だ」と、突き放し気味の発言である。学生側では小泉君「お面一本の意気」、渡辺君（弁論部）「遮一無二突進」、某君「何が何んだか判らないのようだ」、そして某君「窮すれば通ず」という、お手上げの状況である。

そして、三〇年三月の卒業時には五割五分が決定した。ただし、「多くの就職者は学校当局の推薦も物にならず、私情的関係、縁故関係を辿つて失業の危機を脱した如く」〔緑丘〕第四二号、三〇年四月三〇日〕だった。

三一年三月卒業時の決定率も半分程度であった。それでも、同年一月末までには新卒業者の「約八割方決定した模様」(同、第五八号、三二年一月三〇日)という。

三一年度が最低で、底を打つことになった。三二年二月時点での決定者はわずかに一三名であり、四月末でようやく三割一分に達した。そして六月末で五割を越える。それでも他校に比べて「遜色無き」就職率という(東京商大の六五%を別として、横浜高商三二%、彦根高商三五%、さらに慶応経済科四一%などであった)。のちに「デパートの神様」と呼ばれた山本宗二は、就職が決まらないまま卒業し、五月になってツテを頼って新宿に進出したばかりの伊勢丹に入社する。この年、初めて伊勢丹は大学や専門学校の卒業生を採用した。山本はその第一期生になるわけだが、初任給は四〇円だった(銀行などは七〇円程度)。頭角を現し、三九歳で伊勢丹初の店員出身の取締役となる(斉藤直晨『デパートの神様 山本宗二の生涯』、一九九四年)。

『緑丘』第六五号(三二年七月二四日)は、「此の不況の折柄、好率の原因」として、「我が校の古き歴史と共に、北海道てふ特別のヒンターランドを有して居る事」をあげる。同第六七号(三二年二月二五日)では、「卒業生の喜ぶ」老舗小樽高商 古い暖簾のれんが物を云ふ」と題して、「多年の信用も去りながら、北海道内に於ては、道内に本店を有する会社は勿論、各支店に於ても絶対優勢、他校をして一指をも染めさせず」と豪語している。この強気の発言の背景には、景気の好転にともない、就職戦線に明るさがみえてきたことがある。

就職先の地域別状況を示す統計はないが、一〇年来つづく就職難のなか、北海道に就職口を求める割合は多くなっていた。

一九三〇年三月卒業の「昭五会」の回想記『友に歴史あり』には、就職難の真只中の足跡が多く語られている。



藤倉忠吉の場合、「学校からの警告はあったが、私の卒業年度の就職難は空前のものであった。(中略)私はそのうちには学校から世話して貰えるものと思っていたので、最後まで寮に残ってねばって見た。学校からは二回斡旋があった。札鉄と新田ベニヤと云う会社だったが、両方とも一名ずつの採用で、私には「遺憾ながら……」と不採用の通知が来た」。その後、帰郷し、縁故による就職活動もうまくいかず、卒業後一年半を経て、地元の無尽会社に入る。

後述する第一四臨時教員養成所の第二期生である計良大介も、「就職先の見込のないまま郷里の佐渡に帰って来た。幾通も履歴書を書いて、学業成績書等をつけて、縁故をたどって依頼して回ったが無駄であった。約三ヶ年に汎って農業の手伝い等しながら、大して勉強もできず、ももんもんと暮らしていた」。縁故で台湾の台北市役所に勤務し、初期の目的であった高校の英語教師となったのは、戦後一九四七年だった。

高橋勇は卒業と同時に三井銀行に入社している。「入社試験の学科は英語と論文だった。面接の時ルロアポリウの経済理論を聞かれたりした。(中略)初任給は六五円で独身寮の食事代は一六〇七円程度ですむので、暮しはのんびりしたものだ。然し、銀行の経営は未曾有の不況のこととして、きびしかったようだ」。



就職難 (『緑丘』22, 1928.2.8)

## 就職戦線の好転

一九三二（昭和七）年二月二五日の『緑丘』第六七号は、前述のような「卒業生の喜ぶ」老舗小樽高商」と並んで、「就職率低下による学生の心理的委縮及び思想的変遷といふ重荷を背負ふて、校門より続く宿命の道を歩む現代学生群受難者よ」という記事を載せていた。そこには「過渡期の流れに」という認識もあったが、就職戦線に関するかぎり、まもなく好転の兆しが見えてきた。

『緑丘』第六九号（三三年一月二六日）は、「インフレ景気来る 新卒業生に幸運の訪れ 日本銀行を筆頭に多数会社の申込殺到」という見出しの記事を掲げる。前年末に「満州国」官吏（大同学院）五名採用の申込みが届くと、即日三六名の応募があったという。この「就職希望の前哨戦」以降、「就職申込数は日本銀行を筆頭に例年に比して著しく多く」なった。しかし、二月には「最近では、最初の程の香んばしい風の便りもなく幾多の失望を感じさせる」

（同、第七〇号、三三年二月三日）ことになる。

実際には四月末の卒業生の就職決定率は約四〇%となり、「之を一昨年の五十名即ち三割三分に、昨年の五十七名即ち三割一分に比すれば、仮令最初の期待程ではないと雖も、稍好調を示して居る」とされた。就職先は商事会社七名、銀行一二名、工業会社四名、官庁（道庁、市役所、税関）七名、鉄道（内札鉄五名）などで、なかでも「満州方面」が八名になったことが目立つ（前年までは二、三名）。ト部監生部長は「今年は従来申込のなかつた諸方面よりも需要があり、今後も相当容易に開拓が進展する模様であり、景気は回復の途上にあるのではないか」と樂觀視していた（以上、『緑丘』第七二号（三三年四月三〇日）。官庁・鉄道方面に就職が広がったことも、注目される。この『緑丘』第七二号には、「札鉄採用試験問題」と「函館税関試験問題」が掲載されている。たとえば、前者では「金輸出禁止が我国ノ経済ニ及ボス影響ヲ説明スベシ」などが出題されている。

小樽市役所では三三三年から「従来の情実を排して」、試験採用制をとった。一六名の採用に三〇〇名が殺到した。



軍需景気襲来 (『緑丘』79, 1934. 5. 10)

小樽高商からも一〇名が応募し、三名が合格する(『小樽新聞』、三三年四月一四日)。

三三年を境に、「軍需景気襲来」によって就職戦線は好転した。三四年三月の卒業生も、「永らく其効能がなかつた卒業証書は、今年こそは有効手形となつて信用され、社会に認められるらしい」として、五月までに七〇%の就職率となった。「景気は先づ商事、炭鉱、工業、運輸等の諸会社に表れ、又本校の地盤たる銀行方面にも相当の進出を見せてゐる」(『緑丘』第七九号、三四年五月一〇日)という。「満州国」・満鉄方面には九名が決まった。この好転は、すぐに入学志願者の増加も促す。

さらに、住友鴻の舞鉾山(紋別)から数名の試験的採用の申込みがなされるなど、早くも三四年夏には次の就職戦線が動きだした。三四年一二月一三日の『緑丘』第八四号は、「冬訪れた学園に 春回りし微笑の姿」として、次のように記している。

就職先の意向は大部分例年の通り実業界、官公署等であるが、本年度は昨年度に比してヨリ以上の軍需関係の需要が多いが目立ち、三十二年を控えた非常時日本の姿其のまゝを反映してゐる有様である。それに加へて新鋭満州国の花形である、満州中央銀行を始め、満電、朝鮮郵船、日本自動車等近年に見ない特殊部門からの申込みもあり、一時的好況であるにせよ、とにかく好況に有能の士は吾先にと靡なびいてゐる。(中略)一流どころは例年の如くに申込がある、然し一般的に見て大銀行会社が主である。そして申込は早かつた昨年よりも一層早い有様である。(中略)採用条件も体力的強健を重視してゐる様で、「のんび

りした」連中も大いに活躍期を与へられて来てゐる。最後に特筆大書する。「三菱」からの申込も有能強健の士を望んでやつて来たとの由である。

三五年三月の卒業時には、卒業者総数一九〇名中、未決定者は四二名と、好成绩である。目立つのは鉾山会社の一六名で、「満州」方面にも七名を数えている。そして、五月になると八三%という「驚異的就職率」となった。「従つて就職先も大いに新天地を開拓され、どしどし新興産業に吸収され、商事会社も飛躍的增加を見て」おり、「学園は毎日の様に颯爽たる背広姿のニューサラリメンの訪問をうけて、各所に祝福と感謝の辞が交換されてゐる」(同、第八七号、三五年五月一五日)という。

ところで、『緑丘』第七二号(三三年四月三〇日)に、二四年卒の金井健四郎が「新卒業生を迎へて」を寄稿している。社会人として働く上での、経験にもとづく「所感」として、「健康」「明朗性」「實際習練」「誠実勤勉(如才ないこと)」「努力と工夫(職の如何より工夫の如何)」、そして「人和」をあげる。なかでも「實際習練」のなかで、「兎角上級の学校を出てきた者は初歩の実務を厭ひ、高慢な態度になり勝なものであるが、其の会社銀行にとつては仕事を一通り習得するまでは、それ等学校出の青年は小店員より遙に實際上役立たないことが多いのである。帳簿一つ満足に記入し得られるのは、少くとも数年実務を一通り体得したる後である。されば文字数字の練習或は線を引くとか、掛算割算等些細なことより、不斷に実務の習練を積むことが、他日指導者の任に当る時の基礎事務であることを忘れてはならない」と述べており、後輩にとって具体的な指針になったと思われる。

### 官立商科大学への進学

卒業者の一割前後が、毎年上級学校への進学を希望している。多くが東京商科大学で、なかには神戸商科大学・

大阪商科大学や帝国大学を志望する者もいる。一九二四（大正一三）年卒業し、拓銀に就職していた小林多喜二は、二五年三月、東京商科大学を受験するが、不合格となる。二五年卒業の伊藤整は市立小樽中学に勤務していたが、二六年三月の東京商大の受験に失敗し、翌年度に合格する。そのとき小樽高商出身者は二七名が受験し、伊藤を含む八名が合格している。

東京商科大学の『一橋新聞』第三号（二四年七月一八日）によれば、同年度の大学本科の入学者のうち、商学専門部の二二名、神戸高商の二一名について、小樽高商は一四名（志願者三三名中）を占めており、長崎・山口・名古屋の各高商を引き離していた。ただし、三一年には七名の受験者のうち合格者は三名にとどまり、名古屋・横浜・福島・高松などの後続の各高商の後塵を拝することになる（『一橋新聞』第一〇号、三二年三月二七日）。

二八年には一二名が受験し、五名が合格する。この年から、『緑丘』に東京商大の試験問題が掲載される。二九年には一四名が受験し、板垣与一ら六名が合格している。八六名の合格者中、商大専門部（一七名）、名古屋（九名）、神戸（七名）、横浜（七名）につぐ成績だった（『緑丘』第三号、二九年五月一日）。二九年度の試験問題のうち、「論文」（三時間）は「一、法の社会化」「二、労使協調主義」「三、議会政治の本質」「四、アメリカ文明の批判」「五、十八世紀啓蒙思想の批判」「六、株式会社の経済的社会的意義」「七、銀行券発行制度における近時の傾向」のなかから二問を論述するものだった。

板垣与一「緑丘懐想」には、東京商大志望の動機が次のように語られている（『緑丘五十年史』）。

三年の秋学期、大野先生の留学中、貨幣論の講義のため来学された東京商大高垣寅次郎博士の名講義に強い印象をきざみ込まれた。博士の学位論文「貨幣の生成」「本質」「職能」の三部作を読み、時あたかも、左右田喜一郎博士の「貨幣と価値」の川村豊郎訳が、ヘーゲル全集のグロックナー版と同一の装釘の豪華版として新刊



板垣与一

された。それを丸文の店頭から買って読み耽ったことが、左右田哲学への眼を開き、東京商大への入学志望をかきたてた大きな動因となった。

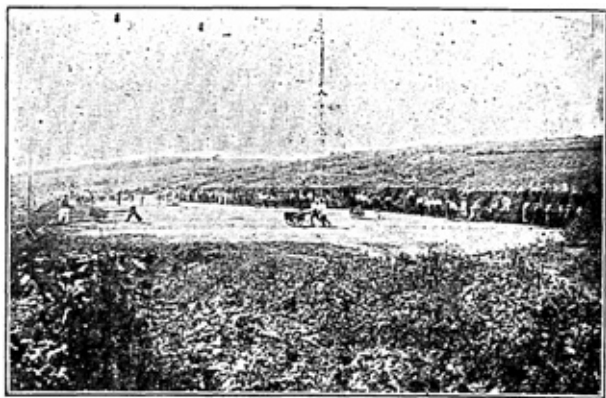
また、三〇年卒業の熊谷林作は、「当時は第一次大戦後の不況就職難時代なので、三年生になり、特待生になったのに勢を得て就職を延ばし、東京商科大学へ進学しよう」（私の履歴書）『友に歴史あり』と考えたという。

三一年の進学者数は不明だが、三二年は東京商大に石河英夫ら三名、大阪商大に一名、神戸商大に二名、九州帝大に一名となった（『緑丘』第六二号、三三年四月二六日）。三三年は東京商大に五名、神戸商大に六名、大阪商大に一名であり（同、第七二号、三三年四月三〇日）、三四年は東京商大に五名、神戸商大に一〇名、大阪商大に一名である（同、第七九号、三四年五月一〇日）。三五年は東京商大に四名、神戸商大に八名で、「合格率は近年低下の方向にある」（同、第八七号、三五年五月一五日）とされる。東京商大の合格者が漸減傾向であるのに比べ、神戸商大では漸増傾向にある。

### 山上グラウンドの竣工

開校以来、欠けているものが運動のグラウンドだった。体操は本館前の校庭をやりくりし、野球部やラグビー部などの練習は校外の運動場を借りるほかなかった。傾斜地を整地した現在の校地の近くに適当な広さの土地を見つけることは困難だったが、苔米地英俊と糸魚川祐三郎の奔走によって、地獄坂の突当りをさらに進んだ津軽街道沿いの伍助沢の土地約一万三千坪を見つけ（校舎から一五分ほどの距離）、所有者串田長次郎の好意により約五千円という破格の値段で譲り受けることができた。しかし、ここも傾斜地であるため、整地する費用の調達が難題だった。

一九二四（大正一三）年一〇月四日の『小樽新聞』は「グラウンド工事に働く高商生 職員会議で申出を容れる



尺又寸さ伸びて行く新運動場

されど彼岸や遠し  
掘れ！運べ！

HEAVEN HELPS THOSE WHO HELP THEMSELVES.

山上グラウンドの整地（『緑丘』2, 1925. 7. 1）

明春工事に着手」と報じた。「在学生の間に此の際、母校奉仕と筋肉労働の体験の二つの意味をかねて、グラウンドの工事を我々の手でやらうではないかといふ声が起こり、遂に全学生の賛する所となつて過般の学生大会に於て之を決議し」、校長に申入れをしたところ、「之から世に出る学生が労働体験をするのは大いに参考にもなる試み」として、それを受けることになった、という経緯である。

その後の工事の進捗状況は、創刊されたばかりの『緑丘』で追える。融雪を待ち市役所の助力を得て測量をおこない、予定より遅れて二五年六月八日に起工し、授業後の時間などに学生や校長を含めた教職員の勤労奉仕が進められた。苦米地は校友会庶務部長の立場から、「炎熱焼くが如き日にも細雨霏々たる日にも勇ましく土工を進めてゐる我が校五百の健児が赤誠、これに動かされたる教職員諸氏、皆心を一つにして此の大工事に協力して下さいてゐます」と述べて、「同窓諸君へ」工事費の貸与や寄付を呼びかける（『緑丘』第二号、二五年七月一日）。こうした努力の末、初年度の工事として野球場程度の広さを確保するとして、約三八〇〇坪の整地が完了する。『緑丘』第五号（二五年一月二六日）は、「偉大なる哉愛校の至誠、團結の力、そこには何者も侵す事が出来なかつた。緑ヶ丘を蔽ふ小樽高商スピリットの一大発現にあらざして何であらう。寔にこれが我開校十五年の歴史に咲く一精華であ

る」と感激を記す。

この第一期の竣工を祝って、一月一日には記念運動会が開催された。伍助沢のグラウンドで式典は開かれたものの、祝賀運動会そのものは花園グラウンドで実施された。

一年後、『緑丘』第一二号（二六年二月一日）は加島啓一の「新設運動場に就て」という論説を冒頭に掲げる。「当時の緑丘人は一致団結異常な熱誠を以て」難仕事を成し遂げたものの、「今日其が単なる空地として使はれる以上に使はれて居るか。悲しい哉。運動場として何等の利用をも齎らして居ないのである」と指摘して、「空地だけが切り開かれたのに過ぎなかつた其を運動場として完成するのが吾々の責務」と論じる。

その後、中断したままだったが、一九三〇年夏に再開された。校友会の理事会と学生大会で満場一致の賛同を得ると、夏休み前の完成を前に、学生たちはクラスごとに放課後の労働に取組んだ。『緑丘』第四五号（三〇年八月三日）は「目覚める許り<sup>ほか</sup>上げられた眺望絶佳のグラウンド」という見出しで、「該拡張工事の一端を負ふ学生夏季労働は、工事そのものよりも学生自身に多大の効果的な感銘を与」えた、とする。山上グラウンドは軍事教練の射撃場などとしても利用された。

### 校舎の新増築

学生数の増大とともに、教室不足に対処するため、この時期に何度かの校舎の新増築がおこなわれた。

創立当時から雨天体操場を利用していた柔道部と剣道部の道場が、一九二四（大正一三）年一月、校門の左手に建てられた。二五年一〇月一〇日、道場開きの剣道大会が実施されている。

二五年度には、商品陳列館側の本館に二階建て部分が増築され、簿記教室とタイプライター室に充てられた『緑丘』第一号、二五年六月五日）。二六年五月には、本館中央二階の合併教室などが改築されて、全学生を収容できる仮講堂となっ



た。

一九二九年、神戸高商の神戸商大昇格にともない、小樽高商では入学定員が一クラス分増えて三二〇名の定員となった。このため、教室不足に対応するため、五万円を投じて二階建ての校舎が新築される。三〇年六月に着工、一二月に完成した。第一寮と柔剣道道場に対面したテニス・コートとなっていた土地に、「十六間に十間の二階造りで、階下は普通教室六、階上は大教室一」で、大教室は講堂として使用され、七二〇名を収容できる。「此の新校舎が完成すれば、現在行はれてゐる一組五十人以上の編成（但し三年は約四十名）は三十名乃至三十五名の理想的編成と改め得られる」（『緑丘』第四一号、三〇年四月二五日）と期待された。『緑丘』第四六号（三〇年九月二五日）では、「明るい感じのする赤いお屋根の学び舎」として、完成間近かの写真を載せた。階下の教室には、商業実践室やタイプライタールームが置かれた。

大教室と同時に、図書館に鉄筋コンクリート三階建ての書庫が新築された。第二書庫となった。

三二年一二月には、本館西側に教室が増築された。階下に二教室、二階は合併教室となった。

教職員の官舎の建設も進んだ。第四寮（玉の井寮）や実践工場のある緑二丁目には、校長官舎などが整備され、伴校長や手塚・浜林らが住んだ。また、外国人教師の官舎も校内や入舟町に建設された。なかでも入舟町の二号官舎は長くマッキンノン一家が居住し、「赤い丸屋根の家」として知られた（二号官舎とともに、北大の外国人官舎の設計に準じている）。建築史上からは、「特筆すべきことは、ペチカという暖房装置の導入である。大正一五年度以降の北大、高商の官舎は全て、ペチカを中心とした接客および一家団欒を兼ねた一階と、個室群の二階という空間構成をみせている。さらにペチカだけでなく、壁付き暖炉の採用、二重窓など防寒への配慮も同時にうかがわれる」

（池上重康・越野武・角幸博「北海道帝国大学および小樽高等商業学校備外国人官舎（大正一四年～昭和二年）について」『日本建築学会設計画論文集』第四八四号、一九九六年六月）と評価されている。

一九二五年二月には、緑二丁目に二階建てのモダンな「高商倶楽部」が新築された。すでに一九一六年以来、第四寄宿舎分舎として学生の合宿所・集会所などに利用されてきたが、一・五倍の広さとなった。寄宿舎建設同盟会が借地・新築したものを借り受けるという形となった。『緑丘』第六号（二五年二月一七日）は、「学生には好個の娯楽場 外観内部すべて文化式」と報じた。

緑丘の風景も急速に変化してきた。『緑丘』第三号（一九二五年一〇月六日）のコラム「四つの驚き」には、「一つは地獄坂が真直ぐに教授街に通じた事である、坦々たる大道が一直線に公園に通じた訳である」とある。「教授街」とは前述の緑町の官舎のことで、小樽商業学校の下から、花園公園につづく道が整備された。

さらに『緑丘』第五六号（三二年九月二〇日）は、住宅街の造成作業の写真とともに、次のような文章を掲げる。

スキーの好適地としての緑ヶ丘学園に学んだ者にとつて「冬の緑ヶ丘」は忘れられぬ思ひに残る丘である。だが——春以来丘に加へられてゐたツルハシとシャベ



大講堂

ルは何時のまにかなだらかなスロープを立体的な構図に変へてしまった。

緩やかなカーブをもつてゐた丘は、今や直線と直線の交錯、立体と立体との疊積となつた。

(中略)

昔の「緑ヶ丘」はどこへ行つた。面影も止めぬままでに变化した。「緑ヶ丘」——やがてそこに家が立ち並んで行く時、それはスキー場として有名であつた「緑ヶ丘」の名が人々から忘れられて行く時であらう。

目に見えない社会の余波がこうして学園にもおしよせてゐる。

三三年五月三十一日の『緑丘』第七三号によれば、「本校にては近年四囲の状況が漸次住宅向に改変されつゝあるに鑑み、防火の意味より近接土地を買収し、すでに津軽山方面に属する空地その他を買ひ入れ校地を拡大してゐたが、今回又青木氏所有の学校下の空地千三百五十一坪を買収した」という。この買収地は現在のテニス・コートの一部、「津軽山方面に属する空地」とは合宿所などのある土地と思われる。

なお、二四年三月、小樽の倉庫業などで財をなした稲積豊次郎（「稲積公園駅」にその名を残す）から緑五丁目土地三六七五坪が寄付されている（同時に「生徒奨学費及学術研究費」として一万円が寄付されている（庶務課「寄付行賞綴」））。

こうした数度の拡張により、創立当時約一万坪であつた校地は、伴校長期の退任するときには二万四千坪あまりとなつた（寮・官舎敷地を含む）。

#### シャンツェの設置

特筆すべきは、一九三二（昭和六）年冬、校内にシャンツェ（スキー・ジャンプ台）が完成したことである。前



シヤンツエ

述の山上グラウンド建設に際して、そこにジャンプ台を設置することも計画され、適地が探されていた。スキー部では天狗山のシヤンツエを利用していた。

日本のスキー競技の指導のために来日していたノルウェーのヘルセット中尉一行（その指導で札幌に大倉山シヤンツエができる）が、二九年三月、小樽を訪れた際、小樽高商では候補地の選定を依頼した。三月二四日の『小樽新聞』に、「小樽高商付近に好適なシヤンツエを発見 ヘルセット中尉の選定にて 理想的なスロープ」という記事が掲載される。しかし、この場所はやや遠隔であるため、改めて「学校敷地に需めた処、午砲山より北向に校庭に入る箇所」に適地を見出し、高橋次郎の考案で建設が始まる。費用は文部省から配分された体育設備費で、二カ年計画により、「今年は大体飛行台並にランデングの土工を主とし、来年はアプローチの槽を組む予定で、飛躍距離は三十メートルを見当とする」（以上、『小樽新聞』三〇年一月二七日）とされた。その下には合宿用の小屋も設けられた。

『緑丘』第五八号（三二年二月三〇日）は、「若人の飛躍を待つ 愈々完成したシヤンツエ」として、その全景写真を掲げる。そこには「愈々シヤンツエも完成した。思ひ切り飛んで浮世の苦勞を忘れるのも又一興。だがあまり飛びすぎて、学期試験もシヤムプしない様に……。」

とある。一月二三日、シャンツェ開きがおこなわれた。このシャンツェから優秀なジャンパーが輩出することは後述する。

#### 第一四臨時教員養成所の設置

一九二六（大正一五）年四月、小樽高商内に第一四臨時教員養成所（英語科）が設置された。二六年度と二七年度の二年間のみの学生募集で、文字通り「臨時」だった。『緑丘』第九号（二六年五月一〇日）には、「本校に急設された臨時教員養成所」という短い記事が載る。

臨時教員養成所は増大する中等学校の教員を養成するために、文部省が高等教育機関に設けるもので、多くの臨時教員養成所は一九二一年から二二年にかけて設置された。二六年三月、文部省告示により、東京外国語学校に第一二臨時教員養成所（英語科）、第五高等学校に第一三臨時教員養成所（数学科）、そして小樽高商に第一四臨時教員養成所が設けられた。文部省からの指示による開設である。北海道では始めての設置（二七年、北大に第一六臨時教員養成所〔博物〕設置）であり、英語科としては東京高師・広島高師・大阪外語につぐ設置である（文部省「臨時教員養成所」、国立公文書館所蔵。以下、本資料による）。小樽高商の英語教育の質の高さゆえの設置であることは間違いない。

かなり急な設置と学生の募集・試験であり、そのあとの五月一日になってから文部省に「養成所規則」認可の稟請がなされている（五月一二日の決裁、指令は五月二日付）。「規則」第一条は「本所ハ臨時教員養成所官制及規程ニヨリ、師範学校、中学校及高等女学校ノ教員タルベキ者ヲ養成スル所トス」とし、英語科・修業年限三年とする。学期は三学期制で、前述した高商本体の二学期制とは異なる。募集人員は三〇名で、そのうち一五名を文部省給費生とした。「生徒学費補給規定」には「学費八年額參百円トシ、管理者ニ於テ学業、操行其他ノ事情ヲ考查シ、適当ト認メタル者ニ補給ス」とある。月二五円の生活費が保障されたことになる（給費生は在学年限の一倍半の期間、

教育に関する業務に復する義務が規定されていた)。臨教では授業料は徴収されなかった。制服などは高商のそれに準じている。襟章は「T」の文字とされた。

先の『緑丘』第九号には「四月廿三、四の両日が学科試験、廿六日が口頭試験である」とあり、同二八日に発表された合格者は二八名だった(うち給費生は一五名)。北海道出身者は最初の年度が六名である。

二度目の募集となる二七年度の試験は小樽と東京でおこなわれ、「英語(英訳、和訳、書取、聴取)、国語漢文、数学(算術、代数、幾何)、及び歴史(西洋史)」で、「口頭試験の際、一寸したリーディングを行った」(『緑丘』第一七号、二七年五月五日)。英作文では、「中学校卒業後、いづれの学校に入学すべきかと久しく決心がつかねましたが、英語の教師となるのが一番自分に適すると思ひ、此の教員養成所にきめました」(『緑丘』第一七号、二七年五月五日)が出題されている。一四五名の応募者があり、二九名が合格した(給費生は一二名、北海道内出身者は一八名)。

この養成所の「管理者」は伴校長とされ、授業は英語関係の教員のほか、卜部(国語・漢文)・八木沼(教育)・菅(体操)らに嘱託された。

五月五日に開所式がおこなわれ、六日から授業が始まった。二八年の夏休暇中には、文部省の委嘱を受けて、臨教卒業生(他の養成所)や中等教員のための「英語講習会」を実施している(『緑丘』第二六号、二八年七月三日)。

### 臨教の授業

埼玉師範を出て小学校教員となっていた小島祐三は、東京商大の校舎で養成所の試験を受け、一九二七(昭和二)年四月、給費生として入学する。その入学当初を「印象的だった。何から何まで。校庭からの街と、港の眺め、図書館の広さと、音と、あの独特の匂い。勝手の解らぬグルグルまわりの教室、変な所にある講堂、ラセン階段。雪々等」と回想する(『私の履歴書』昭五会『友に歴史あり』)。また、同期で、佐渡中学から給費生として合格した計良大介は、

「臨教の三年間は誠に自由で楽しく且有意義であった。さすがに専門コースだけあって、語学関係の時間が週二十数時間もあり、充分たんのうさせられた」として、次のように教師の印象を語る〔私の履歴書〕 同前。

先ず何よりの驚きは外人教師が多数居られたことであつた。中でもオクスフォード出たての若い英国紳士モリスン先生の英文学講義は光つていた。その他キャメロン先生の英国史と雄弁術。米国人マッキンノン先生のラテン語と聖書講義、スミス夫人の英文学史等々。外人教師の話す英語が分つて来るにつれて、少しずつ英語の本質が理解されて来たようで、この上ない嬉しいことであつた。それに日本人の教授陣も多士済々で錦上更に花を添えるものであつた。苦米地先生の英文法、中村先生のマクベス、浜林先生のジュリアスシーザー、小林

第四條 學科目及其ノ程度左ノ如シ

學科目	學年		
	第一學年	第二學年	第三學年
修身	一	一	一
教養	二	二	二
英語	二〇	二〇	二〇
國語	四	二	二
佛語(又ハ佛語)			
體操	二	二	二
計	二九	二九	二九

臨教学科目 (1927)

前表ノ外隨意科目トシテ一週二時間由業、經濟、法律及歴史ノ中其一ノヲ選スルコトアルヘシ

先生の詩と現代劇、大谷先生の論文、若松先生の小説等々、今憶い起しても誠に懐しい限りであります。在学中数回英語弁論大会に出場の機会を得たことも又良い経験でした。その三年間ほんとうに夢中で勉強した。

「学業成績書」の記載によると、次のような科目がおこなわ

れている。

一年 修身・教育・英語（読方会話・散文・劇及詩・文法・作文A・作文B・沙翁劇・羅甸語・英国史）・国語・漢文・体操

二年 修身・教育・英語（読方会話・散文・劇及詩・文法・作文A・作文B・沙翁劇・聖書梗概・英文学史）・国語・漢文・体操・仏語・経済原論

三年 修身・教育・英語（読方会話・散文・劇及詩・作文A・作文B・雄弁法・沙翁劇・希臘神話・英文学史）・言語学・体操・独語・法学通論

臨教クラスの修学旅行ともいうべき「京浜中等学校英語授業参観」が、三年生の夏に実施された。二七年度は六月二七日から七月五日の日程で、苦米地英俊が引率し、東京高等師範付属中学・府立一中などの授業を見学している。その「参観記」のなかで、「テイ、トム生」は「先生は生徒を一紳士として対し、生徒は先生に絶対に信頼して、教室はあたかも小学校のその如き感をあたへ、何れの学校にても天真爛漫な授業振りを羨望した事、或学校では女教師を採用して少しの不都合も無く授業を進めて居り、他の学校では上級生に英国製の本を教科書として採用してゐた所があり、更に何れの学校へも外国人が来て直接生徒と簡単な会話の練習を巧みにやつて居た事などが、英語学習上に甚大の貢献をなすものなることを力説致します」（『緑丘』第二七号、二八年七月六日）と、収穫物を記している。

翌二九年度も同様で、引率した小林象三の「臨教生と東京へ」が『緑丘』に連載されている。先の学校のほか、フェリス女学校や松竹蒲田撮影所なども見学し、最後は帝国ホテルを参観し、解散している。帝国ホテルでは、「一同は日本一、東洋一、いな世界有数の大ホテルの中にあつて、こゝ、かしこに欧米人の姿をみつゝ、イングリッッシュ・



スピーチをきいたので、一同洋行中の如き感おのづとわきいでたわけである」（『緑丘』第三六号、二九年二月二九日）という。

卒業を控えた三年の秋には、小樽商業学校や市立中学校などで一週間にわたり、「英語担任諸教授指導の下に英和漢、英文法、作文等」（『緑丘』第三六号、二九年二月二九日）の実習授業をおこなっている。

臨教生も緑丘生活を満喫したようである。二七年一〇月の校内弁論大会は「臨教生が大多数」（『緑丘』第二〇号、二七年一〇月一八日）という状況だった。また、臨教では「単独開催でお手のものの英語の実地練習に」（同、第二五号、二八年五月三〇日）英語劇大会を開催し、市民にも公開している。二年生の演目は「神々の笑」、三年生は「リンカーン」である。

臨教生の牧野健四郎（二九年卒業）は、『緑丘』の文芸欄で活躍している。第二七号では、石川啄木に傾倒し、「現代の若き人々にして多少なりとも「明日」又は「来るべき世紀」を考へ、凝視の眸ひとみを注ぐ者にして彼の芸術に熱烈なる共鳴憧憬の情を寄せないものが一人たりともあるであらうか」と述べて、「啄木会の設立を提唱す」る。この呼びかけは実って、一月の第一回の集まりには高田紅果を招いている。さらに牧野は、第二回啄木会で発表した文学論を「無産階級文学に対する一考察」と題して、『緑丘』第三〇号（二九年三月三日）に発表する。ここでは、「実に第二十世紀の最も生氣ある価値ある文学運動は此のプロレタリア運動である」という認識に立ちつつ、「その底に芸術的な流れが、詩の流れが流れてゐなければならぬ」と論じる。

さて、二八年度と二九年度は募集がなく、三〇年三月二二日をもって、第七臨時養成所（京大、国語漢文・数学）とともに第一四臨時教員養成所は廃止となった。第一回卒業生は二五名、第二回卒業生は二九名だった。前述したように、折からの不況で、卒業先に中等教員の口を確保できたのはごく少数派だった。

## 研究科設置の動き

前章第五節でみたように、文部省は大学昇格運動の見返りとして「研究科」設置構想を打ち上げたものの、財政上の理由で実現の見通しは立たないままだった。小樽高商をはじめ、各校はその実施を待望していた。

たとえば、一九二八（昭和三）年七月六日の『緑丘』第二七号のコラムには「専攻部とか研究科とかの設置で大分各方面に期待を持たしたが、さつぱり具体化しない」とある。また、二九年二月一日の第二九号の「論説 学園時事と緑丘精神」は冒頭で、「研究科設置は幾度か我等の耳に喧伝され、而も其の真を伝ふる事甚だ模糊たるものあつたが、今回今四月開校の運びにある東京、広島両師範大学と共に、我小樽高商及山口其の他旧高商に二ヶ年制研究科設置の実現の確定的報道を耳にし、更に過日始業式に於ける伴校長の言及より、吾人は其の実現の一両年中に迫れるを考へるのである」という。その一方で、この論説は「吾人は我等が古き先輩の残せる昇格運動の歴史を偲び顧て、研究科設置問題に対する驚くべき冷淡なる態度を見、茲に一言以つて大方の関心を促したい」と述べていた。しかし、この「確定的報道」は幻に終わる。

そして、一九三三年六月一二日の『東京日日新聞』（現『毎日新聞』）は、「小樽高商の宿望」「研究科」愈々実現かくて昇格へ第一歩 来春貿易、拓殖の二科目設置」という見出しで、次のように報じた。

小樽高商が数年来待望してゐた研究科はいよいよ来春から設置する旨、十日本省から内報があつたので、伴校長はじめ全員は商科大学への昇格第一歩なりとして、直ちに準備に着手すること、なつた、新たに設置される研究科は二ヶ年で卒業するもので、来春は一年生<sup>さんじゅう</sup>卅名を募集すること、なつてゐる。研究科目は貿易と拓殖との二科目で、拓殖科の如き本道に最もふさわしく、また道産品を中心とする貿易科はますます隆盛となり、殊に最近では大満州との貿易が非常に有望になつてゐる関係から、貿易科の設置は最も歓迎されるであらう、たゞ

遺憾とされるのは二ヶ年の卒業期間になつてゐるため、僅一ヶ年の不足で学士号を得ることが出来ないことである、しかし現在の高商三学年制は近き将来に四学年制に延長されることになつてゐるので、研究科の設置はこれが先鞭をつけたものと見られるわけである。

『読売新聞』（三三年六月一四日）もほぼ同様な内容である。長崎・山口両高商を含め、合せて九つの実業専門学校で研究科を設置するという計画が、唐突に文部省から内示されたようである。二九年の時よりも、かなり具体的な内容となつてゐる。

三三年六月一日の『小樽新聞』は、これに対する「内報等はまだ入つてゐないので何も申し上げ様がない、然しすでに過去十数年前に決定してゐる問題なので、ただ実施を待つてゐた次第である、余りの長年月のためと依然たる不況のため、実は諦めてゐた状態である」という伴校長の談話を載せる。さらに、苦米地は「大正十二年頃には当時の状態や本道の産業方面其他を考慮に入れて、外国貿易や移民指導等の方面に力を注ぎたいと考へてゐたが、今直ちにこの案を採用するか否かはかなり考へねばならぬので、確定的なところは申上げられません、時代に最も適応したものを取入れなければならぬでせう」と語つておる。

おそらく学校側には予想外の出来事であり、学生にとつては実感をもてないものであつたと思われる。したがつて、といふべきか、『緑丘』の紙面にはこの研究科の設置計画に関する記事はほとんどみられない。第七四号（三三年六月五日）のコラム「便衣隊」欄に、「研究科設置もよからう。だが、その前に先生も生徒も勉強々々」とあるように、学生の冷やかな対応は、かつての大学昇格運動の熱意との落差を際立たせる。

文部省によるこの実業専門学校への研究科設置計画は、次年度予算編成過程であえなく消えてしまふ。それでもわずかな火種は残り、二年後の苦米地校長の就任直後に再燃する（後述）。

## 第三節 研究体制の展開

### 研究活動の推移

一九二七（昭和二）年一月一日の『緑丘』第一四号第一面下段の広告欄には、小樽高商教員の著作が並ぶ。十蔵寺宗雄『民法総則概要』（文信社）、故大西猪之介『人口と国力』（宝文館）、椎名幾三郎訳『海上保険』（宝学館二松堂）、浜林生之助訳『近代英文学叢書』（一〇冊、健文社）、同『英文構成法』（健文社）、手塚寿郎『ゴッセン研究』（同文館）である。

二九年五月一日の『緑丘』第三一号第一面は全面広告で、そこには『大西猪之介経済学全集』（宝文館）、苫米地英俊『商業英語通信規範』（瞭文堂）、手塚寿郎訳『国際貿易に於ける貨幣の職分と貨幣数量説』（同文館）、浜林生之助訳『近代英文学叢書』・『英文構成法』（健文社）、南亮三郎『経済学の基礎的諸問題』・『社会哲学と思想問題』（宝文館）が並ぶ。大西猪之介を失いながらも、南亮三郎と高島佐一郎による『大西猪之介経済学全集』編集（後述）を大きな刺激材料としつつ、多数の教員の研究成果は著作などのかたちで結実していった。旺盛な研究活動が「緑丘ルネサンス」を支えたといえよう。その一つの頂点が、一九三一年一〇月に創立二〇周年を記念して刊行された『商学討究』「特輯号」である（後述）。

しかし、ここを境に研究活動は停滞気味になっていく。実は、早くも同年一〇月三〇日の『緑丘』第五七号の論説「回顧より未来へ」では、「學術研究の諸機関の存在は決して劣つて居るとは云へない」としつつ、「真理の殿堂としての学園も今は何等の清新さを持たない」と断じていた。三三年には、その傾向は顕著となる。五月三十一日の第七三号のコラム「緑丘展望」で、ある学生は「学宝手塚教授のワルラス翻訳出ず。学校の生命は学問にある。学

旺盛な研究活動が展開されるが、それらは比較的少数の固定的な教員群によって推進されたものであり、校内全般の研究状況は一九二〇年代と比べると低調だった。

第四章の範囲となるが、伴房次郎に代わって第三代の校長となる苦米地英俊がまず着手したのは、教育研究を支える優秀な教員団を確保するための学術研究資金の確保だった。それは、三〇年代前半からの研究活動の停滞という危機感から導かれていた。



一面広告（『緑丘』31, 1929. 5. 1）

校の声価はスポーツの勝負や地の利に<sup>ママ</sup>関せない。研究心横溢の教授団（二人や三人でない全部）と真摯な学生にある」と、現状へのいらだちを暗示する。さらに翌七四号（六月二十五日）の「便衣隊」欄にも、「教授の使命は真摯な本能的良心的研究と其の教授にありと。其の他は先ず前者を果してから」と、具体的な批判内容は不明ながら、教員の研究への辛辣な言をもらす。

三三年から三四年にかけては、後述するように北海道経済研究所の設置、その成果『土功組合の研究』などの刊行、日本経営学会関東部会小樽大会の開催、さらに『マルサス研究』の刊行などと

## 教員人事の諸相

伴校長の就任から数年間、教員の辞職・割愛、それに伴う補充人事という慌ただしさがつづいたことは前述した。人事関係の文書から、それらの諸相をみよう。

一九二三（大正一二）年五月一日付で、市立大阪高商長から伴校長宛に、「英語」担当の大平頼母の割愛依頼が届く。「本校教授増員ノ必要有之、過般来種々考慮ノ結果、貴校教授大平頼母氏ノ来任ヲ希望致居候間、甚御迷惑トハ存候得共、何卒御差繰ノ上御承諾被成下度」という内容である。大平は七月二一日付で転出する。おそらく、小樽高商側が他校に割愛を申入れる場合も、同様の文面になっただろう（庶務係「高等官進退関係綴」）。

この時期に限らないが、大学などを卒業してすぐに採用する場合、まず試用期間的に「講師」待遇とした。そして、一年後に助教授ないし教授に昇任させる。一三年一月一〇日付でそれぞれ教授となる大野純一（助教授）・南亮三郎（講師）・室谷賢治郎（講師）の昇任の経緯を示す次のような文書がある（同前）。一〇月六日付の文相宛の校長上申書である。

右者何レモ本校教授ノ新設校ヘノ転任ニ由ル欠員補充ノ目的ヲ以テ招聘シタルモノナルカ、当時ハ商科大学卒業直後ニテモ有之、講師トシテ授業担当セシメ候処、何レモ熱心ニシテ教授ニ任用スルニ至極適當ノモノト存候、而シテ本校トシテモ欠員ノ儘ニテ講師トシテ一時的授業ヲナサシムルハ、生徒ノ訓育上ニモ甚大ノ關係アリト被存候<sup>かた</sup>、此際教授ニ任用上申ニ及ビ候

さらに大野の場合は、すでに教授となっている糸魚川祐三郎と同期卒業、同期講師の嘱託であったが、兵役に服したことで教授任命が遅れていること、南と室谷については在外研究員の派遣や教授転任により講師を嘱託したが、

その後、加藤録蔵の病氣辞職・大熊信行の病氣休職により、「至急任命ヲ要ス」という理由が付されている。

なお、大野はこの教授昇任に先立つ採用の事情について、大西猪之介の一通の手紙が決定的だったと回想している。東京高商専攻部の卒業を前に、銀行への就職がほぼ内定した一九二二年二月初ころ、突然、大西から「今後、一国の経済の動向は単に一国だけを切り離して考えるべきではなく、常に世界経済の一環として観察すべきである、そのためには各国の貨幣制度並びに外国為替を独立の講義として開設すべきである。就いては小樽に帰ってこの科目を担当する積りはないか。もしその意志があれば、自分宛に至急返事をして貰い度い。諸条件、殊に留学の問題については自分に一任され度し」（大野「先生の一通の手紙と私」、「大野純一先生追想集」という主旨の手紙が届く。小樽高商出身の大野に白羽の矢が立つように、優秀な卒業生がいれば積極的に採用する方針があったと思われる。

相次ぐ人事案件に伴校長は奔走を強いられたようである。たとえば、二五年三月には「教官備聘及事務打合せノ為メ、東京市及名古屋市へ八日間ノ予定」で出張する。九月にも「教官聘用」や「卒業生ノ状況」視察のため、東京・阪神地方に出張する（「秘文書綴」、一九二五年度）。その具体的な交渉過程の一端は、「法律学」（民法）の十蔵寺宗雄の場合にうかがえる（二六年四月赴任）。伴の前任教である京都帝大法学部からの人選であつたらしく、法学部長佐々木惣一宛の電報で、「待遇七等千八百円、留学ハ出来ルモ時期ハ約束出来ヌ、返事待ツ」という条件を提示している（「秘文書綴」、二六年度）。十蔵寺は講師として赴任後、まもなく教授となるが、二七年九月に辞職し、弁護士となる。その退任の挨拶には「社会の要求するような弁護士」となり、幾分にも正義の為に尽す覚悟に御座候」（「緑丘」第二〇号、二七年一〇月一八日）とある。

服部政一の場合は、二九年に小樽高商を卒業後、書記として採用され、「商業実践室」に勤務するほか、『商学討究』の編集補助などにあたっていた。伴校長から伊藤伊之吉（庶務課長・助教授）の後任として「珠算」を教えるよう指示され、急遽、算盤学校に通い、三三年四月から書記兼助教授となり、授業を担当した。一九三八年に青森

県庁の商工課長に転任する（服部『若き時代の回想録』）。

外国人教師の採用も、以前と同じく、欧米の在外公館に人選を依頼していたようである。二九年二月二四日付の在ロンドンの日本総領事代理宛の依頼文書には、「先年本校外国人教師招聘二関シ種々御好意ニ預リ奉深謝候、然ルニ今度教師一名満期帰国致候為メ、後任者傭入度候間、何分宜敷御配慮相煩度」とある。これを受けて、ロンドンの総領事代理から三〇年一月二九日付に、「British Legion ヨリニ、三ノ候補者ヲ紹介シ来リタルニ付、全部会見シタルカ、其内 Captain W. G. Hurt ヲ最適任者ト認メ、御推薦申上候」という返事が届く。しかし、この人選はやり直しになったらしく、六月四日付で赴任したのは T. M. フィギスであった。

一九三一年一〇月から、フランス語の講師に太黒マチルドが嘱託された。週三時間で月一〇〇円の手当だったが、三三年四月から週四時間、月一二五円の手当となる。『緑丘』第五七号（三二年一〇月三〇日）には「北大太黒教授の夫人で、純粹のバリジャンヌ、明朗な発音を以て仏語の学生を喜ばしてゐる」とある。その後、マチルドは、戦後の一時期を除き、一九六一年まで講師を務めた。

在外研究員の選考は、校長からの上申の手続きをとった。この時期の文部省からの割当は通常一名で、毎年三月上旬に派遣順位をつけて名簿を提出する。たとえば、一九二五年の場合、派遣順位は木部林二、浜林生之助、大野



太黒マチルド

純一の順となっている（『秘書書綴』、一九二五年度）。在留期間は二年間である。必ずしも赴任順ではない。赴任三年目ながら、木部は二六年四月にイギリス留学となり、翌二七年四月に浜林がつづき、大野も急遽留学が実現する。南亮三郎の場合は後述する『大西猪之介経済学全集』の編集と刊行の目的が立った二八年六月に出発となる。

一九二八年からは「内地研究員」の制度が新設され、小樽高商にも一名が割



当られた。研究期間は三月以上六か月以内で、月五五円の交通費が支給された。三〇年度に校長から上申されたのは西田彰三で、「商品学（特ニ繊維工業品）研究ノ為メ、東京及京浜地方へ派遣」（秘文書綴、一九三〇年度）とされた。手塚寿郎は三一年度の「内地研究員」として上申されたが（「経済現象ノ実地研究」、東京・横浜・大阪・神戸）、実際には三二年九月からとなり、主に東京商大の図書館で「数理経済学の研究とイタリ語の勉強に専念」（『緑丘』第六号、三三年一〇月三日）していた。

### 大西猪之介の死

「大西の前に大西無く、大西の後に大西無しと云つても過言であるまい」と評せられ、武田英一から「非常に頼もしい人だった、過去十年間を通じて、学校に対する功績の第一人者であつたらう」（『小樽新聞』、一九三三年二月五日）、「筆の人、舌の人、又熱の人、力の人」（下村海南『三番茶』、『東京朝日新聞』、一九二五年七月二日）と語られる大西猪之介は、一九二二（大正一一）二月八日、腸チフスで急逝した。前年末、東京の社会政策学会に出席し、伊豆を旅行した際に病を得、帰樽後、体調不良のまま授業をつづけていたが、一月二五日から高熱を発し、腸チフスと診断され、長橋の伝染病院に隔離されてまもなくの死であった。まだ、三四歳の若さであった。一二年卒業の越崎宗一は、「大西先生の死は卒業期を前にしての我々には大いなる精神的打撃だった」（『緑丘五十年史』）と語る。

第一期生で、大西の最初の講義以来、その学識・人格に私淑した阿部芳治は、『校友会々誌』第二五号（一九三二年五月）に「大西猪之介教授を悼む」を寄せ、次のように大西像を描いている。

狭く小樽高商としては、砥礪とれい刺戟の中心を喪つた、最大の遺憾であり、広く学問的には、貴重な業績の大成を中道にして奪はれたこと、無限の損失であります。あの明敏暢達の思索研究を、奔放自在な表現に託して世に

問はれた「囚はれたる経済学」「伊太利亜の旅」は、既に一般人の撰るに委ねられた著作であり、深き自信を以て年と共に完璧を期せられた経済原論、経済政策、商業史は、まだ講壇より放たれてはゐなかつたけれども、確に次の時代の経済学界の驚異となるべき所産でありました。また時に応じて各誌に発表され、或は各所に講演された幾多の論説批評は、氣稟と機警に両つながら備はつた滋味に富む提唱でありました。

一周忌を前に、『小樽新聞』（三年二月五日）が「故大西教授追悼記」を特集するのも、「唯没趣味の砂漠のやうな商業都市たる小樽に、緑蔭と清泉を与へた故教授の偉大なる感化力」を追懐し、記憶するためだった。それらは、後述する『大西猪之介経済学全集』への推薦文のなかで、伴校長が述べる「教師としての大西教授——精緻なる知識と懇切なる指導とに由り後進を誘掖せしを以て学生の敬慕措かざりし所」、「演壇上に於ける大西教授——弁論風発、条理井然として論旨を進め、聴者をして帰服せしめざれば止まざるの概あり」、「著者としての大西教授——豊富なる才藻と暢達せる筆致とは克くあらゆる題目を捉へて討尋檢覈、細を穿ち、微を極めて餘蘊なからしめき」（『大西猪之介経済学全集』第一巻）と重なる。

大西の急逝に大きな衝撃を受けながらも、その功績に対して学校側ではまず二つのことで酬いようとしている。一つは、文部省に賞与と増俸を申請し、死去当日の八日付でそれらを実施していることである。三階級の増俸と七〇〇円の賞与で（庶務課「高等官進退関係綴」、遺族への配慮であった）。

もう一つは、同窓会による「大西教授記念文庫」の設立とそのための資金募集である。「公生活の始めにして、且つ終りたる我緑陵の学園に、故教授の蔵書約千五百冊を基礎として故教授の記念文庫を創設し、永遠に篤学者として將た教育者としての名声を伝ふる」として、通夜の席上で発起され、すぐに実施に移された。その際、「たとへ大西の名を冠する記念文庫だからとは云へ、遺族にとつて故人の愛読した蔵書は代へ難い形見である。それを文庫

の基礎とする限り、之に対して相当な弔慰金も贈り度い」（武田英二談、『小樽新聞』一三年二月五日）という趣旨も込められた。一〇月までに約三五〇名から二五〇〇円余の資金が集まっている。一周忌を前に三千余円となり、最終的な募金額は不明だが、それらは遺族に贈られ、二三年一〇月、遺族から一九一七冊が寄贈された。

『大西猪之介経済学全集』の刊行

大西の死去直後から「文庫」設置ともに著作群の刊行が企図されていたが、実現には困難が伴った。全集編纂の中心となった南亮三郎の「刊行に方<sup>あた</sup>つて諸兄に送る」（『緑丘』第一七号、二七年五月五日）によれば、第一次の計画は武田英一を中心に着手され、遺稿の浄書などが試みられたが、武田の転任などにより中断した。第二次は小樽啓明会の出口豊泰らによって進められ、遺稿をもとに『人口と国力』（宝文館、一九二六年五月）が編纂されたものの、その後は中断された（啓明会の出口と高田治作〔紅果〕により、『三年祭』に際して、一五年三月、『北方日本』特輯号として「大西教授の思出」が刊行された）。

この蹉跌に直面すると、左右田喜一郎が「一は故教授の学問を愛するの余り、一は遺族への厚き情誼より」乗り出し、大西の教え子である南に実質的編纂作業を指示する（左右田は当初監修者として名を連ねることになっていたが、頭取を務める左右田銀行の休業により、それを辞退する）。南は伴校長に相談し、一九二六（大正一五）年九月から小樽高商研究室の事業として進めることとし、学生四名が浄書や校合に協力した。大西の盟友である高島佐一郎（名古屋高商教授）がもう一人の編纂者となった。この間の経緯と全集の刊行計画を、南は『緑丘』第一二号（二六年二月一日）で報告している。全集刊行は緑丘関係者が強く期待し、関心を寄せていた。

二七年二月、遺稿類の整理が済むと、南は左右田・高島と全集の構成や出版社について協議をおこなった。全一卷という大部なものとなったが、刊行は宝文館が引き受け、出版契約は大西の遺児貞子の名で結んだ。そして、

五月にはその刊行が予告される。「緑丘」第一七号は、この特集号とした。高島・南両名による「編纂言」には、次のようにある。

二、教授大西猪之介若うして日本経済学界の鬼才とたたへられる、宜<sup>う</sup>べなるかな、年齢僅かに二十三にして処女作「帝国主義論」を発表し、其の論構の雄大、智識の該博、着想の警拔、引証の広汎精緻、真に同学を衝動せしめたるの深きを、天籟<sup>か</sup>すに齡をもつてせば、恐るべき其の精進努力、比儔<sup>ひちゅう</sup>なき其の批判的綜合力は、必ずや斯学分野の領域にわたりて一新生面を打開した事であらう。

三、一代の名作「囚はれたる経済学」及び「伊太利亜の旅」刊行の後から、教授の専ら意図したりしは、「経済原論」「経済史」及び「経済政策」の大成にあつた。不幸、教授その業なかばにしてたほれ、軀<sup>や</sup>がては其の靈筆に依り一層の生氣を吹き込まるべかりし是れら数千枚に亘る稿本を、永久に未定稿として世に問はざるを得ざるに到りたるは、編者等の深く憾みとするところである。さりながら本全集収むるところの大小論策、悉く是れ、その時々における教授の心血を濺<sup>そそ</sup>ぎたりしものならざるはなく、全巻に溢<sup>あふ</sup>る類<sup>たぐ</sup>ひ稀れなる独創力、根柢に流るる深き哲学的思索力は永く読書家思想家の一導星たり得るものと思ふ。

全一一巻の構成は、第一巻「経済学認識論」、第二巻「経済原論」上巻、第三巻同下巻、第四巻「経済学研究」、第五巻「経済史」上巻、第六巻同中巻、第七巻同下巻、第八巻「外国貿易政策」、第九巻「帝国主義論」、第一〇巻「社会主義論」、第一一卷「文明批評」である。このうち主に既刊書で構成する第一巻・第九巻・第一一卷を除いて、残る八巻は整理校訂された遺稿によって編集されている。第二・三巻の「経済原論」は小樽高商の講義録であつた。南らの編纂にあつては、学生の講義ノートも参照された。また、第九巻の「社会主義論」は、「帝国主義論」公



『大西猪之介経済学全集』 広告 (『緑丘』 17, 1927.5.5)

刊直後の脱稿にかかり、今日まで未定稿の儘、当時の指導教授関一博士の、及び後ち福田徳三博士の筐底深く蔵められ来たもの(「編纂言」)であった。南によれば、まだ「社会学」「文学論」などの遺稿や「その人と学問とを知るに便なるべき書簡」(「刊行に方つて諸兄に送る」)が多数あったが、それらは全集に収録されなかった。

予約出版として、二七年五月から一冊ずつ刊行され、予定通り二八年四月に完結した。定価三円八〇銭(予約一時払いでは三〇円)であった。同窓会の名義で、「純真にして熾烈なる子弟愛の発露として築き上げよ、盤石の上に故大西教授記念塔。そは我学園に集う者の特権で有り、同時に亦快き義務でもある」という「告」が校内に張り出されたことでも、全集公刊を祝す熱気がうかがえる(『緑丘』第一八号にその写真を掲載)。『緑丘』第二六号(二

八年七月三日)の広告欄には、「此の種全集の最高記録を作つて目出度く完結を告ぐるに至つた」とあり、以後、「分冊発売」もすることになった。

『緑丘』第一七号の特集には、室谷賢治郎談「小樽高商に於ける福田博士であらうところの人」、手塚寿郎「文化科学派経済学のシステムとして「大西全集」の出版を待つ」、椎名幾三郎「大西経済学全集」は尊い心の糧である」なども掲載されている。そうした学問的達成とともに、『大西全集』は緑丘人への何よりの鼓舞となった。推薦

文を寄せた上田貞次郎は「大西君は自分が極めて旺盛な研究心の持主であつたゞけに、他人の研究心を鼓吹する力に至つても亦非凡なものがあつたので、同君の教を受けたために発奮して学者たらんことを志した学生も少からずあつた」として、この全集が「特に小樽高商の学生諸君に対して最もインスパイヤリングな読物とならんことを期待します」と述べている。これに呼応するように、『緑丘』第一七号の論説は「此の全集の発刊に依つて、若し私共の学園内に重ねて一人の学的刺戟を注入し、真摯なる科学研究学徒への鼓舞がなされん事は、唯に私ばかりが切望するところでは無からう」と論じていた。一九二五年に入学した板垣与一は、入学早々に先輩から薦められた大西『囚はれたる経済学』は「別世界のもの」で歯がたなかつたものの、つづく『伊太利亜の旅』に魅了され、「やがて大西の論文集『人口と国力』を読み、そしてまた逐次刊行せられた『大西猪之介経済学全集』に傾倒し、私の緑丘三年の心の糧はこのようにして次第に培われてゆくのであつた」と回想する（『緑丘五十年史』）。この前後の時期、多くの学生が同様な道を辿つた。

『大西猪之介経済学全集』の刊行は、ちょうど「緑丘ルネサンス」の高揚を象徴するものとなつた。そして、その余韻は長く残つた。一九三二年二月八日の一〇周忌の追憶の夕で、南は「教授の慕はしい遺風がよい意味において今なほ緑丘学園の奥深くに漂つて居る」（『緑丘』第六七号、三年一月二五日）と述べた。そして、出版社の宝文館の好意により、小樽高商学生・卒業生に限り、『全集』が実質半額で「特価提供」されることになつた（校内共済部売店などで販売）。

三四年二月の講演部主催「世界危機批判講演会」は「大西教授追憶」の意味が込められた。さらに死後一五年を経過した三七年二月にも、大西の「胸像設置運動」の一環として「故大西教授追憶 経済時局講演会」が講演部の主催で開催される（手塚寿郎が司会を務め、大野純一・南亮三郎らが講演する）。それを予告する『緑丘』第九八号（三七年二月六日）には「崇高なる真理の塔に立てこもり、透徹せる頭脳を以て鬼才とまで唱はれし学問的名声に加ふる

に、緑丘愛そのもの、如き偉大なる教育者としての教授——それ等の凡ては見ぬ姿への憧憬ではあるが、学人の胸には、はつきりと刻まれてゐる」とある。「緑丘文化の父」とまで称揚され、伝説の域を越えて神格化しつつあるといつてよいが、うがった見方をすれば、そこには緑丘の沈滞気味の現状への批判も潜んでいよう。

### 『商学討究』の創刊

創立二〇周年記念の『緑丘』第五七号（一九三二年一〇月三〇日）には、『商学討究』について「同誌は大正十五年、創立十五周年記念事業として計画され、同年七月創刊号を発刊した。当時は出版資金を同窓生に仰ひてゐたが、同年学生大会の結果、積極的に同誌の刊行を援助する事に決定し、刊行資金を校友会費の中より積立てる事となつて、爾来今春まで年二回発行されて来た」とある。

『緑丘』掲載の記事を追うと、まず一九二六（大正一五）年三月五日の第八号に、「学園多年の懸案であつた学術研究雑誌の発刊は、此程学究に真摯なる教授諸氏の間に、具体的計画成立し」と報じられている。「学園多年の懸案」が何時の時点からのものであるのかは不明ながら、刊行経費の捻出が難問だつたと推測される。

その計画が動きだすのは、おそらく他の高商での相次ぐ学術雑誌の発刊が刺激になつたからと思われる。神戸高商の『国民経済雑誌』（一九〇六年創刊）は別として、長崎高商では一九二二年四月から『商業と経済』を発刊していた。また、渡辺龍聖が校長を務める名古屋高商は二三年から『商業経済論叢』を機関誌としていた。山口高商は二三年七月に『研究会雑誌』（のち『商学研究会雑誌』）を、創設もない高松高商は二五年一一月に『商工経済研究』を、和歌山高商は二六年一月に『商学論叢』を創刊していた（なお、小樽高商『商学討究』創刊後、大分高商『商業論集』（二六年九月）、彦根高商『高商論叢』（二七年七月）、高岡高商『研究論集』（二九年三月）、横浜高商『商学』（二九年七月）、福島高商『商学論集』（三〇年三月）とつづく）。学術機関誌の発刊において、小樽高商は二〇年代に新設された各地の



『商學討究』創刊号 (1926)

高商の後塵を拝することになってしまった。

『商學討究』創刊まで、教員の研究成果の公表は、自ら著作を刊行するほかは、学会機関誌のほか、校内では『校友会々誌』への論文発表、あるいは他高商の機関誌への掲載にとどまっていた。

二五年三月四日の同窓会総会で「研究雑誌後援の件」が可決された。「同窓会は母校研究雑誌刊行事業の財的方面を援助し」、そのために年会費を三円から五円に引き上げ、その増額分を援助にあてる。会員はその頒布を受けることになった（『緑丘』第九号、二六年五月一〇日）。

二五年六月一〇日の『緑丘』第一〇号は「発刊近し！ 本校研究雑誌」として、「地理準備室を編輯室に充て、南、大野両教授が主として事務にあたつて来たが、今や編輯印刷販売の準備万端整ひ、伴校長の命名に依つて「商學討究」と名づけ、近く其第一冊の刊行を見る運びとなつた」と伝える。そして、七月、第一巻上册が発刊される。「小樽高商研究室」が設置され、編集にあたった。「発刊の辞」として、伴校長は次のように記した。

幾多勝れたる姉妹雑誌の驥尾<sup>きび</sup>に付して敢て起たむと欲する所以のものは、一に全く吾等自らを教へむとの切なる願に出づ。吾等は唯だ、学べるところを世に問うて自らを教へ、学徒として負へる責務の一端を盡さむと希<sup>ねが</sup>ふのみ。



謙虚な抑制した筆致は、緑丘の学的充実を密かに自負しているからであろう。創刊号は五編の論文から成る「研究」、三編の紹介・書評から成る「資料」、そして小樽高商の特色の一つともいえるべき「商品研究」の三部の構成である。校外からは卒業生である名古屋高商の郡菊之助が寄稿しているが、校内からは苦米地・手塚・室谷・南・高橋益実・大野純一、さらに西田彰三（「蒟蒻粉に関する研究」と品川秀三（「過燐酸石灰肥料製造後時の経過が品質に及ぼす影響」）という陣容である。販売は東京の清水書店と札幌の富貴堂書店に委託されたが、当初、実売部数は少なかった。

一二月に刊行された第一巻下冊の巻頭論文は、長年「農業・殖民政策」を担当する高岡熊雄（北大）の「加奈陀カナダに於ける国有未開地区画制度」で、ほかに卒業生（西尾清一・大泉行雄・金森三郎・越崎宗一）も寄稿しており、外部にも開かれた紀要をめざしたといえよう。ここでも南・手塚・大野は登場しており、常連的な執筆者となる。

『緑丘』第二三三号（一九二八年三月一三日）には、「商学討究編輯委員（代表南）」による『商学討究』第一巻・第二巻の決算表が掲げられている。主な収入は、同窓会頒布金が一八〇〇円・二〇〇〇円、校友会頒布金が共に一〇〇〇円弱である。支出は印刷費が大半を占めるが、原稿料も一頁一円で計上されていた。学生（普通会员）の校友会費は年額一〇円から一二円に引き上げられており、この増額分が頒布代となった。

創立二〇周年の記念論文集として、三一年一〇月、『商学討究』「特輯号」が発刊された。布装七五〇頁、定価三円半という大冊で、一六の論文が並ぶ。筆頭は高岡熊雄（投資地としての植民地の価値）、卒業生で出版関係に進んだ阿部芳治（活字文化の展望）のほかは、学園の教員陣の執筆である。序文を寄せた名古屋高商長渡辺龍聖は「小樽の地たるや、本邦の中心を遠く離れ、二十年の昔日、我輩こゝの緑丘に商学の燈を掲げし頃は、地の隔りと共に何となく文化もまた遅れてゐたかの感ありしも、爾来、幸にして校運隆盛を極め、小樽に点ぜられし学燈の光りは、いよいよ輝きて普く本邦学界を刺戟し啓発すること、甚大なる」と感慨にふける。その渡辺から引き継いだ伴校長は「守成あまね

耕耘の重責」を負つてきたとして、序文のなかで次のように語る。

上に博識達道の士があると、下に好学修為の衆が集まるのは自然の数である。我が同僚は能くかやうな妙境を感得して、入つては学庫の秘鍵を握りて寝食をも忘れ、出でては淳々として育英に倦まない、其様子を日夜目撃して、愉悅の情禁じ得ざるものがある。然るに学校制度の常として学科時間の配当に制限があつて、学理尋究の結果を齎して学生に臨むや常にそれらの掣肘を受け、到底蘊蓄を傾ける事も出来ないし、学生も亦鐘響の大を叩く能はざる事を憾とする。されど教授としての温情は指導誘掖の熱意に溢れ、学徒としての欲望は愛理求知の思念に燃へつつある実情で、語らんと欲して而も尽さず、聴かんと欲して而も詳なり得ざる状態が刻下我が学園の風尚であるまいか。余は此の風尚を望みて一種言ふべからざる欣快の煩悶を抱く者である。

この「刻下我が学園の風尚」こそ、「緑丘ルネサンス」高揚を示すものであった。ところで、『緑丘』第五九号（三年二月二五日）では、三月に卒業したばかりの東京在住者が「母校の恩師を偲んで 論文集を裸にする」という気炎を吐いている。

「苦さんの石油調査報告書はどうだ？」

「文はい、方だらうね、しかし火は熱く水は冷たい位を云つてあるうちはいい、が、国際関係の激化によつて歴史の進行が階級闘争から民族闘争へ移行行くかの如き云ひ廻しをするあたり、苦さん仲々ずるい」

「さうだ、それに読んで見て面白くない。同じ石油でもシンクレアの「オイル」なんかは随分読みごたえがあるからね」

「ところで、南さん、今度は農業恐慌を書いたね」

「いよいよよろづ屋になるつもりかな」

「それだ、よろづ屋も悪くはないが、マルクス—マルサス—リーフマン—ツガン、それに今度はヴァルガ、南さんも随分歩いたね」

「この論文も諸家の説が極めて要領よく、しかも誰にも解るようにやさしく書かれてゐるから、初学者の入門書に適当な農業恐慌ABCだ。そしてそれだけ」

(略)

「おなじテーマを取扱つた次郎さんのもの、仲々シツカリしたところもあるが、折角「地代の形成」なる一章を設けながら、今学界の中心問題になつてゐる地代論争に対して、何れの側に肩を持つてゐるかをハッキリさしてゐないのはどうか」

「これから中野さんだが、中野さんは悪い癖があつて書いたものはどれでも「軽く触れて置く」「一寸腰をかけたみる」といつた風で、底の底まで突きつめて行く態度を示さないのはよくない」

いずれも辛辣率直で手きびしいが、かなりの的を射ているといつてよいだろう。「苦さん」は苦米地、「南さん」は南亮三郎、「次郎さん」は高橋次郎、「中野さん」は中野清一を指す。おそらく学校時代にそれぞれの教員の個性・特質を熟知し、この論文集で面影に接すると、嬉々として軽口を交えた本音の批評合戦が展開される。この記事のなかには「かうして皆んなど顔を合はして論文集を前に置いた時、云ひ知れぬ感激とともに、それにとりついて行く元気の湧き上るのを覚えた、それが何より嬉しかった。心強よかつた」ともある。

先の創立二〇周年記念『緑丘』第五七号では、「勿論学生の研究発表機関ではないが、学生の研究熱を刺激する意

味に於て重大な役割を果してゐる」とする。同窓生にとつては、新聞『緑丘』とともに、『商学討究』は母校とのパイプとなつていた。その一つの例として、『商学討究』第八卷上冊掲載の高橋次郎「世界経済恐慌と」「世界通貨及び経済会議」に触発されて、卒業生の西川正巳は「最近の日印貿易関係の推移を見る」という論文を『緑丘』第七五号（三三年二月二八日）に寄稿している。

#### 北海道経済研究所の設置

創立後まもなく設置されていた産業調査会は、学生の論文募集のみ継続していたが（一九三三年度までで一時的に断、二八年度より再開）、それ以外の活動は休止状態がつづいていた。一九三三（昭和八）年五月、この産業調査会を廃止し、新たに北海道経済研究所を設置する理由は、次のような現状認識からであった（『北海道樺太経済資料目録』序文）。

近来我国自体の経済に関する實際を知らうとする気風が各方面に普及するに至つた。之は云ふまでもなく欧米経済の移植時代が過ぎ去つて、今や独自固有の経済政策を樹立せんとする迄に、我国の経済が進歩したからである。

斯うした理由から、最近各地に経済調査機関が頻繁に設立せられたのである。それにも拘らず、本道・樺太に関する総合的な研究機関は殆んど皆無と言つても差支ないのである。この欠陥を幾分でも満たし、北方経済の特質を研究発表したいといふ念願に基いて我が北海道経済研究所は生れ出たのであつた。

「最近各地に経済調査機関が頻繁に設立せられた」というところを高商関係に限ってみると、和歌山高商では従

来の「調査部」を一九三〇年に「産業調査部」に拡充し、「特に和歌山県下地方産業の調査研究に力を入れてゐる」（『和歌山高商十年史』）。また、山口高商では三三年四月に「東亜経済研究所」を設置し、「満州事変後の国運進展に即して愈々東亜経済研究に主力を注ぐ」（『山口高等商業学校沿革史』）態勢をとった。こうした研究活動の活性化に刺激されるとともに、樺太を含む「北方経済」調査研究への校外からの期待の高まりにも応えていこうとした。

研究所規定には目的として「主トシテ北海道経済ニ関スル実証的研究ヲ行ヒ、学理ト實際トノ接合ヲ図リ、以テ学界及実業界ノ進歩ニ貢献セントスルニ在リ」とされた。所長は校長とし、大野純一を主任とした。ほかに高橋次郎と服部政一が所員となる（『学校一覽』一九三五年版）。商品陳列館の二階に置かれた。

研究所の最初の成果は、大野主任の奔走によって収集した北海道・樺太関係資料類の目録刊行である。各産業別に編集され、各種年報・月報類が収集されている。追加として「樺太資料目録」を付している。

研究所としての共同研究「北洋材の国民経済的意義」に対して、三四年九月、日本学術振興会から千円の補助が与えられた。おそらくこれは、後述する三三年度の学生懸賞論文で二等に入った小森正一「樺太材に関する調査」を發展させたもので、研究所の「調査報告」第三輯として刊行がめざされたが、何らかの事情で発刊に至らなかった。その予告（『経済上より見たる新興北千島漁業』巻末）には、「北洋材をめぐつてそこに幾多の問題がある。我国に於ける唯一のパルプ原料として、近海運賃のバロメーターとして、殖民地樺太の最大の財源として、北洋材の国民経済的意義は誠に重大である。又そこには他に類のない特殊の労働市場がある。然るに不思議にも今日未だ此の国家的重要産業に就いて何等纏<sup>まと</sup>まつた研究が発表せられてゐない」とあり、意欲的な研究が展開されていたようである。「北洋材の船積関係」を担当する服部は、「神戸、名古屋に出張して調査した」（『若き時代の回想録』）という。

北海道経済研究所に関わるものとしては、研究所の事業として実施する「生徒懸賞論文ノ募集」に秀逸な研究が生み出されたことが注目される。

## 『土功組合の研究』など

一九三三（昭和八）年度の「産業調査論文」には六編の応募があり、大野らが審査したが、「量に於いては幾分劣るが、内容は曾て見ざる珠玉篇」とされた。なかでも一等となった度会丑春（三年生）の「土功組合」は、「本道にその類を見ざる最初のもので、その調査の困難苦心の結果は大いに賞讃され」（『緑丘』第七八号、三四年三月二六日）、活版印刷で刊行されることになる。

この応募論文に大野・高橋・服部が手を加え、三四年三月、研究所の「調査報告」第一輯として『土功組合の研究』が刊行された。その「序言」には次のようにある（度会の応募論文の所在は不明）。

北海道農村の窮乏に就いては、勿論一般的原因として世界恐慌・農業の受ける重圧・凶作等をあげることが出来るであらうが、併し尚ほそれのみには止らず、特殊的要因として土功組合の作用する点を看過することは許されないことに属する。由来、土功組合は本道拓殖のために計画実施せられたものであるが、余りに多額の造田費が北海道特有の自然的条件を深く顧みずして投ぜられたために農民を苦境に沈淪せしめ、農村の負債を過重ならしめた。これ即ち「土功組合は北海道拓殖の癌である」と言はれる所以である。

斯<sup>か</sup>くの如き事情の下に於いては、如何なる本道の拓殖計画も農業振興策も、此の土功組合に対する根本的対策を伴はなければ、その効果は甚しく減殺されることになるであらう。

茲に於て、本研究所は、北海道土功組合の創基時代から現在に至るまでの全面的調査を行ひ、その困窮状態<sup>あきらか</sup>を明ならしめ、以つて将来に於ける北海道拓殖計画乃至は農業政策の参考に資せんとするものである。

「土功組合」とは北海道独特の呼称で、一般的には「水利組合」という。本書はその意義、事業、沿革、現状、



『土功組合の研究』『北千島漁業の経済調査』

対策という五章で構成され、「結語」では「当局者が意識的にか無意識的にか、過去に於ける誤れる政策の悪の巢を償ひつゝ、あるいは喜ばしいことであ」り、「瀕死の農家は一先ず餓死を免れるであらう」としつつも、割高な生産費のために「組合地農家は「水田適地」で水稲耕作を続ける限りは救はれないであらう」という悲観的な見通しが述べられる。

これが公刊されると大きな反響を呼んだ。『東洋経済新報』第一六〇〇号（三四年五月一九日）は、「批判的・改革的情熱によつて築きあげられた本書は、特殊研究的題目にもか、はらず、広く日本農業問題の根本対策に密接なる関聯を有する書である。（中略）正しく近来の快著とも言ふべきである」と絶賛する。『エコノミスト』第二年第一号（三四年六月一日）は、「北海道自体から見ても国家的見地からしても、非常に意義あるもの」としたうえで、「小樽高商が新たに北海道経済研究所を設け、その第一業績として本書を世に送つた点に敬意を表せざるを得ぬ」と記す。『小樽新聞』や『北海タイムス』でも取りあげられた。こうした好評ぶりを、服部は『緑丘』第八〇号（三四年六月三日）で紹介する。

翌三四年度の懸賞論文について、大野主査は「昨年の土功組合の如き逸品はなかつたが、年一年一般のレベルが上つてゐる事は見逃す事の出来ぬ事実です。殊に従来何等特殊研究の試みられてゐない本道新興産業に就て、生徒の独創的関心が払はれてゐる事は喜びに堪えない、此の傾向は大いに助長して頂き度い」（『緑丘』第八六号、三五年三月二八日）と審査評を述べる。

二等一席となった齊藤雄治（三年）の「北千島の沖取漁業に就て」は、大野らの補筆をへて、三五年五月、研究所「調査報告」第二輯として刊行された（『新興北千島漁業の経済調査』と改題）。その「序」では「沿岸漁業時代去つて公海漁業時代來るに及んで、忘却の彼岸にあつた北千島は、俄かに公海漁業の根拠地として重大なる国家的使命を有するに至つた」とし、「本書はこの北千島漁業の国家的重大性に鑑み、之を経済的見地から全面的に調査し、以て北進日本の経緯の一助たらしめんと願ふものである」と位置づけられる。こうした観点から、この「調査報告」第二輯は、『経済上より見たる新興北千島漁業』と再改題されて（内容はそのまま）、同年九月、杉山書店から市販された。これらは経済研究所名で刊行されたが、それぞれの論文は学生の自主的な研究活動の成果であり、その調査能力と分析力の水準の高さを物語る。そういう点からすると、『東洋経済新報』（三四年一月二四日）の「経済問題懸賞論文」（第九回）に「オープン・マーケット・オペレーションを論ず」で当選した卒業生の泉谷順治も、もう一編の当選者とともに、「何れも一朝一夕に仕上げたものでなく、日頃からの研究を素材として、之に論旨を切磋、縷刻した後がよく滲み出てゐる」と評価されるように、在学以来の勉学の努力が実つたといえる。泉谷は一九二八年に小樽高商を卒業し、この時は秋田市商業学校に勤務している。この論文では「公開市場政策の本質を論じ、夫が現インフレに対して如何なる機能を有するものなるかを確め、インフレの前途に照らして夫が続行の必要な所以を述べると共に、其可能性如何、並に其改善乃至補強の方途を考究して」いる。

こうした卒業生の学術的な活躍も見逃せない。小樽高商や他高商の研究者となるばかりでなく、実務者として著作や論文をものしていく。西尾清一『企業の財政』（一九二七年、自強館書店）、西野嘉一郎『事業財政分析観察法』（一九三四年、高陽書院）などである。大西猪之介に捧げられた西尾の著作は、「今日、少数の富者階級を除きたる大多数の我が国民は、人間として生存するに絶対必要な最少限度の物質的生活に於て、如何に鼻頂目に見ても、文明諸国民に比して、今尚ほ遙に劣つてゐる」という認識に立ち、「経済生活の基調たる企業資本の浪費こそ、最も細心の注意



を以て避けられねばならぬ重大事」という観点から「企業経営の財政的方面」を「實際家」の立場から考察している（「自序」）。此の労作は、短期間で改訂三版を出すほど、好評をもって迎えられた。また、西野と同期の卒業である西川正巳は、西野著について「一面学理的方法を实地に試みた会計事務家の實際的著作であると同時に、他面欧米諸学者の経済分析理論の丹念なる紹介解説の集大成である」、「本書を会計学を実用的に学ぶ商業学校上級生乃至専門学生の参考書として推奨するに躊躇しない」（『緑丘』第八一号、三四年八月三日）と述べている。

#### 日本経営学会小樽大会の開催

一九三四（昭和九）年七月七日から三日間の日程で、日本経営学会関東部会の大会が小樽高商を会場に開催された。一九二六年に設立以来、毎年一回の大会は東京か関西で開催されるのが恒例となっていた（一度だけ名古屋で開催）。それを「我国文化の中心から遠ざかつてゐる地方に在る者にとつては、斯くの如き事情は頗る遺憾」と考えていた同会理事の一人室谷賢治郎は、三四年大会の小樽への誘致を提案したが、認められなかった。しかし、常務理事上田貞次郎から同会関東部会の開催を示唆されると、これを伴校長に相談した結果、開催をめざすことになり、三四年三月末、実施が内定した。すでに二八年四月、長崎高商を会場に関西部会が開かれたことがあった。

伴校長を大会委員長に、中村和之雄・苔米地英俊・手塚寿郎らが委員となって準備にあたった。研究題目を「産業統制」とし、年會に準じて一日目は研究報告、一日目夜と二日目午後は公開講演會、三日目は工場見学という日程である。小樽高商教職員を除き、参加者は四〇名を数え、「学会に於ける現在の常務理事五名が全部揃つて出席せられたる如き、嘗て何れの年會にも之無かりし所」（案谷「日本経営学会関東大会小樽大会記事」『経営学講演集 産業統制研究』）という盛況だった。関東部会ではあるが、関西・名古屋方面からも参加があった。

初日の研究報告の「開會の辞」のなかで、苔米地は「今戦後の動向を一瞥致しますに、世界各国は悉く国家経済



日本経営学会小樽大会記念写真

主義を採用し、益々これを強化せんと致して居ります。於是、外国貿易に於て各国は火の出るやうな競争を演じ、遂に産業統制の必要を馴致し来つたのであります。斯くの如くして現時は産業統制が学理的にも、亦實際的にも極めて重要なものとなり、その利害の波及する所は亦広大でありますので、頗る真摯な研究を要求するに立ち至りました」と、「産業統制」を主題とする意義を説いた。ついで「歓迎の辞」に立った伴校長は、小樽で大会が開催できたことを「北海道将来の事業並に文化の爲めに最も意義ある事」と述べるとともに、次のように論じた。

我が小樽、大にして北海道は未だ發展状勢の中心地に遠ざかつて居ります。従つて動もすれば時代に遅れ勝ちとなるのを免れることが出来ないのであります。併しながら北方の天地に於きましては、之等の忙しい社会の中心地でないだけに静かに想を凝して精密に研究するの暇を有つて居ることを特別の点と考へて利用しなければならぬかと存じます。(中略) 住民は概して元氣に富んで居りまして、中には遠大なる計画理想を抱いて進取果敢な氣概を有つて居る人も乏しくないのであります。学界に於ても熱烈に且つ

根気強く研究を重ねて居る人々も相当に御座いますから、若しお暇が御座いますから更に深く我が北海道を御覧下さいますなら、雄大なる天地が将来の爲め、北方文化の爲めに多くの人材を徐ろに育くみつ、ある状況を御覧下さることが出来ると存じます。

ここでも小樽・北海道を研究・教育と生活の場とすることにより、「静かに想を凝して精密に研究するの暇を有つて居ること」、「熱烈に且つ根気強く研究を重ねて居る」ことを自負し、小樽高商の存在が「北方文化の爲めに多くの人材を徐ろに育くみつ、ある状況」をアピールする。

五本の研究報告中、大野「通貨統制の目標に就て」、高橋次郎「産業統制と景気変動」、久木久一・服部政一「北洋材の運賃統制に就て」の三つが小樽高商の教員だった。「閉会の辞」は手塚が担当した。来聴者の大部分は小樽高商生だった。『緑丘』第八〇号（三四年六月三日）は、この開催予告の記事のなかで、「学園の眞の価値発展の最根源的動因は、充実せる講壇とその指導の下に不断の真摯なる学究的態度の意識的取得にあるまいか？」としたうえで、この「無二の機会を遺憾なく利用し、中央諸学者の学殖を質、量ともに抽出して取得すべきであらう」と呼びかけていた。また、二日目には、第一回卒業生で帝国生命保険会社調査課長の西尾清一が「統制経済と生命保険経営構」と題して公開講演をおこなっている。

小樽市役所議事堂で開かれた公開講演では、六〇〇名以上の「小樽市民諸氏の熱心な傍聴によつて最終の閉会の辞に至る迄、中座する者は一人も見られなかつた」（案谷「日本経営学会関東大会小樽大会記事」という。七月九日の『小樽新聞』は、「文字通り北方文化の開発に充分その使命を果し、小樽市立前のこの盛挙も経済学界群星の来道により、ひ益さる、処甚大であつた」と報じる。

三日目は北海製罐や奥沢の珞瑯はろうろうタンク製造工場の見学、小樽港内の周航などをおこなっている。

この小樽大会の記録は、『経営学講演集 産業統制研究』として、三五年二月、同文館から刊行された。

『マルサス研究』

一九三四（昭和九）年一二月、『商学討究』第九卷中・下合冊特輯号として、『百周年記念 マルサス研究』（発売清水書店、定価二五〇銭）が刊行された。次のような論文が並ぶ。

- |                  |                |
|------------------|----------------|
| マルサスと現代の人口問題     | 上田貞次郎（東京商大教授）  |
| 経済学史上に於けるマルサスの地位 | 堀 経夫（大阪帝大教授）   |
| 伊太利に於けるマルサスの先駆者  | 手塚 寿郎          |
| マルサスと其の社会経済史的背景  | 室谷賢治郎          |
| マルサスの人口論         | 南 亮三郎          |
| マルサスの経済理論        | 坂本弥三郎（神戸商大教授）  |
| マルサス対ゴッドウインの人口論争 | 伊藤 久秋（長崎高商教授）  |
| マルサス対リカアドオの価値論争  | 大野 純一          |
| マルサスと古典派の動態理論    | 高橋 次郎          |
| マルサス以後の人口理論      | 吉田 秀夫（大倉高商教授）  |
| マルサスとダーウキニズム     | 小泉 丹（慶応義塾大学教授） |

ほかに中野清一「マルサス説の社会思想史的背景」と手塚・南共編「マルサス研究文献目録」が予定されていた



『百年忌記念マルサス研究』

が、都合で収録されなかった。

上田は論文冒頭で、「マルサスの死後満百年の記念すべき機会に当つて、小樽高等商業学校の同学諸君が結束してこの偉大なる思想家の協同研究に邁進されたことは実に学界の盛事であつて欣羨に耐へざる次第」と記すが、どのような経緯でこの構想が練られたのかは不明である。その中心に南亮三郎がいたことは確かで、『緑丘』第八〇号（三四年六月三日）の談話には「前から計画はしてゐました（中略）筆者の充実の点よりも充分に成美せるもの」

とある。卒業生である吉田秀夫は含めると、執筆者の過半数が緑丘関係者となり、その総力をあげた「協同研究」といつてよい。

おそらく南と思われる「編輯者」の「序文」には、百年忌の「単なる彼れの追憶」ではなく、「マルサスの、経済学的、人口理論的諸著作の全面的再吟味」をめざすとして、次のような問題意識が披露されている。

マルサスの全業作は、すでに説ける所の如く成長期資本主義の諸問題にか、はつて居るとの意味に於て、吾々の生ける現実の社会経済の諸問題と無関係ではあり得ないばかりでなく、時代と共に生き、絶えず事実を注視しながら彼れが下した洞察と所見とには、百年後の今日に於ても猶ほ吾々の新たなる省察を要求して已まぬものがある。時恰かも、西に東に、起りつ、ある「経済学者」マルサス復興の声、それは必ずしも不思議ではあるまい。余りに高き人口論者マルサスの蔭に、経済学者マルサスは隠れてゐた。経済史学者は前者を採つて、後者をば、リカアドオのために捨て去つてゐた。マルサスは、今漸くにして、その真実に在りしま、の姿を現

はさうとするのである。

この問題意識を鮮明に展開したのが室谷論文である。その「結語」では、「彼の時代と今日現在の日本とが寧ろ余りに多くの類似点を有する」として、日本の現状は「既に産業革命の渦中にあつて農業も資本主義的組織に経営せられ、地主対小作の争議は珍しからぬ事実となつて居る。穀物、就中常食たる米の価格は安定を欠き、時に高騰し時に低落し、其の調節を凶らんが為めに少からぬ考慮が費されつゝある」と述べ、「茲に第二のマルサスの出現せざるべからざるや必然である」と提言する。また、高橋論文の結論は、「リカアドウが沈思した礎石的な下部段階と、マルサスの立つた實際社会の見える上部段階」は、マルクスによつて「成功的に連絡され」たことにより、現在では「マルサスにあつては未だ望む事の出来なかつた「恐慌の必然性」が明かにせられ、景気変動の法則が顕現せられ、動態理論が確立せられ得る様になる」というものであった。

一二月には執筆者を中心とする出版記念会が小樽で開かれた。「学園を沈滞より救ふものは、一に真摯なる真理探究の情熱如何にありとか、その具体策如何等といふ事が話題に上り、熱心な討論が行はれ」（『緑丘』第八五号、三五年二月一日）たという。また、三五年二月、上田貞次郎の主宰する日本経済研究会による執筆者討論会が東京で開かれ、執筆者を代表して南が出席している（南「マルサス理論の再認識」、『緑丘』第八六号、三五年三月二八日）。

## 第四節 学生生活の展開

悪太郎「高商生活 思出の記」

一九二四（大正一三）年二月一八日から二七日まで、『小樽新聞』に連載された「悪太郎」と称する学生の「高商生活 思出の記」は、まず「日記の由来」として、次のように書きだす。

今を去る四年前、春まだ浅い四月の或日、鳥打帽子を眉深にかぶつて右手に重たげなバスケットを提げた受験生らしい若者が肌寒い小樽の街を落着かない顔つきでヂット凝視<sup>みつ</sup>めて居た、……彼は南の国から海を超えて、渡鳥の未れの様<sup>よう</sup>に北の国の学舎、小樽高商に罣<sup>かか</sup>を求めてやつて来たのである、それから三年を経て本年の三月、……彼の姿は再び小樽駅頭に現はれた、彼れの頭上には昔の鳥打帽子あらで、日に焼けた茶色の学生帽子があった、帽章のマーキユリーも、制服の金鈕<sup>ほたん</sup>釦も燻<sup>いぶ</sup>しがか、つて居た、北から南へ上る列車が彼を乗せてプラットホームを離れようとした時、彼はオーバーのポケットから一冊のノートを取出して私の手に渡した、夫れは高商三年間の彼の日記であつた。

三年間の「日記」といいつつ、実際には主に入学早々の見聞に限られるが、ちょうど小林多喜二や伊藤整の在学と重なる学生生活が生き生きと描かれ、興味深い。正気寮（第二寮）に入った翌朝は、「ジャランジャラン」と響き渡る鐘の音、ドタバタと廊下を踏み抜く様な足音」で目を覚まされる。「二重窓を通して冷めたい風がストと吹き込む、大きな火鉢はあるが、火がないので何にもならない、窓から眺めれば上半身に白衣を纏ふた天狗山が冷や、

かに迫つて居る、窓下は雪融けの大地から今や旺盛に若草が萌え出さうといふ目覚ましいところだ」から一日が始まる。食堂に出ると、「東京の簡易食堂を其の儘引越して来た様な薄汚ない長卓子一個につき、大鍋一ケ、飯櫃一ケが恭しく置いてある」。

寮生活に慣れてきたある夜半、「朦朧たる意識の中に遠雷」が聞えてくる。「蛮声に伴奏する木と木と叩き合ふ音、床を踏み抜く音が混然一大音響となつて忽ち迫つて来る」、新入生歓迎のストームの襲来である。「ストームの正体を拝見に及べば、後鉢巻きドテラ

姿といふ賊みたいな御連中の一団だ」。そして、数日後には一年生の上級生に対する「答礼ストーム」となる。「総司令Yの号令一下、忽ち百雷の一時に落下する様な大音響が夜の静寂を破つた」。

「専門的な毎日の講義の珍らしさも薄れて」きたころ、同郷の上級生に誘われて悪太郎は「夜の町」に繰出し、あるカフェーに入る。「煙々たるシャンテリアの光、ムツとする雰囲気、お客のツラ、バーメイドの姿態、いさゝかテレ気味な俺の眼に之等の色彩が交錯して未来派の画を見る様な気分」之が小樽に於けるカフェーのファスト、イムプレシオンだつた。

寮生活の楽しみは、「漫談に花咲く夕」である。「明日は商業学の試験だと云ふのに呑気な連中だなど思つても見たが、どうせ俺だつても勉強よりは遊ぶ方が面白い、つひ不逞な考へになつて仕舞ふ。机の上のノートを片付ける、ストープに石炭をドツサリ投げ込む、さうこうする内に集つて来たのはいつものS、H、Y、M、Kなどと云ふ御連中、其れから所謂漫談の花が咲くんだ（中略）猪の様なひどく恐ろしい鼻息で談論風発するんだから、喧嘩か議論か冗談か分らない」という具合である。



文行寮ストーム



いつの時代でも落書は絶えない。なかでも本館の階段教室には「小樽高商開校当初より現今に至るまでの歴代落書のサンプル」が並ぶ。「悉く半永久的の彫刻物ばかり」で、「肖像あり、文学あり、高商昇格運動に関する悲憤の声もあれば、教授の批評から皮肉から何まで完備して」いる。教室の黒板には当時流行した「ストトン節」の替え歌が書かれる。

ストトトンで勉強する馬鹿もある

商業英語ちや苦勞して、就職難でも一苦勞

それで月給が五十円ストトントンストトントン

昼は教場でボート漕ぎ 夜はストトトンでバー通ひ

財布も頭もからになり、試験にやストトントンで落第し

ストトントンストトントン

ストトントンストトントンで高商坂 毎日通つてノート取る

俺も来年は月給取る 親の意見で嫁を取る

ストトントンストトントン

「日用品の廉価供給と為替の両替」をおこなう販売部も学生にとってなじみの場所となる。「女人禁制の高商の庭に唯一人妙齡の女性が鎮座」しているからである。「色彩の単調に苦しむ校舎の中に点ぜられた此の紅一点がどれ程

偉大な慰安力を有するか」と悪太郎はいう。この販売部は丸井呉服店が運営していた。

一九二五年頃から教職員の間にも女性が加わってくる。一九三〇年には、会計課に直江ツネ子、教務課に石橋千代子、図書館に前田ミヨシという三名の女性が勤務している。教員では三二年から太黒マチルドがフランス語講師となる。

高商生の間で使われていた「ホースケ」（呆助）について、触れておこう。「緑丘残照」のなかで森秀和（四四年卒業）は、ある先輩の解釈として、「呆助」の呆は阿呆の呆、助は助兵衛の助である」として、それが転じて「一、ガリ勉する奴 二、本を読まぬ奴、三、融通のきかぬ野暮天」を指すようになったと、紹介している（小樽高商第三十二期『春とこしえの緑が丘』）。

#### 学生生計調査

寮生活は高商生活のなかで最重要部を占めるが、「覚えずともい、小樽中のカフェの名前を皆覚え込む様な熱心家も出て来ようし、始業前五分前に起きても授業に間に合ふ秘訣を覚え」（「入学から卒業まで」『緑丘』第一七号、二七年五月五日）というように、怠惰に慣れ、自堕落に陥ることも多かった。そこで学校側は統制をきびしくする。一九二六（大正一五）年、卜部岩太郎が監生部長（生徒監）となると「寄宿舎規定」を改正し、「今後は学寮をして、真に学寮生活を愛して真面目に学問に精進せんとする者のみ解放すべし」（『緑丘』第二号、二六年二月二日）という方針を確立し、起床午前六時、門限午後一〇時半、消灯午後一一時などとした。また、「舎ノ内外ヲ間ハス、和服ノ際ハ必ス袴ヲ着用スヘシ」という規定も設けられた。学生のなかには、この窮屈さを嫌って退寮し、下宿に移るものも多かった。

経済不況がつづくなか、下宿学生のなかからは下宿料の値下げ運動もおこっている。一九三〇年一月二九日の『緑丘』第四八号は、学生間に下宿料値下げ運動が再燃しているため、監生部が調査に乗りだすと報じている。そ

の後、学生生活の経済的苦境に対処するために共済部設置が要望され、その実現をみるが、その際の活動の数的基礎を確実にするために、三一年一月、全校学生（自宅外三二五名、自宅通学一六二名）の生活調査が実施された。

寮生・下宿生の送金調査では、月額最高六〇円（一名）から全然送金をうけない者（七名）までであるが、「三十円乃至四十円を送金して貰つてゐる者が最大多数を占めてゐる」（自宅通学生の小遣いでは「五円より十円未満の者が最多数」）。下宿生は三年生が五六名、二年生が四九名で、一年生も二七名いるが（残りの一九三名が四つの寮生と思われる）、下宿料は賄いつきで最高二六円、最低一三円で、「二十円乃至二十三元が多数を占め」る。部屋の広さは六畳から八畳で、四畳半以下はごく少数という（『緑丘』第五八号、三二年一月三〇日）。この時点の寮費は年額二二円（三期に分納）で、賄い費は月額五円程度である。

この調査を受けて、共済部の相談部では値下げ勧告書を作り、発送希望者を募つたところ、わずか二名にすぎなかつたという。この理由について『緑丘』第五九号（三二年二月二五日）は、「下宿先への気まずさ、赤裸に解剖すれば見栄とプチブル根性か」と観測している。

さて、学生たちは仕送りを補うために夏期・冬期休暇中にアルバイトをおこなっている。二九名のうち「収入は石峽行商による六十四円を筆頭に、ペビーゴルフ場係り、外交、筋肉労働、官庁勤務、等々種々な仕事に従事して、多くは五十円、四十円より、少くとも十五円を得て」いる。また、二四名が家庭教師をしており、月額二〇円から五円程度の収入を得る。主に中学生を対象としている。

「学生生計調査」と同時に、「学費補給希望調査」も実施された。希望者は一三六名に上り、そのうち八一名が家庭教師を、一五名が「労働」を希望する。「奨学資金、育英資金の貸与を希望」する者も六名いた。これらは、「学費補給の為」ないし「家計不順の為」という理由が多かつた（『緑丘』第五八号）。

編纂部員川島豊秋は『緑丘』第三八号（三〇年一月七日）に「足の向く儘 財布戦線異状あり」という軽妙な文章を

載せ、次のように学生の傾向を活写する。

カフェーの一杯のカクテルにその交錯した煩悶を塗抹して居た学生達がその道を断れた事を起縁として、勇敢に本屋へと突進して学究的立場からその解決の道を求める事は当然の事である。

某本屋のおぢさんに訪ねると、円本万能であつた学生さんが、近頃メツキリ単行本を買ふ様になつたと言つて居る。

思想、文芸哲学の方面の本がよく売れるそうである。商業学方面の本を買ふ学生の少くなつた事は考へさせられる事象である。(中略)

月末払ひで学生が本屋に払ふ金はおぢさんの計算に依ると、一人当り五円以上になるそう。先づ学生の小遣ひを十五円としても、其の三分の一が書籍代となる事は喜ばしい傾向である。

二九年十一月、警察が学生のカフェー出入りを禁止したため、学生は喫茶店に通う以外は書店に向かう機会が多くなつた。ほとんど小樽高商生と思われるが、小林多喜二の『蟹工船』は小樽市内の書店で爆発的に購入された。ごく大雑把にみて、二人に一人の学生が買ったことになる。

厳密には第四章の範囲となるが、一九三五年五月に編集部が生徒課の協力を得て、二年・三年生を対象に実施した「学生生活調査」の結果をみよう(雑誌・娯楽・運動・嗜好物を通して見た緑丘人の動向『緑丘』第八八号、三五年六月三〇日)。まず雑誌では、三年生は『経済往来』、『改造』、『中央公論』、『セルパン』、『キング』の順で、二年生は『経済往来』、『中央公論』、『キング』、『改造』、『世界と我等』の順で購読している。「商業及経済」の分野別でみると、『経済往来』について『エコノミスト』が多い。大衆向け通俗雑誌『キング』は、長崎高商でも第三位に入っているという。ま

た、『世界と我等』は国際協会の機関誌であり、小樽支部の活動を反映している（後述）。

娯楽の中心は映画と音楽で、これは長崎高商や東京商大予科とも同様である。それ以外には、宿舍別にみて、「父  
母宅の場合、釣が多く、寄宿舎の場合、碁、麻雀についてパチンコが多い事、素人下宿の場合に麻雀、撞球が多い」  
という。運動では散歩、野球、スキー、ハイキング、水泳、登山の順である。

嗜好物では紅茶、コーヒのほか、酒類ではビール、日本酒、洋酒の順となる。煙草は、三年生の一六四名中八  
三名が、二年生の二一七名中九二名が喫煙者である。好みの食べ物では果物、肉類、野菜類、西洋料理の順となっ  
ている。

#### 『校友会々誌』から新聞『緑丘』へ

『校友会々誌』は一九二〇（大正九）年六月刊行の第一六号から、同窓会との関係を強めるために、年六回の刊  
行とした（頁数は減少）。その後、実際には年三回程度の刊行となり、小林多喜二や伊藤整もここを創作の発表の舞  
台とするように、文芸雑誌の色彩が濃厚になってきた。

一九二五（大正一四）年六月五日、『校友会々誌』とは別に月刊の学校新聞『緑丘』が創刊された。『緑丘』の命  
名、一面の題字は伴房次郎校長である。「発刊の辞」には「従来の会誌」について「その発行回数比較的多き為め、  
原稿の聚集困難にして、充分なる会誌の体裁を整え難く、時に一部、文学愛好者流の独占に帰し、或ひは部報の存  
在を見ざる等、要するに会誌は、一部特殊なる会員の間にのみ其の存在の価値を保ち、一般会員には寧ろ冷淡視せ  
らるゝの傾向」があるとしたうえで、「大なる使命と抱負」の第一を次のように説く。

思ふに、学生の声は絶えず学生自らによりて学校当局者に伝へ、而して先輩諸兄の批評と指導とを仰ぐの途に

出でざるべからず。一方学校当局者は、新学則実施、旧学則変更或ひは各種の場合に於ける学生への告知等に於ける簡単なる掲示の裏面に横たはる詳細の真意は、吾人学生の知らんと欲する所なり。

第二の抱負は、「学芸」発表の場である（この箇所の紙面は破損）。そして、もう一つの大きな役割として「卒業生との連絡機関」をあげ、「先輩諸兄に対し堪えず母校の内情を報じ、或は校友会各部の発展に、或は突発事件に、各々その真相を伝へ、常に密接なる関連を保ち、絶えず外部よりの指導誘掖を仰がんとするものなると同時に、我等はこれ等各地各方面に活動せらる、諸兄の或は異聞に、或は調査に研究に、常に本紙の上に相見ゆることを切望するものなり」という。アメリカ留学から帰ったばかりで、この新聞発刊のアイデアを出した村瀬玄、および編集部長の大野純一は共に同窓生の絶大な協力を求めている。

この月刊新聞刊行とは別に、「研究、調査の事たる、或ひは長日月を要し、且つは大量の爲め本紙面に掲ぐるを得ざるもの」については、引きつづき『校友会々誌』として刊行され、二九年五月の第四〇号から校友会誌『緑丘学人』と誌名が変更された。

『緑丘』創刊の直接的な理由は前述のようなものだったが、それとともにこうした「学生新聞発刊に立入らしめた社会的背景」があった。創刊一〇年にあたり、「緑丘新聞十年小史」を掲載するが（第八九号・第九〇号）、そこでは「学生自治と学問の自由擁護の要求」に依えて、「学生大衆への働きかけに於て必然的に報道機関の必要を痛感し」、「大正中期以後学生は弁論と新聞とを舵とし、目まぐるしい思想界の急湍に掉さして、学生運動の流れへと乗出した」とする。

すでに慶応義塾の『三田新聞』を先駆として、一九二〇年代前半に学生新聞の創刊が相次ぎ、東京商大でも二四年五月に『一橋新聞』を発刊していた。高商系の学校では『一橋新聞』をモデルとして、山口高商『山口高商新聞』

とほぼ並んで『緑丘』が創刊され、さらに神戸高商でも雑誌形式から新聞への転換がなされる。それらは確かに「学生新聞発刊に立入らしめた社会的背景」という全国的な大きな流れのなかにある。ただし、小樽高商の場合、社会科学研究会と新聞発行の編纂部とは一線を画しており、学校側と協調的な紙面づくりだった。それでも三〇年前後からは学校側の検閲に抗して、かなりギリギリの編集方針に転換していく。

創刊まもなくの編集作業について、一九二七年卒業の金巻賢字は次のように回想する（『緑丘新聞』創刊の頃『緑丘五十年史』）。

新聞の編集といえば校正もなつかしい思い出の一つである。僕は赤インクの小瓶をぶら下げて地獄坂を上がりたり降りたりした。印刷所は花園町の太陽舎であった。赤く染まった指先は仲々落ちなかったものである。特定の部室が与えられてもいなかったもので、編集期には図書室の奥の教官閲覧室を使わせてもらっていた。そこで原稿の字数をかぞえて紙面の割り付けをする作業などをやった。新聞という新しい型式に替わったのに、反響はとくに無かった。どちらからも褒められもせず、さらばとって貶されもしなかった。この特別の反響のなかったことが、却って誕生に良かったのだらうと、今にして思うのである。溺愛もなく、冷遇もなかった微温の低地に、いつしかわが「緑丘新聞」は産みおとされ、そうして育っていったのである。

創刊号は四頁建てで、直前に予定していた印刷所の変更を迫られるという障害もあったが、無事に二千部が刷り上がってきた。三年生の富士元（大塚）武雄による「発刊の辞」のほか、村瀬・苦米地の寄稿、運動場工事の経過、学生の投稿や剣道・野球・スキー部・テニス部の活動報告、そして大山郁夫の講演記録が載った。「社会科学の人生価値」と題する大山の講演は編纂部員の筆記による（第二号に後編。いずれも破損）。

## 『緑丘』論調の変化

後述する小樽高商軍教事件に対して、創刊まもなくの『緑丘』編集部は静観するという態度をとった。部員が「伴校長私宅を訪れ、真相の取材とわれわれの執るべき方途とを相談に行った」ところ、「今暫く書くな」と報道差し止めとなった」（大塚武雄『緑丘』新聞創刊のころ）『緑丘五十年史』という事情のほか、「伝統の文芸部気質」も影響していたと金巻は述べる（『緑丘新聞』創刊の頃）。

事件がある程度落ち着いた一九二五（大正一四）年二月になって、『緑丘』第六号（二月一七日）は卒業生の心配に応えるとして、「天下の視聴を聚めた軍教想定問題の真相」を特集する。「学校当局より一切の材料の提供を受け」、事件の「経緯」や小樽総労働組合などからの「質問書」、学校側の「答弁」などを掲載する。また、巻頭の「大正十四年を送る」という論説の第三項目に「想定文事件」を取り上げ、社会科学研究会の行動について、「余りに宣伝に奔走し、又實際運動に興味を持ち過ぎたのではあるまいか。自由研究、論究批判の域を脱して、外形的運動に自らの使命を忘れたのではないか」と批判する。と同時に、「公平なる立場」からみて演習の想定について「常識を有する程の者は、明かに之が正否を判断し得る」とし、「学生の思想研究を、危険視し之を恐る、ものある」とみることには誤解だとする視点ももっている。これは、校内の大勢となった「穏健派」の見解を代表するものだろう。

しかし、一九二八年卒業の甲斐啓一郎は『緑丘』一〇周年にあたり、「軍教事件以来事勿れに押通した編集部だ。大した問題にも遭遇しなかつた。試験制度の問題、グラウンド利用の問題等々もあつたが、象牙の塔に籠つて居ただから、結局新聞の使命を果さなかつた」（『緑丘新聞を語る』『緑丘』第九一号、三五年二月五日）と、忸怩たる思いを語る。前述したように、二学期制か三学期制かと関わる試験日程などの問題やノート制度批判、山上グラウンド整備の中断など、『緑丘』は校内世論の惹起や方向づけに大きな役割を果たしてきたといえる。また、第一七号（一九二七年五月五日）で『大西猪之介経済学全集』の特集を組んだことも特筆に値する。



創刊後、しばらくは大野純一が編纂部長を務めていたが、大野の留学にともない、第一八号から留学から帰ったばかりの手塚寿郎に交代する。手塚は編纂部の後ろ盾になるだけでなく、自らも専門の論文のほか、「赤旗の起源」(第八一号、第八二号)などを頻繁に寄稿している。

さて、『緑丘』第五七号(三二年一〇月三〇日)で、浪岡弥一郎は過去七年間を各年の理事(編集長)ごとに特徴づける(『緑丘』回顧)。創刊当初は「同窓会記事、校内記事、就中運動部記事は相当地に多かつた」が、次第に「学園内の日常の出来事そのままを反影するに過ぎない単なるニュースの域から脱して、自らの声を発し様として来た」としたうえで、その後を次のように概観する。

昭和二、三年時代、即ち岩浪、佐藤君の時代にあつては学園の実質的、内容的、個人的な——例へば授業の如き——ものに対する学生の注目より発して、自治権の獲得を叫んだ。昭和五年時代には、一般形式的大衆的校友会行政上に対する関心より発しての学生自治権の付与を求めた。而して本年を見るならば、共済会乃至は学生消費組合設置の件が春以来学園の屋根の上を覆ふてゐる。即ち授業の内容に関するものでもなければ、校友会に対する一般的支配力の獲得でもなくして、経済的实际問題に関する学生大衆の関心である。

ここでいう「自治権」の要求や「共済会」設置に関しては後述する。浪岡は一九二九年ころから「創作、散文等の次第にプロ的になつて来た事実」、「緩慢ではあるが或る傾向をたどつて行つたこと」、すなわち、紙面にプロレタリア文芸の色彩が強まってきたことも指摘する。『緑丘』第三〇号(二九年三月三日)を例にとれば、一面には若宮良夫「唯物史観の相対性」を読む、渡辺勘吉「弁証法的唯物論雑考」が、二面には牧野健四郎「無産階級文学に対する一考察」が並ぶ。これは『緑丘』に限らず、多くの学生新聞に共通する傾向であるが、こうした論調は「原稿査

関と云ふ厳めしい過程が吾等の仕事を最も妨げる」(編輯後記「第一〇号、二六年六月一〇日」とあるような、学校側の検閲との軋轢をもたらす。第四四号(三〇年七月一〇日)では、伴校長・監生部(下部岩太郎・中野清一)と編集部(手塚寿郎部長・川島豊秋編集長ら)との懇談会の記録を載せるが、そこでは検閲をめぐる次のようなやりとりがなされている。

中野「検閲はどうします」

川島「部長だけにして貰ひたいと思ひます」

校長「いや矢張り一応は監生部の目を通す必要はある、問題の起つた場合の責任は部長一人と云ふ訳にはゆかないからね、又監生部の仕事が極限されてしまうから、一応は目を通す必要がある」

川島「監生部には一般的方面を見て戴いて、技術的な検閲の事は手塚先生に委かして貰ひたいんですが」  
 卜部「いやそんな訳にはゆかない、君はあまりに神経が過敏だ」

(中略)

校長「川島君達が注意してくれるのが一番良い」

手塚「載せて悪いと云ふのはどんな方面ですか」

校長「思想問題と品位問題です、之は出た者や之から卒業する者の大勢の運命に関するから」

実は、第四一号(三〇年四月二五日)には、川島執筆の論説「新しき笛を吹け」は「印刷直前学校当局より掲載禁止の厳命に依り」、掲載が不可能になっていた。それを「部告」では「見解の相異は致仕方なく」と伝える。その後も、こうした検閲をめぐる応酬は紙面に痕跡を残している。第四八号(二一年二五五)の「編輯後記」には「梅木君、及び

田沢君の緑丘展望への投書は、検閲の難関で通過できなかったのは残念!とある。また、第七〇号（三三年二月三日）の論説「校友会一年史」は冒頭の三〇字余りが「××」という伏字となっている。それにつづくのは「経済的に、政治的に、思想的に、社会の全構造が其乱調と混沌とを以て明日の嵐と光明とを暗示してゐる」という文であり、監生部による検閲・削除指示を抗議の意味をこめてか、そのまま残したといえる。第七三三号（三三年五月三日）で何人かの教員に依頼した滝川事件に関する見解の寄稿が「紙面の都合上省略」（編輯後記）となったのも、おそらく監生部による検閲の結果と無関係ではないと推測される。

同時に第七三三号では「緑丘」の存在価値と其の使命」と題する論説で、新聞発行の意義を「即ち校内各方面の活動とそれに付随した諸問題の正確迅速なる記録報道に其の批判、並に其の足跡を後に伝えると共に、卒業生に母校の近況を伝えて内外の結合を密ならしめる事なり」と再確認する。これは、新聞編集が編集部独断に傾きがちなあるという学校側の見方に対して、「世論の全学的発揚と学園充実向上への大使命」を掲げるとともに、学生・卒業生の支持と協力を得ようとしたものである。この号から、内報係・外報係・学芸係などの「情報蒐集」の態勢を整備し、編纂にあたっている。

### 校友会改革の試み

先の浪岡弥一郎が「三才となつた『緑丘』（緑丘）の回顧」は、積極的に学内世論の喚起を図ろうとした。大きく三つの方向があった。

第一に、校友会改革Ⅱ自治権確立の試みである。まず第二四号（二八年四月二六日）は論説「自治会の設立を提唱す」を掲げ、第二五号（五月三〇日）の論説「学園を充実にせよ」では「自治的精神の洗礼を受けてない学園の雰囲気、沈滞気分の起るは当然である」とする。ついで、第二六号（七月三日）の論説「学生自治の是非」ではやや具体的な学

生自治のあり方を論じる。すなわち、「学生の立場を無視した圧政的態度、若しくは学校の發達を看過してゐる類廢的な消極的態度に対して敢然として立たねばならない」とする一方で、その主張や要求を貫徹させる手段としては、「鬭争觀念は絶対に避けねばなら」ず、教授・学生は「お互に胸襟を開いて意志の疎通を計り、お互に譲歩すべきである」とする。この時期、全国的に席卷する「学校盟休事件」などには批判的であり、「教授と学生との意志疎通機関の皆無を如何にせん」という点に向かつて論陣を張っていく。したがって、「学園の園遊会的の物」として学生の要望を受けて実現した山上グラウンドにおける「競技大会」（二九年六月九日）についても、第三三三号（二九年七月一日）の論説は二年越しの懸案が実った「自治精神の發露」と自賛する。

後述する応援団に付随して自治的機能をもたせようとした評議員会については、一九三〇（昭和五）年一月、「訓育の方針、教育行政に関する事に対する生徒の議決機関、或ひは是に類似するもの、設立、存在は之を禁ず」（『緑丘』第四八号、三〇年一月二九日）とする学校側の措置で、設置まもなく解散を余儀なくされた。

再び改革の氣運が高まつてきたのは、一九三一年であつた。『緑丘』第六三号（五月二九日）は「校友会大衆化」を提唱する。現行の校友会理事會制を「所謂明治時代に於て行はれた封建性のものであり、完全に学生大衆の意思を代表する機関であり得ない」と断じて、「校友会の目的は学生大衆の融和進歩等、学生大衆を基礎とするものなるが故に、校友会の事業は一部の者に専断されるものであるべきでなく、大衆が之に与り得る性質のものでなければならぬ、されば何が大衆的なものであるかを最もよく知つてゐる者は、大衆その者をよく知つてゐる大衆の代表者以外ならぬ」と論じる。この号では、他大学・高商などの学友會制度と比較し、「吾々は取り残された現行制度より脱却して、普通なみのレベル迄たどりつかなくてはならぬ」ともする。

六月には編纂部主催の第一回新聞研究会の場で「校友会役員の大衆化 立法権と行政権の分離」が論議された（第六四号、六月二八日）。『緑丘』第六六号（二〇月三日）は、「我等の校友会を愛せよと 現制度改革の機運熟す 代表委員

制か参与増加か 何れをとるか改革案」という見出しで、校内世論を整理する。問題の焦点は「一部校友会会員（所謂役員）を除き、大多数の会員は校友会より精神的に離反し、福利を抛棄し、校友会に対して積極的に関心を有せざるに至つたが、しかも物質的義務は之を負はねばならぬ」というところにある。「物質的義務」とは校友会費の負担を指す。

しかし、校友会改革は現校友会での決定が必要となることから、その執行機関である教員と三年生で構成される理事会は改革に消極的だった。『緑丘』第六八号（二月三六日）は、「煮え切れぬ理事会に 痺れを切らした一、二年生 署名者四百人」と報じる。こうした反対運動にもかかわらず、「遂に校友会主腦者の高圧的な命令の元に、該改革具体案を理事会の審議に供し、後、総会に付すとの条件を以て運動の中絶を余儀なくされ」、「爾後此処に満二ヶ月、遂に理事会の審議すらなされず、未だに当路者の手元に「握り潰し」の運命に在る」（校友会二年史『緑丘』第七〇号、三三年一月二三日）という、経過をたどる。『緑丘』第七四号（三三年六月二五日）は、再び論説で「校友会の大衆化を論ず」を掲載するも、運動は盛り上がりながら終つた。

### 選手制度批判

校友会改革の試みは、個々の具体的な問題の総体としての解決策として模索されたものだった。その具体的な問題のうち、運動各部の遠征費負担問題に端を発して、校友会活動における運動部のあり方を問いかけたのが、選手制度批判である。

『緑丘』第二〇号（一九二七年一〇月一九日）は、「遠征について」校内に対立があるとする。一つは「我校友会の財政はあまり緩かではない、而も其大部分は運動部に占められてゐる、反面には学術研究方面の設備が頗る貧弱である、校友会では此の方面にもつと留意されねばならない」として、新たな遠征費拠出に疑問を呈する考えであり、もう

一つは「偏狭な地方にある我校の存在は運動部の活躍によつて甚大となる、遠征は一種の外交の役割をすらし、卒業生との聯絡機關をもなす」として、遠征費抛出に肯定的な考えである。

この遠征部と費用の決定は学生大会による投票で決定する仕組みになっていた。一九二七（昭和二）年六月の大会では、野球・庭球・弓道・柔道・剣道の遠征希望部がその抱負を述べたのち、投票に入り、庭球・野球・剣道の三部が当選した。費用は後日、校友会理事部が決定するが、学生一名あたり一円七〇銭の抛出となった（後期授業料と合わせて納入）。大会前には各部の投票勧誘運動も盛んにおこなわれた。一九九年の場合は、「昨年第四位に落ちて自費で遠征に赴くの憂目に遇ひ、却つての悔るべからざるを示した庭球部」が第一位になり、「対予科の敗戦の影響を受けた」野球部は第四位となり落選したが、「自費でも遠征」を敢行するという（『緑丘』第三号、一九二九年七月一日）。

三一年の遠征投票学生大会は「遠征無用論出でて 活気を呈した」。秋に予定される二〇周年記念行事費に回す案や、「学園生活を豊かならしむるために、遠征を中止する事によつて、吾々はプール、コートを、共済部を、学消を、学生集会所を熱烈欲せねばならない」などの論が展開されたが、遠征賛成票三五三に対し、半額遠征希望票六三、遠征否定票四一という結果となった。翌三二年度の遠征反対者は六七名へと増加する。

一九三〇年九月二五日の『緑丘』第四六号は、評議員会で「遂ひに火蓋を切つた 選手制度廃止論」と報じる。評議員会の解散により一時中断するが、校内の議論の底流にあり、三一年一〇月の新聞研究会の場で再燃する。二月の校友会理事会でも激論が交わされた。基本的に運動各々は選手制度支持であり、理事の苦米地英俊も「選手の廃止には絶対不賛成である、否現実の問題として、選手なるものは存在すべき筈のものであり、其の存在は正当性を持つ、其の廃止こそ校友会の活動を変体的なものとなす」という強硬論を展開する。これに対して、批判派の学生は、一部の少数選手の優遇により、「校友会大衆と部との遊離、校友会費の独占的傾向が生ずる」と対抗する。その後、この問題の経過について、『緑丘』第七〇号（三三年二月三日）の前掲論説「校友会一年史」は、次のよう

にまとめている。

此改革運動並に選手制度批判に関連して注目すべき新動向は、各運動部の「大衆化」への企図である。校友会費そのものに対する疑問と不平とが遂に種々の意義に於て、選手制度撤廃の声に迄進むだ。昨年度に於て其の理論闘争は最も華々しきものがあつた。此現在体制の運動部そのもの、存在意義を解消せしむる選手制撤廃の叫びに怯へた各部は、其与論緩和の過渡的手段として「部の大衆化」を企てた事は、固より彼等にとりて賢明な策であつたらう、然し乍らそれが単なる「対級試合」や対寮競技会如きものに止まる以上、決して学生一般の求めるスポーツの大衆化、機会均等の要求を満足させはしない。それは飽迄一の過渡的糊塗的なものとしての価値をしか有たないであらう。「選手制度」それ自身の存する限り、根本矛盾は解消され得ないのだ。

「学生一般の求めるスポーツの大衆化、機会均等の要求」は、『緑丘』紙上で何度も繰り返されたものの、一般学生の大きな支持を得ることはできなかった。「現実問題としては現存運動部の態形を維持して行く上に選手制は不可欠、絶対的な条件と考へざるを得なかつた」（校友会の大衆化を論ず）『緑丘』第七四号）からである。結局、この問題は「各部の大衆化」Ⅱ「各部と一般学生の親密化」、具体的には「校内大会（各運動部及外語、講演部）の増加」、スキーや水泳の大衆化という程度におさまった。

年間数千円におよぶ校友会費の大半は各部の活動費に回される。それだけに、毎年二月の次年度予算会議は「混戦」「争奪戦」の様相を呈した。一九二六年度（『緑丘』第八号）と三三年度（同、第七〇号）の各部配分額を比較してみよう。

一九二六年度		一九三三年度	
庶務部	六五四円	総務部	一〇二三元
編纂部	五三〇円	編纂部	七〇〇円
野球部	六二五・三三円	野球部	五四一・八一円
庭球部	七五〇円	庭球部	四九五円
外語部	一五〇円	外語部	一九一・〇七円
弓道部	一二〇円	弓道部	一二五円
競技部	三五〇円	競技部	二二一元
剣道部	三〇七円	剣道部	二六八円
柔道部	三五〇円	柔道部	二九六・〇六円
蹴球部	六五円	蹴球部	二三五円
水泳部	四〇円	水泳部	九五円
弁論部	二〇〇円	講演部	一八七円
スキー部	二三〇円	スキー部	二七一・〇六円
角力部	一〇〇円	共済部	一〇〇円

蹴球部はラグビー部である。角力部は一九二八年には活動休止で脱会している。共済部は、後述するように三二年一二月に発足する。



応援団長の公選

北大予科との定期戦を主宰する応援団長は、前年応援団長が四月に推薦するという慣行だったが、一九二九（昭和四）年度から、二年生大会での投票による公選制をとることになった。新入生歓迎などにも積極的な役割を果たすべきという校内世論の高まりを直接の契機とするが、学生自治機能の肩代わりを期待していた節がある。校友会理事會などにより五名が推薦されており、それぞれが抱負を述べ、最初の公選団長には安井正夫が当選した。

この応援団は「単に運動部が試合をなす時に応援をする」だけでなかった。「校友会の活気も応援団としての団体行動よろしきを得たる時に大いに上げ得るものであり、一致的団体行動は団長の適宜なる処置に負ふことが多いのであるから、更に団長の責任は重大である」（『緑丘』第三八号、三〇年一月二七日）と、期待をかけられた。三〇年度からは、応援団委員として、リーダーのほかに「与論の喚起体、指導機関」（三木盛五郎「新存在形態に於ける応援団」『緑丘』第四二号、三〇年四月二五日）として評議員が置かれ、団の運営に加わった（その後、評議員会は学校側の指示で解散となる）。『緑丘』第四二号（三〇年五月二七日）は、「最近に窺ふ 応援団の活躍」として、次のような記事を掲げる。

「新存在形態に於ける」を高く掲げながら其の産声をあげた応援団の活躍には又目覚ましきものがあり、運動部或は文芸部方面に於いて最近益々その発展の駿足を伸し、校内自治権の確立を目指して、雄々しく進んで居る。

今回の競技大会等も応援団の尽力による処大なるものがあつたが、過般校友会総会に於いて可決された山上グラウンド拡張の事業も、応援団が其の主任に当る模様である。（中略）

昨年作られた門出の歌も愈々生徒の口にのぼり、なほよりより協議の結果、応援の新型として拍手をとりいられた。

「緑丘精神ありや」の問題も此の応援団によつて解決されて行くのではあるまいか。

おそらく校友会改革や選手制度問題の頓挫とも関連してだろう、応援団への期待が異常に高まってきた（二年生に限られていた選挙権が、三三年から一年生にも認められる）。たとえば、『緑丘』第七〇号（三三年二月三日）のコラムで「学園最後を飾る？ 団長選挙、学問よりは板についた選挙運動が学園の随所で潜行的に行はれる。カレツジマン、さしづめ選挙運動で飯が食へるぞ」と評されるほど、候補予定者陣営の選挙運動は過熱した。三三年二月七日の「異常なる緊張裡に開始された」新団長選挙をみると、「選手制度の擁護」を叫ぶ候補者もいれば、「運動部の発達」を訴える候補者もいる。三分の二近い得票で圧勝した安田正義は「彼の北大予科何ものぞ、長髪何かせん、我々は怒濤の如く彼のエルムの都北大予科を破るべきだ」と叫び、「各学年各クラスの監査員制度、資金問題の解決、運動会の開催、共済部の営利人の排斥」などの方針を説き、「最後に緑丘学園を思ふ愛校の士よ、起て、と絶叫して降壇すれば、満場の拍手暫し鳴りもやまず、全く劇的シーンを展開した」（『緑丘』第七〇号）という。

その安田は『緑丘』第七二号（三三年四月三〇日）に寄稿した「半千の学徒に檄す！」のなかで、「応援団は全学生の中に其の発育を見、個々学生を生し、個々学生を力強くすると同時に、学園に大きな力を築き上げる」とする。また、翌三四年度の応援団長斉藤誠夫は、『緑丘』第七九号（三四年五月一〇日）への寄稿「団結せよ」のなかで、次のように論じた。

先づ眼を開いて学園を眺めよ、社会が今危機にあると同時に、学園も亦沈滞に沈んでゐる。歴史を緋け、光輝ある歴史の下に、燦たる我が学園の存在は、近時、確かに退歩の道を辿りつゝあるではないか。地の利を得ざる事は、其の大なる原因の一つはあるが、学生、並に之に共にある諸教授の熱なきも、原因の一つではなからう

か。古き殻にとち籠り、歴史僅に二十余年、早くも老境に入らんとするもの、如くである。かつて諸教授並に我等の先輩によりなされたる学園の昇格運動は、今は其の影すらないではないか。新興諸学校に、相次で先を越されつ、ある現状、我等は之を黙視して可なるや。

そして最後は、「我等の学園を愛して熱を以て立て。又団結心なき我等、勝利は唯団結の中にのみあり。団結の前に何の恐るべき敵やあらん」と結ばれる。沈滞気味の校友会に応援団がとつてかわろうとするほどの意気込みである。

その過熱ぶりは『小樽新聞』でも「緑丘学園の珍景」（三四年二月九日）として報じられる。「応援団は目下の処、校友会の部でもなく、非公認のものではあるが、運動競技その他全学生を打つて一丸とする非常時にはものだけに年々その選挙ぶりが猛烈さを加へてゆく、学校当局も非公認のものではあるが、合法的なので、黙過処しごころか一つには政治教育にもなるといふので、寧ろ歓迎の態度であるが、何せ六百健児の団長で唯一といふ事になれば、校長と同じやうなものだけに、それだけ人物でなければならぬので、勢ひ真剣になる模様である」と。

しかし、『緑丘』第七七号（三四年二月五日）のコラムでは、「選挙選挙で半歳暮し、後の半歳寝て暮らす」、「応援団長の歌」、「積年の轍ちくをふんで手遅れとなる事なき様、新団長よ、心して……」と揶揄されるように、例年、応援団の活動も最初の勢いを失つて尻すばみになっていった。

#### 共済部

一九二五（大正一四）年末、校門前で営業していた「ハッピー食堂」が校内に学生食堂を開いた。デパートの丸井呉服店が出張販売部を置いていたが、一般市価と大差ない状況だった。食堂については「値段の高いことは云ふ

迄もなし、品質も極めて粗悪」（『緑丘』第二〇号、二七年一〇月一八日）という投書も散見する。

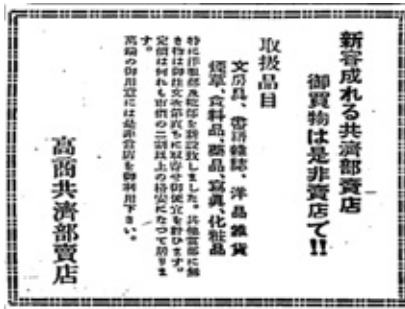
長引く経済不況にともない学生の生活の窮乏化が進むとともに、全国的に学生消費組合ないし共済部設置の動きが具体化してきた。小樽高商の場合は、一九三二（昭和六）年四月の新学期から始まる。

当初、推進派の学生たちは「学生消費組合」としての設立をめざしたが、学校側の拒否もあったほかに、資金問題や永続性・発展性の保障などもあり、断念せざるをえなかった。六月中旬、全国直轄学校学生主事生徒主事会議において、文部省から学生思想運動と結びついた学生消費組合運動に対する排除と取締が強く指示されていた。

ついで、「学校に於ける授業の一部として、特に商工実践に関連せしめて、実習と廉価販売を両立せんとする」方向がめざされたが、「責任者の問題、学生の過重なる労務の予想」から、これも頓挫する。その結果、「最も穩健なるものにして、又資金関係の点よりするも、永続性の点よりするも、比較的实现可能性を約束する委託制度に依る共済部の組織」に落着く。具体的には「委託制度による売店経営、及び学生共済に関する諸事の取扱い、此の二部門を含んだ共済部」の設立である（以上、『緑丘』第五七号、三二年一〇月三〇日）。

こうした経緯があつて、ようやく七月三日に共済部設立準備懇談会にこぎつけた。この段階で設置へのハードルとなつたのは、「根本的なる資金の問題、組織運用の形式の問題、例へば校友会の公認部として学生の自治権を獲得するか、又監生部を中心として其の指導を待つて活動するかの問題」（『緑丘』第五六号、九月二〇日）だった。

一〇月になって、設立準備懇談会の活動は本格化し、北大の共済部の調査などをおこなう。また、前述したように、一一月には共済部活動の教的基礎を求めて学生の生計調査が実施された。そして、一二月四日、共済部の発云式がおこなわれた。「何故に消費組合は不可能なりや」、「此度の共済部運動は潜行的であり、学生大衆と遊離してはゐなかつたか」などの質問が飛び出したが、それは「監生部を中心として其の指導を待つて活動する」かたちで設立が進捗したことに対する批判であつた。



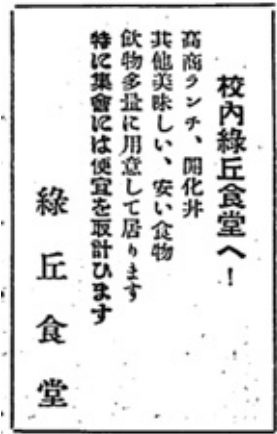
共済部広告〔緑丘〕59, 1931. 12. 25)

すでに一二月二日から「相談部」の事業が始まっていた。まず家庭教師や内職の斡旋、下宿料値下げ勧告書の発送などから取り組んだ。七日には「事業部」のうち、販売部も開店した。丸井今井百貨店に委託するもので、「何れも市価より二三割方格安で、毎日相当の売上げ」（『緑丘』第五九号、二月二五日）があるという。食堂は北海ホテルに委託し、「緑丘食堂」として翌年一月から営業を開始する。旧銃器庫を改造した場所に、テーブル二〇個と椅子八〇脚が並べられた（『北海タイムス』三三年一月八日）。『緑丘』第六三三号（三三年五月二九日）には、「高商ランチ、開化井 其他美味しい、安い食物、飲物、多量に用意して居ります。特に集会には便宜を取計ひます」という広告が載る。「開化井」は、鶏肉の代わりに豚肉または牛肉を用いて卵でとじたものである。

理髪店設置も検討されたが、設備費の関係からか、共済部で割安の「理髪券」を発行し、市内の理髪店に持参することにした。翌三三年一月末の校友会の次年度予算決定会議では、共済部に二三〇円を補助することに決定した。

夏季休暇が迫ると、相談部では求職先の開拓に奔走する。新聞に求職の記事を掲載してもらうほか、ビラの折込、道内の会社・官庁などへの求職依頼状の発送などを試みるが、不況下、「有望なるもの数件」というきびしさだった。それでもさらに活動をつづけ、「万年筆、石鹸、燻製品、新案玩具、特許器具、機械類（以上、外交及販売）、商品荷造、営林区署、斉田テント店（以上、労働）等で休暇と同時に各々其の職に就く事」（『緑丘』第六五号、三三年七月二四日）となった。また、下宿の斡旋もおこなうが、希望条件と合う物件は少なかった。好評を博するのは古本や不用品の仲介譲渡である。学年末・学年初めに、特に教科書類の需要が多い。

販売部では、三三年春の新しい試みとして、「校外指定商の設定」をおこなっ



食堂広告（『緑丘』63, 1932. 5. 29）

断然昂騰を示して、ランチ常食大衆に一大打撃を来してゐる、インフレ景氣の余波とでも云ふか、ランチは十銭から十二銭へ、そして今又十五銭へ。勿論質的に改善されつゝ、あるかも知れないが、学生大衆は「安かれ、うまかれ」のモットーだから、一般の要求にはピッタリ合致しないかも知れない。麵類の販売は一般に歓迎せられてゐる」（『緑丘』第七三号、三三年五月三一日）といふ。

しかし、共済部の活動に学生の不満は強まっていく。三四年一月の校友会予算会議において、「販売部の如き相当の収益をおさめてゐる故にあへて補助の必要を認めず」として、共済部への支出九二円を総務預かりとしてしまふのも、学生の不満を反映したものである。これを報じる『緑丘』第七七号（三四年二月二五日）には、「久しく待望され、遂に昭和七年校友会全員の多大の声援と期待の下に設立された共済部は、僅二年の後、既に存立の基礎をかくも不安な地位においてしまつた」とする。

『緑丘』第八二号（三四年九月二四日）の論説「共済部に就て」でも、「本校共済部は相談部の古本媒介以外、更に不評を重ねて来てゐる現状である事は、一般学生諸氏の齊しく認める處であらう、曰く食堂への不満、売店への不平は到る處で聞かされ、又話題に上る材料である」といふ。そして『緑丘』第八三号（二月一日）では「与論の勃興

た。一八種類の商品と市内二〇数店の商店を選定し、「校外に於て物品購買の際は凡て割引表によりて割引を求めらるゝ」仕組みであるが、実際の利用者は少なかった。小樽医師会との間でも割引受診を可能とした（『緑丘』第七二号、三三年四月三〇日）。

食堂の委託は、三三年五月、北海ホテルから「現長」に交代する。「サービスの点に於ては、前経営よりも人出も多くなつたせい

共済部改革の実現へ 種々の批難に鑑み、その対策を考究」という見出しの特集を組み、改革の先陣に立つ。ここでは長崎・山口両高商などの「他校消費組合の形態状況」の一覧表を掲げ、「何れも堅実に利益を計上し、之を積立金と為して組合の充実を量り、或は学資乏しき者への救済資金に充つるが如き、極めて合理的な経営態様をなしてゐる」としたうえで、「我校の不秩序なる現況」を批判する。

この共済部改革運動は、調査委員会のほか共済部改善委員会の設置に発展するものの、三五年初頭には「監督を厳重にして 委託制度継続」というかたちで一段落した（『緑丘』第八五号、三五年二月一日）。

### 校歌の選定

小樽高商では寮歌や応援歌、さらに数え唄はあつても、長く校歌が作られなかった。『緑丘』への「校歌を望む」旨の投稿が増え、弁論大会でも議題に上るようになると、学校側では一九二八（昭和三）年、校歌を募集することになった。選考は教員三名と学生三名があつたが、二九年二月、「一等と目すべきものなし」となった。教官会議で協議された次点の三編も「校歌としては幾分<sup>へた</sup>距りある結果、これを大家に訂正してもらう案と校友会歌として採用するの案」が委員付託となり、結局、校歌選定は見送りとなつてしまふ。次点三編のそれぞれの一番の歌詞を引いてみよう。

一 極光仰ぐ北洲の 乾坤澄める秋暮に 玲瓏崇き緑ヶ丘

芳英自治の学園此処に 真理を追究む若人の 深遠き思索は繁くして

時運の流れ啓発の 使命の学徒霊清し



杉山長谷夫



時雨音羽

一 あ、三歳の若き日を 謳はざらめや吾が丘は 白雲こむる石狩の  
大平原を打ち見つ、 黄塵の境他所にして 真澄める空に彌高し

一 あ、黎明の光の矢羽 ながれて明けゆく北海原に

聴かずや自由の潮のひゞき

藻塩草刈る学徒の胸に 使命は重し自由貿易 あ、小樽 自由の学府

一九三二年の創立二〇周年を前にして、再び校歌選定の機運が高まり、記念事業の一つとして校歌の歌詞を募集することになった。『緑丘』第五五号（三二年七月一〇日）の論説「校歌募集に就いて」では、「殊に若い生命が幾百と集つて一つの共同社会を形成して居る学園の如きは、共同の目標を持ち、其れに向つて動くリズムを持つ事は、共同社会の結合をより強くし、より堅くする事を意味する」と論じ、「歌詞は大胆に、率直に、学園の姿を詠んで欲しい、学園が織りなして来た歴史の特異性、自然的環境の与へた力、将来の発展の相貌など、飽くまで、学園の生命を表象して欲しい」と要望していた。これに数編の応募はあったものの、「作詞と作曲とは或程度迄聯関性を有する」という点から、適当な歌詞を選定できず、行き詰まりとなった。そこに専門家に依頼する道が浮上してきた。『緑丘』第五七号（三二年一〇月三〇日）は、その経緯を次のように報じる。



此度一委員より時雨音羽氏しぐれが好意的に作詞の労を引受けらる、様洩れ聞いたと伝ふる所あり、委員側に於ては時雨音羽氏に依頼せんとの意向にて、手続き上の諸問題其他の諒解を得つ、ある模様である。氏に依頼する時は、作曲も紹介の尽力を仰ぎ得べく、経済的負担を最大苦痛とする学園の現状に最も適合せる方法の如く考へられる。尚時雨音羽氏は小樽にも住居せらるることあり、小樽の風景情緒等には明るく、又小樽小唄の選者である。

その後、正式に依頼した時雨から承諾の返事があり、時雨の斡旋で作曲者も杉山長谷夫（東洋音楽学校教授）と決まった。こうして、翌三二年一月一日、現在も歌いつがれている校歌が誕生した。一月三〇日の音楽部の演奏会で初披露された。一月二八日の『小樽新聞』には、「曲は希望に燃えてゐるやうな行進曲風のもの」とある。

時雨音羽は北海道利尻島の出身。「どんとどんとどんと波乗り越えて」という藤原義江の歌で知られる「出船の港」（一九二八年、中山晋平作曲）や「君恋し」（一九二九年、佐々紅華作曲）を作詞する。のち、「山はしろがね朝日を浴びて」で親しまれている「スキー」の作詞もする。杉山長谷夫は愛知県生れ。「出船」や「花嫁人形」の作曲者で、時雨とのコンビでは「つばめ」「まだ見ぬ夢」などがある。

七月には小樽高商のボーカル部員が上京し、コロムビア・レコードで校歌と行進曲の吹込みをしている。この挙を、『緑丘』第六五号（三二年七月二四日）は「全国高商中の嚆矢」と伝える。レコードは一円五〇銭で市販された。

この校歌は、音楽部の公開演奏会などで歌われるほか、各地の同窓会でも新卒業生によって伝えられた。神戸支部の場合、「鈴木氏の独唱及び新卒業生一同の合唱が幾度か繰返された後、「随分難しい校歌だ」と云ひながら、大勢一緒ならば歌へる人も数増して、時ならぬ一大合唱団をなしてしまつた」（『緑丘』第六四号、三二年六月二八日）という。



レコード広告（『緑丘』81, 1934. 8. 3）

その神戸支部の新年会では、早くも「あの尻上りの「金鱗おどる渺々の」そのメロデーが始まると噂が熱くなる。懐かしいぞよ、小樽！」（第七〇号、三年二月三日）となるほど、校歌は親しまれている。

三四年二月、来樽した杉山長谷夫は、歓迎会の席上、「高商の校歌は、荘厳な場合の校歌といふ目的以外に、校友会の会合、各種運動の対抗競技に於ける舞踊等々、諸種の場合を考慮した、実に欲張つた曲である」と述べたうえで、「学生諸君の唄方は、少し遅過ぎる、もつと早く、朗らかに唄つて欲しい」（『緑丘』第八七号、三四年三月二日）と注文をつけている。

校歌の五番の「健腕拓く五大州」という一節は、一九三〇年代後半になると、大陸への雄飛への檄として、しばしば引用されることになる。

### 修学旅行の変容

一九二〇年代前半、事情は不明ながら、公式の修学旅行は中断していた。それでも、一九二二（大正一一）年五月、「中村〔和之雄〕主事修学旅行の一として弁論部講演旅行隊を引率、下富良野、帯広、釧路、網走、野付牛、名寄各地へ七日間の予定を以て出発す」（『緑丘学園三十五年史』稿本）とあるように、弁論部の地方巡回講演が修学旅行と位置づけられて実施されることもあった。また、学生有志が教員を引率者に夏休暇中に旅行することもあり、一九二六（大正一五）年七月には中国語クラスの学生を中心に五〇名が中国に出かけている。

一九二七年には、教務部主事の中村和之雄の提唱で、公式行事として修学旅行が復活した。以前と同じように、「樺太方面」「網走方面」「室蘭方面」「満鮮北支」のコースから選べることになっているが、いずれも経済的負担は



修学旅行

重く、しかも修学旅行に参加しない学生は二〇時間の欠席になるという噂が飛んだらしく、ある学生は「如何に修学旅行とは云へ、これを生徒に対して強制すべきものだらうか？ 現代の学生は必ずしも、ブルジョアの子弟ばかりは入つて居らぬ。否その大部分は中間階級以下の子弟が多いのだ。（中略）どうか、今度の旅行は、生徒の自由として、出席などに関係ないものであらんことを望む」（『緑丘』第一八号（二七年六月二四日））と投稿している。参加者はあまり多くなかった。一年生や二年生も参加している。

校友会でも修学旅行のあり方が議題にのぼった。三〇年五月の校友会理事会では、苦米地英俊から「七月行はる、修学旅行について、近來其参加者が激減して成立し得ない様な状態であるが、これが増加方法を何とか講じて貰ひたい」という要望がなされ、「費用の縮少<sup>マツ</sup>、及び旅行地方の選択を留意し、生徒が主となつて参加者を募集する事となつた」（『緑丘』第四二号、五月二七号）。

この年は、北海道内部・関西地方・関東地方・樺太地方・「満鮮地方」のコースが成立し、それぞれの参加者が「具体的な計画を樹て、最も有効に旅をエンジョイせんものと頭をひねつてゐる」（『緑丘』第四四号、三〇年七月一〇日）という。これら以外に羊蹄山登山が計画され、それにも参加しない者は二日間の山上グラウンド拡張工事をおこなうことになった。

三一年の場合で費用の概算をみると、「満支方面」日程二四日間・一四〇〇円、「樺太方面」七日間・三七円、「関西方面」九日間・約四〇〇円、

「室蘭方面」五日間・約一八円、「釧路方面」六日間・三〇円だった。この年の授業料は年間八〇円であったから、道内でもかなりの負担となった。なお、いずれにも参加しない者は定山溪、美国、大雪山の何れか一泊旅行となった。

学校側では教育的見地や就職面から、「学生の社会的認識且又これに対する批判、並に社会場裡に立つての心構へを養ふ為」〔緑丘〕第五五号、三年七月一〇日〕として、修学旅行への参加を勧めた。三五年の修学旅行の各方面の目的は、「樺太方面」では、「北進日本」そのまゝに、南は大泊より北は国境に至る迄、その間大原始林あり、バルプ工場あり、ツンドラ地帯、海豹島等々、新緑萌ゆる各地を訪れる、興味と知識に富むもの」、「裏日本より阪神方面」では「北陸の諸都市新潟、伏木、敦賀等の対満貿易港を視察、神戸大阪等の経済界を打診するもの」〔緑丘〕第八八号、三年六月三〇日〕とされた。

### 運動部の活躍

伴校長の在任した一九二〇年代から三〇年代前半にかけては、学生の運動部や文化部の活動が、最も自由に展開されたといべきだろう。主な運動部は一九二七年頃には北大予科との定期戦を組むようになっており、さらに実力のある部は全国的な大会へも参加していく。

たとえば、一九三〇（昭和五）年五月二七日の『緑丘』第四二号には、「戦雲愈々急なり」として、次のような予告記事が載る。

各運動部の本年度春季対北大戦に就いて、対戦日取定めのため、過日応援団より交渉委員を派遣したが、協議の上、左の如く決定した。

ラグビー 於札幌 六月七日

野球 々 同 八日

弓道 々 同 八日

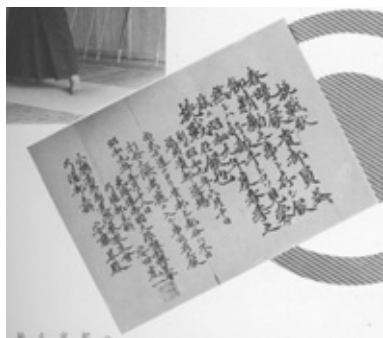
水泳 於小樽 六月廿二日

弁論部は六月七日、札幌時計台及び小樽公会堂に於いて対抗弁論大会が行はれる筈。其の他競技部も六月中旬頃対戦する模様らしい。

右の中、殊に興味を惹くものは野球戦であり、其の伝統的歴史は北国に於ける早慶戦とも称さるべきもので、札幌両都のファンを暴風的に熱狂せしむるものであつたが、此度、JOIKが中継放送をする事になり、非常なる注目の的となつてゐる。

ラグビー部、水泳部共に全敗の歴史をヒタ押しに一掃せんものと意気込んで居るが、陣容を一瞥して見るに、目的達成の日も遠からずと見られて居る。

しかし、北大予科との対戦成績は全体としては劣勢だった。一九三三年五月三十一日の『緑丘』第七三号では「新緑の芽生えと共に 過去の敗退史に逆行して 一路更生に邁進する——各運動部の聖戦準備——」と意気込んだにもかかわらず、実際の戦績は「期待を裏切り 又も彩られた敗惨の一頁 剣道部のみ辛勝」〔『緑丘』第七四号、六月二五日〕という状況だった。したがって、同号には「初夏の緑丘に吹く敗惨の悲風、南に大学の顛落を歎じ、北に緑丘スピリットの転落を啣つ」と、嘆きのコラムが載る。



弓道部「挑戦状」

特に野球は「北の早慶戦」と呼ばれるほど、小樽や札幌の市民を巻き込む名物行事となった。対戦を控えた壮行式も熱を帯びる。その情景を、二五年七月一日の『緑丘』第二号では「赤旗が幾条も幾条も初夏の風に靡いて、いと静かな中にも山雨至らんとして、風楼に満つ慨がある、緑ヶ丘五百の健児の心中には、恐ろしい迄の緊張と物凄い迄の決心とが仄いてゐる」と描写する。二七年六月の壮行式では、マツキンノンも「行けよ我が軍」と檄を飛ばしている（『緑丘』第一八号、二七年六月二四日）。北大予科が白旗なのに対して、小樽高商では赤旗が翻った。

久々に勝利すると、歓喜が爆発する。三四年六月二二日の『緑丘』第八〇号は「積年の汚名を雪ぎそそ 野球弓道共に大勝 狂喜する学生の群」という見出しで、次のように歓喜を伝える。

拙なかりし過去の運動部史の更新を目指して、雪解けのぬかるみを馳け、散り行く桜の下に栄光を求めつつ、忍従の幾年、幾月の成果を遂に成った。

過去数年に渡る苦杯の如何ににがかりし事ぞ！

戦つたのだ！ 先輩が血を流し、涙を以ておほつたかのグラウンドに今や狂喜し、乱舞する緑丘半千の姿が、そして昔日の苦しかりしし習練の成果に涙する選手達の姿が、尊き二十有年の歴史に燦として刻まれたのだ。

四年振りの野球、弓道両部の勝利、ラグビー部の健闘……。凱歌の渦巻に若人の感激が流れ、砂塵をけつて躍る団旗、人の群……札幌を廻つて爆発する歓喜の声がこだまして行く。

では、この期間の顕著な運動部の活躍ぶりを見てみよう。運動部でまず目立つのはテニス部である。一九二四（大正一三）年には、最大の大会である全国高専大会（インターハイ）で優勝している。九校が出場したこの大会で、前年準決勝敗北の雪辱をはたした。その試合ぶりは、「熱球に、半ロビングに、敵の急所深く突込む後衛！ それは

我が奥沢である。少しの無理もせずに、理論的にぐんぐん抑へて、敵の心胆を寒からしめたもの！ それは我が蚊野の活躍振りであった」（K・R「全国高等専門学校庭球大会優勝之記」『校友会々誌』第三五号、一九二四年二月）。

陸上部（当時は競技部と呼ぶ）の米田隆吉の活躍もめざましい。米田は一九二五年五月、フィリピンのマニラで開催された極東オリンピック陸上競技大会に日本選手団の一員として参加し、一五〇〇m走で第二位の好成績をおさめた。

一九二八年度の野球部は強かった。北大予科の秋季定期戦に勝利するだけでなく、仙台で開かれた東北・北海道地区の高等学校野球大会で優勝し（高岡高商・仙台高工・福島高商を連破）、甲子園の本大会に出場したのである。結果は「三伏の酷暑に、重鎮藤田左翼手倒れ、其他数名氣息えんえん、加ふるに染谷一壘手は家事上の都合で出場不可能となり、コンデーシヨンの不利なることこの上ない」（『緑丘』第二七号、二八年一〇月六日）という状況での試合であったため、一回戦の同志社高商戦で惨敗した。

水泳部は一九三〇年に黄金期を迎える。唯一北大予科戦に勝利するだけでなく、第一回東部日本高商水泳競技大会で団体優勝を果たす。二〇〇m自由型・一〇〇m自由型・一〇〇m背泳で一位となり、総合得点でも六二点と他校を圧倒した（『緑丘』第四五号、三〇年八月三日）。三一年の第二回大会でも二位となる。

剣道部も三一年七月の全国高専剣道大会に遠征し、準優勝という活躍を示した。

やはり白眉はスキー部である。二三年二月、小樽で開催された第一回全日本スキー大会には北海道代表として、船津隼二がクリスチャニア・スラロームに、讃岐梅二がジャンプに（記録一六・一m）それぞれ優勝している。しかし、その後低迷がつづく。

一九三〇年代はスキー部にとっても黄金期となった。卒業生で、日本におけるスキー理論の第一人者ともいえるべき高橋次郎の赴任とその本格的指導、シャンツェの校内設置などで実力を増したスキー部は、三三年一月、米沢で

開かれた全国高専スキー大会で団体優勝を勝ちとる。四〇kmレースと三二km継走レースで一位となるほか、ジャンプでは一位・二位を独占した（翌三四年もこの大会で団体優勝）。林崎徳助は、その様子を「複合ジャンプより開始、本校選手は藤山、四ツ谷君、緑の新調スエターO、C、Cのマークも鮮かに飛んだ。飛んだ、見事なフォームだ、然も立つた。飛躍距離も三〇メートル以上出して居る。優勝は確実だ、一万余の観衆唯呆然として此の壮技、快技に酔はされて居る。続いて純ジャムプが行はれた、之には野口君、藤山君の奮闘素晴らしく、一、二等を取る」（『緑丘』第六九号、三三年一月二六日）と伝える。一月一七日の『東京朝日新聞』も「賞品全部を一手に獲得、凱歌を奏したが、同校の出場選手は六名で、参加六校中最も少く、野口、本間両君の一種目を除く外は、名雲、赤川両君が二種目、四ツ谷、藤山両君が四種目を受持つて、孤軍奮闘の結晶は何れも粒選りの選手とて、各種目殆ど独り舞台の好成績を納めてなほ且余裕しやくしやくたる技倆」と称賛する。

さらにこの勢いを駆って日本学生スキー大会にも参加し、五位となる（『緑丘』第六九号、三三年一月二六日）。三五年に小樽を会場とした日本学生スキー大会では、参加九校中、第三位の好成績だった。

そして、これらの大会のジャンプで好成績を収めた四ツ谷勇は、スイスで開かれた第一〇回万国学生スキー大会（ユニバーシアード競技大会の前身）に日本代表団（五名）の一人として参加している。帰国後、この体験をもとに、四ツ谷は次のように日本スキーの課題を指摘している（『吾々が中欧スキー界を見て得た所』『緑丘』第七九号、三四年五月一〇日）。

吾々は此の度の遠征に依つて学んだ所は、如何にして高速度の滑降を為すか、と言ふ事、即ちダウンヒルレースとスラロームレースを学んだ事であり、而して実際の彼等の滑降技術が日本の現在と比較して何の程度に進歩して居るものであるかと言ふ事を知つた。（中略）

吾々はデスタンス、ジャムプは可成りの所まで行つて居るのであるから、滑降スキーも之に伴ふ様に努力し



て、一般スキーヤーのレベル上昇も計らなければならぬ。

一九三五年二月の全日本スキー選手権大会の純ジャンプでは、宮島巖が「新人乍ら五六、五七と美しい流線型を描いて見事三位」(『緑丘』第八六号、三月二八日)となり、第四回冬季オリンピックピック選手に決まった。

宮島が出場したのは、ドイツ・ガルミツシュ・バルテンキルヘンで開催された冬季オリンピック大会である。同オリンピックには高橋次郎と卒業生の野口正二郎も役員として参加した。校友会を中心に派遣選手後援会を組織し、募金活動をおこなった。宮島はオリンピックの前哨戦としてスイスで開かれた万国学生スキー大会で三位となったが、本番のオリンピックでは三〇位にとどまった(二回とも六三・五メートルの飛距離。日本選手団中では第二位)。

#### 文化部の活躍

運動部に劣らず、文化部も活発に活動している。一九三五(昭和一〇)年四月、『緑丘』第八七号(五月一五日)の「独立団体懇談会」を機に、「独立団体聯合会」が結成された。これに参加したのは、東亜事情研究会、北海道経済事情調査会、国際協会(旧国際連盟協会)、高商支部、射撃会、仏教青年会、ユニオン・ソサイティー、ピリグラム・クラブ、法律同好会、経済研究会、文芸研究会、演劇研究会、映画協会、音楽部、商業美術研究会、詩吟会、Y・M・C・A、カメラ同好会、宝生会、竹友会の一九団体である。学科の延長のような会もあれば、趣味・娯楽の会もあった。また、運動部主体の校友会傘下にも講演部、外語部と編纂部がある。すでにこの時点ではなくなってしまうが、高商短歌会・緑丘吟社・山岳部・囲碁研究会などもあった。

講演部による地方巡回講演と外語部による外語劇大会、文芸研究会については次項以下でみることにし、いくつかの部を一瞥してみよう。

まず音楽部は、ボーカル部・マンドリン部・ハーモニカ部・バイオリン部・ピアノ部などから成り、合同の演奏会などを開く。一九二五年一月には、山上グラウンド整備資金の募集を兼ねて、帯広と旭川に演奏旅行を敢行する。旭川の会場は商業会議所で、「六、七百を収容出来る非常に気持ちのいい、サロンである、定刻六時半、満員の聴衆を前にハーモニカの軽いメロデーにステージが開かれる。拍手の波に送られて曲は次第にすゝみ、デーゲン教師のムーンライトソナタの頃は、すっかり音楽に酔はされた様、静かな北国の秋はシヤンゼリゼーの如く輝くメロデーの国に変つて行く」(『緑丘』第五号、一月二六日)。

たとえば、二六年一月の音楽会を前に、「ハーモニカが著しく膨張した。中央の学生団体に対抗し得る程の堂々さを有してゐる」と自信のほどをみせ、さらに「オーケストラを作りたい、大コーラス団を組織したい」と夢を膨らませる。次のようなプログラムが予定されていた(『緑丘』第七号、一月二五日)。

### 第一部

- 1 ハーモニカ・バンドーイール・トラバトーレ
- 2 コーラス
- 3 マンドリン五重奏ーエリザダムール
- 4 ハーモニカ・バンドー詩人と農夫
- 5 ピアノソロ (デーゲン氏)
- 6 マンドリン・オーケストラーソナタ

### 第二部

- 1 コーラスーラグスオールドスキートサンゲ



マンドリン部

- 2 ハーモニカ・バンドーリゴノセンタナ
- 3 ヴァイオリンソロ (直島氏)
- 4 マンドリン・オーケストラ・オリアツオ、クリアツオ兄弟
- 5 ピアノソロ (デーゲン氏)
- 6 ハーモニカ・バンドー天国と地獄

また、二九年一〇月の第八回公開演奏音楽会の様子を、『緑丘』第三五号(二〇月一六日)は、「樽都愛好家の絶大な期待と渴望を荷へる本大会は、発表前既に至る処にセンセーションを捲き起し、定刻早くも数百の聴衆、場に溢れた。開会の辞に次いで奏で出づらる楽の音は、悩ましい幾多の世相より逃れしめ、天国はるかに遊ばしめるの感があつた」と報じる。三二年夏には、道内の巡回演奏会がおこなわれた。

音楽部の活動には、外国人教師が積極的に協力している。なかでもドイツ語のデーゲンは夫妻でしばしば演奏会に出演している。英語のフィギスは、ピアノの即興演奏を得意とした。ロシア語のスマルニツキーは独唱だった。前掲の三五年五月の「独立団体懇談会」において、各部が説明する活動状況をみよう。

東亜事情研究会 本会は満州事変に刺戟されて昭和七年創立されたもので、東亜の正しき認識を得んとする目的の為に(中略)東亜の哲学、宗教、経済等々があり、研究発表を主としてやりたいと思つてゐます。

法律同好会 四年前に法律は難解である、一面社会に出て重要性が多いので、法律一般の常識を涵養する目的で創立されたもの(略)

北海道経済事情調査会 我会は六年前に創立されたもので、理論に走るよりは実際に立脚してといふ趣旨で、

北海道の重要産業を中心とし、これが如何なる過程にあるかを研究する目的で作られたものです。

仏教青年会 現代社会は文化的には進歩してゐるが、其丈不安危機の間にある、此の時に当面して人生の怒濤を破つて行く上に吾々に指針をあたへるものが需要である、吾々は大乘仏教を旨として思想善導と人格養成に進む積りである。

詩吟会 最近国体を忘れ、浮華放縦に流れ、日本国民たる矜持を忘れて来た（笑声）、詩吟に依り日本古来の精神を把握、質実、剛健な氣風を得んとして設立した。

商業美術研究会 漫画、絵画、ポスター、写真等で実際と理論両方面を研究するのです。今年は市内商店の飾窓を研究します。

竹友会 洋楽が盛んになり、邦楽が衰へたので、この会が生れたのです。

射撃会 昭和八年、学生大会に出場してより発会したが、ガツチリした会です。発射の禪味的な処を味うんです。

校友会の各々が補助金を受けるのに対して、これらの独立団体はいずれも活動資金の不足に苦勞していた。文化部が主催する芸術祭の必要性も何度か論じられたが、実現しなかった。

#### 道外の巡回講演へ

講演部では校内弁論大会、小樽・札幌における公開講演会、道内中学校弁論大会の主催のほか、夏の地方巡回講演を恒例行事としていた。一九二〇年代半ばころ、マンネリ化した校内弁論大会では聴衆が集まらず、巡回講演も他校とちがひ、以前ほどの盛況ではなくなり、講演部自体も部員減少で停滞気味だった。

この打開のために、巡回講演では道内から道外に進出を図る。一九二七（昭和二）年七月、はじめて東北・秋田で実施する。これに参加した田中弘康は「東北地方に於ては、北海道方面よりのこうした団体に多大の期待をもつてゐる」としつつも、次のように観測している（『緑丘』第二〇号、一〇月一八日）。

この事業もこ、数年間はトラジシヨナリに行はれてゐる傾向があるらしいが、何となく行詰りを感じざるを得ない。文化啓発といふ点に於ても、印刷術の大なる発展、出版界の革命に伴ふ廉価本の普及等により、特に此の講演会に於ても毎年夏季になると、東都のみならず遠くは関西方面より陸続して学生、知名の士の来道あり、一般に講演会の中毒に陥つてゐる事實は看過す能はざる重大事である、されば、学校と社会の接近、学校紹介といふ意義をより明瞭に表示せんには、夏季でなく、他の時期に於て、或は他の方法で行ふ事が一層の効果をあげ得る所以でなからうかと思ふ。

一九二八年と二九年には「樺太」巡回を、三〇年には「駿足を伸ばして 新潟、佐渡ヶ島迄」（『緑丘』第四四号、七月一〇日）、三二年には富山・石川・福井三県を、三四年には東北六県を巡回した。三二年の場合、「各地に於て予想以上の好成績を得、北陸三県の等しく窮乏化せる中小商工業者並びに一般市民に僅かではあつたが、何物かの把握を迫らした事は大野、高橋両教授に拠る所あり」（『緑丘』第六六号、一〇月三日）という。北陸巡回は「講演と映画の夕」として、「白銀の秘境」や「シーシュプール」（小樽高商作成）なども上映された。二〇〇名ほどを集めた金沢について、「さすが学の都市だけあつて聴衆は熱心に聞いてゐた、小樽市民の講演に対する不熱心なる事を各地に於て感じて来た一行は、金沢に於て一層拍車を加へるに至つた」（『小樽新聞』、三年七月二五日）という。これらの各地の巡回講演の受入れには、卒業生が尽力している。

この時期、講演部の学生たちはどのような論題を選んだのだろうか。一九二九年一月の送別弁論大会では、「或は人道主義的見地に立ちて現代社会の階級闘争も愛の一字によりて解決するべきを叫び、或はクリスチャンとして、エレン、ケイ的な婦人解放論を説き、或は金解禁即時断行を提唱し、つぎには貧しき戦士に対する泣かんばかりの同情を以て兵制改革を叫ぶ」（『緑丘』第二九号、二月一日）という様相だった。三三年六月の教授学生学術講演会の学生の論題には、「社会進化と経済法則」「農本主義批判」「日本農業恐慌に就て」（以上、小樽）、「吾国農村問題に対する一考察」「思想闘争場裡に安住所を求めて」「無産階級の政治的進出に於ける歴史前提」（以上、札幌）が並ぶ（『緑丘』第七四号、六月二五日）。これらは、「学内的に充実せる教壇下の習得知識に、研究を加味し」たもので、「経済産業の時事問題、思想問題を取り上げ」（『緑丘』第八〇号、三四年六月二日）ていた。

### 外国語劇の盛況

外語部の活動は、例会での自由会話や道内中等学校英語弁論大会の主催などがあるが、何といっても中心は外国語劇大会の主催であった。実際の出演者は英語や各第二外国語のクラスからの選抜者で、教員陣も指導・演出にあたる全校的な行事だが、会場の設営や運営、プログラムの作成などで、外語部の奮闘が不可欠だった。毎年一月から二月の二日間、一般市民に向けて公開され、時には英米・ソ連の領事館関係者も見学にやってくる。

一九二五（大正一四）年前後、外国語劇は苦境に立たされていたようである。詳細は不明ながら、一九二六年一月二日―五日の『緑丘』第一三号には「衰微も甚だしく、殆ど見戯の如くであつた外国語劇大会は、愈々今年より当局の忌諱に触れざるマキシマムに復活せしむる事になつた」という、気になる一文がある。二四年には外国語劇は実施されているが、二五年秋の分は確認できない。この二六年秋にはゴルキー「どん底」（ロシア語クラス）を、メーテルリンク「青い鳥」（フランス語クラス）などを公演する予告が出されたが、何らかの事情で中止されたと推測さ

れる。二六年七月一二日の『緑丘』第一一号の「文芸消息」欄には、「それにしても当局の方針をもう少し緩めて貰へぬものか、三年間の緑丘生活に一度位華やかな外語大会の思出を持ちたいではないか」とある。二七年秋は、大正天皇の諒闇のために中止になった。

「当局の忌諱」とは何か。その理由の一つに、学生が女装することが望ましくないという判断があったと思われる。それに関連して、演目の選定でも対立があった可能性がある。二八年の「外語大会を終つて」と題して、上勢清次は「外語大会を開催するに付いて、監生部では色々世間体を心配なさる様ですが、それ程世間では八釜しく視るものではない様です、又、大会を開く為に授業がおろそかになると云ふ様な事は、此度の大会に於ては一部の特殊な人を除いては、此の現象は見られなかつたと云ふ事実で打消されます」(『緑丘』第二九号、二九年二月一日)と述べているが、この「世間体」への配慮や授業の軽視・怠慢などへの警戒もあつたかもしれない。

一九二八年六月に臨時教員養成所のクラスが英語劇を公演し、盛況だったこともあり、秋の外国語劇は一転して「御大札奉祝の意味の下に盛大に行はれる」(『緑丘』第二八号、二月五日)。ここではロシア語劇やドイツ語劇に若い女性が登場することになっており、小林象三らの助言もあつて学生の女装も認められたようである。一月一〇日の『小樽新聞』は、「異国情緒に気の利いた照明 眼と耳の限らない享楽」



外国語劇 独語



外国語劇 露語



外国語劇ポスター（1932）

と報じた。

これ以後、外国語劇は小樽高商の名物行事として再び活況を呈する。たとえば、三一年の外国語劇大会を「多年の懸案を解決して 画期的成功を収む」という見出しで報じた『緑丘』第五八号（二月三〇日）には、次のようにある。

恒例の外語劇大会はあらゆる意味に於て学園の誇り得る事業の一つであり、常に圧倒的な支持期待を持たれて居るが、本年度に於ては更に廿周年を記念し、将来のよりよき大会の発展を基礎づくべく、其の経営、演出、等に従来のない新味を加へ、文字通りの熱狂的称賛を得た。

大会は例年より一ヶ月早く、去る十三日、十四日両日に亘つて催されたが、折柄の星夜の事とて晩秋の静な一夜を、エキゾチックな情緒にしたらんとする人達は、老ひも若きも、紳士も淑女も交へて、等しくや、興奮したる輝かしき面持にて立錐の余地なき場内に坐し、開幕を待つ有様であつた。

場内は各部出し物のポスターを以て飾られ、右側及背後には椅子を並べて観客に便宜を与へ、又入場者は各々パンフレットを持てることとて、劇の進行と参照して細部に迄立入つて鑑賞するの心よさを得せしむる事、申分なき光景を示した。

会場整理に当つた応援団は近來になき統制振りを示し、八百、九百の観衆をして混乱の中に陥らしむることなく心よく応待を与へ、観客は何れも満足の意を表して居た。



演出振りの清新さと云ひ、監督の経営的手腕と云ひ、応援団の統制振りと云ひ、あらゆる意味に於て、本年度の大会はよき道しるべを示し得た。而し背後には校友会会員大衆及び職員の理解ある、熱烈な支持のあつたことは決して見逃し得ない。

ここでいう「多年の懸案を解決して」とは、「演出振りの清新さと云ひ、監督の経営的手腕と云ひ、応援団の統制振り」という類の問題だった。監生部に代わる生徒課との軋轢は解消されているようである。

このときは新築まもない大講堂で開催されるが、それ以前は図書館、屋内体操場が会場だった。六つのおし物があり、六時に開幕して、閉幕は一時を過ぎた。観客は女性が多かった。中国語劇では学生のオリジナルな脚本が用いられることもあった。

二九年の公演後、新聞研究会は「外語批評会」を開いている。ここでは主に財政面での困難が問題となつたほか、劇については次のような批評が交わされている（『緑丘』第三七号、二九年二月一九日）。

丸山 臨教のなどはもつとも軽快で、学生劇としてもふさわしいし、人員も頃合で、練習なども理想的に出来た事と考へる。

浜林（教） あの脚本は僕が見付けたんだが、実際学生劇に相応しい脚本を見付ける事は一寸六ヶ敷い。

小泉 要するに一般によく知られた物をやるのではなくては、余り効果を収めることは出来ないね。

松尾（教） それも問題でね。英語などはよく知られたものがあるが、仏語などは白野弁十郎位シラウドベルジュラックはよいが、外に一般的なものがないからね。例ばモリエールなどをやつたところで、それ程ピンと来ないよ。

間宮 露西亜語はどうもまづかつたですね。露西亜にはもつとよい脚本が沢山ある筈ですがね。

宮崎 あれは生徒の罪ではないですよ。

小泉 今年は又ダンスばかり沢山あつて困りものでしたね。

丸山 英語のはあれはどうしても必要があつたんで、脚本にはもつと長くやる様になつて居ただけでも、あれだけ短くしたんですよ。

水垣 ダンスは出来る丈やらない方がよい。

丸山 女の多いのも感心できない。バツクや舞台装置のときも何も出来ないから。

松尾 全くそうだね。

浜林 なかなか却々面白い議論だね。昔はダンスや女に就ては学校の方から消極的に出て居たが、今では学生の方が消極的になるんだね。

三四年ころから軽佻浮薄の気分を醸成するとして、文部省の指示により、新たに外国語劇をおこなう学校は認められなくなつた。そうしたなかで、小樽高商は横浜高商・東京高等師範などともに伝統的行事として実施され、女装も認められていた。

一九二一年の赴任以来、熱心に英語劇の指導にあたつていた小林象三は、「高商英語劇を廻想して」をまとめている〔緑丘〕第八四号、三四年二月三日。小林は「一、二度外語劇に関係してみると、だれでもすぐ気付くことは、観て面白いもの、いはゆる芝居じみたものを上演しないと、観客に興味なく、また演ずる俳優諸君ものたらなくみえることである」という。そのうえで、英語劇は「言葉を第一の問題」とするゆえに、「学生諸君は英米人のほんものの芝居をみられないにしても、英米のトーキを必ず毎週見ることによつて、生きた語学の研究に努力してほしい」と希望を述べる。



松本栄司

『松本栄司遺稿集』から

小樽の商家に生まれた松本栄司は、病弱のために小学校時代から伊豆に転地し、同地の葦山中学校を卒業後、一九三一（昭和六）年に小樽高商に入学し、三四年の卒業後は家業に従事した。しかし、三六年一月、まだ二四歳という若さで病魔にたおれた。この「生来の頭脳明哲に加へ、而かも異常なる克己力学を以てし、其の知識の広汎なる、若冠にして哲学に、文学に、社会科学に各思想分野において一見識を備へ、将来を嘱目せられつ、あつた」（著者略伝）と評される松本が残した論文・詩・日記などをもとに、一周忌を期して、ゼミの指導教授であつた南亮三郎と友人らの尽力で、「人間批評及び世界観」「わが詩・わが生涯」と題する二冊の『遺稿集』（叢文閣、一九三七年刊）が編まれた。その「日記」から松本にとつての高商時代をうかがおう。

「大経済学者に大実業家、そして美しい社会建設をもくろむ」という「空想に近い理想」（一九三二年八月一三日付）をもつて小樽高商に入学した松本は、まもなく授業にも教員にも友人にも失望し、夏休み明けには「学校教育に見切りをつけ」、「実社会こそ俺にとつて真の大学である。学問は好きだ。だからこそ独学で仕上げて見せる」（同九月一〇日付）と決意を固める。それでも、「徒らに学校制度を罵倒し、成績に超越せるが如き態度を取りながら、やはり悪い成績をとれば焦慮し、腹を立て、理想を描き計画を立てつ、も、唯々それを為す事に依つて自己の心を欺くのみ」（三三年二月二日付）という煩悶と鬱屈した日をすごす。

学校をつづけると思い直すと、「内在的自己の革新」「内在的自己の飛躍」を誓う。その一步が、産業調査懸賞論文に応募し、二等（一等なし）に選ばれた「北海道産業に対する重要港湾の地位」の執筆である（『遺稿集』第一巻所収）。四度の書き直しを経て、「自分の論文を読むのが嫌だ、辛い。それは読む度に自分の無智と誤魔化しが、一杯に出てくるからだ」（三三年二月六日付）。どこ

までも自らにきびしいが、一方で「自分の生れて始めての労作」であり、「仮へ賞に入れなくとも自分にとつては一つの著しい記念」（同年二月二十四日付）と自負もする。

三年生ではゼミの卒業論文として『反デューリング論』第三編「社会主義編の研究」という大作を完成させ（『社会思想史』と題して『遺稿集』第一巻に所収）、北海道経済事情調査会・高商文芸研究会・編纂部に所属して活動をおこない、応援団長選挙では応援演説に立ち、また野外演習では中隊長役を務めることもあった。日常は図書館にこもって読書に熱中することが多く、その勤勉ぶりはたびたび喘息の発作をもたらしした。三三年一月二日の「日記」には、進学を断念しながらも、「それは学問を止めた事を意味しない。寧ろ反つて今より自由な、烈しい勉強が今後の私には必要なのである。勉強！ 研究！ 理論的な、実証的な調査研究。そのために、その理論付けの為に、哲学と歴史と地理と経済学とが、そして、語学！ 語学！」と決意を書きとめる。

卒業した三四年の暮、松本は次のような辛辣な「学校生活への回顧」を記す。

中学を終へ、高商に入学するまで、私はどんなに上級学校での勉強に憧れてゐた事だらう。そこで必ずや、専門的な、より深遠な知識を学び得るものと信じてゐたから。然しその期待は完全に裏切られた。学校とは、速記術練習所であり、価値のないノートの数冊と長い時間及び多くの貨幣との交換所であり、人間機械の大量生産所であり、青白くいぢけ切つた、そして不平と憂鬱と鈍感と猥雑以外の何物でもない若者の養育所である事が、徐々に判り始めたのである。或る一人の教授は公然と云つた。「平凡な人間を作ると云ふ事に学校教育の価値があるではありませんか」と。

入学した時、私は教授達の講義をどんなに好奇心と感心さを以て聞いた事であらう。だが然し、学校生活に慣れるにつれて、彼等に熱情的なる言葉の一つも、理想の探究への純真な、恐れる所なき態度の一片もない事

が判り出し、彼等の講義の或物は、要するに糊と鉄とに依つて作られ、古本屋に列べられた古本の活字よりも劣る事に気付いた。二年になつてその失望は更に大きくなつた。三年になつては、商品化したノートへの嫌悪は、教授達への憎悪となり、それは反比例的に社会科学への憧憬を刺戟して、講義の時間をサボリ図書館に逃れる時が益々烈しくなつて行つた。同時に文学、経済学、哲学に関連せる種々の公的、私的グループに加入し、或は設立して、その中での理論活動に心を奪はれてゐたのである。それは又、私の読書研究を一層拍車付けた事、極めて大であつた。

高商の授業・教員への反発は松本にとつて無駄ではなかつた。「それは、其処で私は私の任務を知り得たから。真実への飽くなき探求心は私をして私の生活目的を定めさせたから」である。ここまで克己心に満ちた学生は稀有だが、二冊の『遺稿集』が編集刊行されるほどの大きな存在感をもつていた。南亮三郎は監修者として、「部分的には未完なるこれ等の遺著作をもつてしても、それはなほ永く、人々の魂を揺り動かすに充分なる迫力をたくはへ、必ずや学問思索の好伴侶として新人達に迎へらるゝであらうと期待してゐる」(松本栄司遺稿集の刊行について)と述べている。

### 夭折

一九三五(昭和一〇)年三月二八日の『緑丘』第八六号に、「健康異聞」として「監生部ではかねてより本校学生の病気休学者、虚弱者の著るしい増加傾向を憂慮し、之が防止策につき腐心してゐたが、本年一月より毎月一回学生の体重を測定し、各自の健康状態を自覚させる様勵行してゐる」という記事が載る。また、この記事のなかには軍事教練の米山教官の「諸君の中でも案外病氣、殊に呼吸器病に罹つて居乍ら氣が付かずに居る者が多い……本校

の健康率は他校に比し著るしく劣つてゐる」という談話もある。

管見の限り、こうした健康問題に関する史料はほとんど見当たらないが、前述した二学期制の採用の際、夏休み開始をめぐる時期に関して、「例年七月十日ヨリ二十日ニ至ル間ハ、当地方ニ於テ暑氣最モ烈シキ季節ナルノミナラズ、本校所在地附近ニハ濃霧頻繁ニ發生シ、為之寄宿舍生ニシテ各種ノ病氣ニ冒サル、者連年少ナカラサル」（小樽経済専門学校規則「第三冊」という一文があつた。暑氣や「濃霧」の発生を原因とする寮生の「各種の病氣」とは、結核などを指すだろう。

戦前の高等教育機関にあつて、在学中の発病による休学、退学、あるいは卒業後まもなくの死去などの事例は少なくなかつた。とはいえ、「本校学生の病気休学者、虚弱者の著るしい増加傾向」が憂慮され、「本校の健康率は他校に比し著るしく劣つてゐる」という見方があつたことは、何か特別の理由があつたのだろうか。

『緑丘』紙上には同窓生の訃報やお悔みに対する遺族の礼状がしばしば掲載される。三三年二月三日の『緑丘』第七〇号には、「本会員山下峻三君（昭三）、小井土泉君（昭四）、間島利純君（大九）は昭和七年十二月四日、高野名幸治君（昭七）は同八年一月二日、影井薫君（昭七）は同一月四日、竹原市郎君（昭六）は同一月二十二日、小野貢君（昭四）は同年一月七日、伊藤寛彌君（大八）は昭和七年八月二十九日逝去せられ、誠に痛惜に堪えず」という同窓会本部の訃報が載る。このなかで、高野名の遺族は「卒業之より社会に活動、皆様の御厚志に酬へんと期待せしに、不幸昨年五月より胸の病にかかり、色々看護に手を尽し候へども、天命如何ともなし難く、廿三歳を一期として長逝仕候」（同前）と、その夭折の経緯を知らせている。さらに哀切なのは、在学中の死去であつた。二〇代での夭折は何といつても惜しまれる。

一九三六年二月、まだ二年生であつた福光堅平も肺結核で亡くなつてゐる。三一年三月卒業の和田徹三の実弟で、福光家に養子に入つてゐた。この弟について、和田は「語学の天才で、英語とロシア語の会話能力は抜群であつた。

次にロシア語の専門家になろうとしていたが、辞書も持たずにドストエフスキーを読んでいた。チェホフの未発表短篇を翻訳して発表したこともあった。その上、風刺漫画を描き、地方新聞に連載したり、アメリカの「ライフ」で紹介されたりした才気渾発で早熟な男であった」(『夜の河』『和田徹三全集』第五巻)と回想する。

『緑丘』にも、チェホフ「コントラバス奇譚」(第八六号、三五年三月二八日)などの翻訳や漫画がしばしば掲載されている。三六年三月五日の第九二号では「露語の天才児 忽焉こつえんと長逝」と報じる。また、五月には札幌の丸井今井百貨店で「追悼漫画展」が開かれた。「彼の漫画については、既に北海道漫画界に定評あつたものであり、激烈なる個性は、動やもすれば、全く否定的な風刺精神の極印を捺し勝ちであつたが、彼の社会発展の側からの物の見方はよく人間的な巨大な風刺をもつて全作品を貫いてゐる」(『緑丘』第九三号、三六年五月一〇日)と評された。

## 第五節 変動する社会のなかで

### 社会科学研究会の創設

一九二五（大正一四）年四月、M S S (Marxian Student Society) の名で研究会（読書会）の呼びかけがあった。高橋（のち石田姓）興平は次のように回想する（『小樽高商時代』『いしだゼミの友』三〇、一九八七年）。

高商二年の春になって、私の学問的関心が再びマルクスに向きかけていた矢先、M S S (Marxian Student Society) の名で社会科学研究教程がはり出され、そこにはマルクスの資本論、経済学批判は勿論、英訳の Anti-Duering から、レーニンの帝国主義論 State and Revolution、更にクノーの「マルクス、歴史・社会・国家学説」のドイツ語原本など、十数冊の書名があげられていた。前年の弁論会をきいてから、此の学校に話せる先輩はおらんのか、と思いついた心が、これによってペシヤンコにうちくだされた。指定の日、指定された場所に行ったら、大分年上の先輩が、さしあたり、レーニンの帝国主義論と State and Revolution をテキストとして研究会をやるというのでそれに参加した。研究会の場所は高松勤教授のお宅であった。

高橋のほか、二年生の山本安次郎・手嶋恒二郎・合田正巳らが参加した。「年上の先輩」とは当時二六歳の斉藤磯吉であり、さらに黒田力造や小林多喜二の友人である寺田行雄（いずれも三年生）が加わっていた。「学園内の革新思想の指導的立場にあった」（西野嘉一郎「思い出の記」『緑丘五十年史』所収）高松勤の自宅で週二回開かれ、表向きは「読書会」ないし「マルクス研究会」と称したが、これが実質的には小樽高商における社会科学研究会であった。研究会





大正15年1月13日 小樽高商在学中（中段左から2人目手嶋  
前段左から2人目斉藤敬吉 3人目寺田行雄 4人目黒田力雄の各氏）

『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』

の中核となった斉藤らが高松の下に結集しはじめたのは、二四年中であつたと思われる。先の呼びかけで学内にその姿をあらわすと、急速に研究会は拡大し、「四、五十名」を擁したという（倉田稔『小林多喜二伝』）。二五年には斉藤を代表委員として、各校の社会科学連合会を糾合した東北学生連合会にも加わつたとみられる。斉藤・黒田は学校内で社会科学研究会を立ち上げる一方で、学校外の社会運動にも参加していた形跡がある。

手嶋恒二郎の回想手記にある、「ヒルハーディングの金融資本論とか、ニコライ・レーニンの帝国主義論とか、ヘーゲルやフオイエルバッハの研究とか、タールハイマーの史的唯物論とか、そういうものの研究が、或いは大衆討議の形式で、或いはそれぞれの小さな研究グループの形式で、ともかくも大へん活発に進められていった」（久城壽右衛門編著『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』）という様子が、社研としての活動だつたと推測される。高橋は斉藤の借りていた下宿に移り、個人的にも斉藤の「猛烈な教育」（小樽高商時代）を受け

る。さらに手嶋の回想によれば、「学内に流れていた空気がとなると、どうしてあも桁はずれて、いわゆる「国家主義」的なものからは遠いものであつたのだからか」という。大胆にいえば、高松勤を顧問格とする社会科学研究会を中核としつつ、その外側にも「いわゆる「社会の構成と変革の過程」を追求するための経済学、つまり反資本主義経済学」（『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』）を受容する教員・学生が広範に存在していたということになる。

その一つの例証が、求禪した大山郁夫や櫛田民蔵の学内での公開講義である。「政治と社会と大衆とを結びつけた学問的講演というよりは、どちら

かと言えば政治的啓蒙演説といった調子のものであった」(ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝) 大山と榊田の講演は、学生たちに多大な感銘を与えたと手嶋はいう。二五年五月一〇日(推定)におこなわれた大山の講演は「社会科学の人生価値」と題するもので、「現代学生間に漸次社会科学の研究運動が起つて来た」に始まり、「人類の生めるものは人類に帰せ。特権階級の蹂躪に任す勿れ」という結論に導いたようである(『緑丘』創刊号・第二号に学生の筆記として掲載(二部破損))。

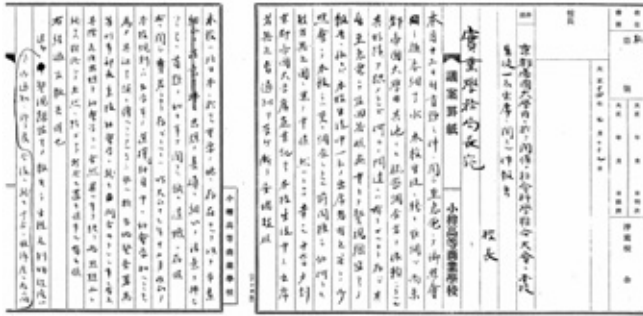
榊田の講演は七月二日と三日、三年生向けに「マルクスの価値論」と題しておこなわれた(『小樽新聞』二五年七月三日)。学校側公認の、もしくは学校側の招聘による講演であり、そうしたことが可能となる雰囲気は軍教事件以前にはあったのである。

#### 学連大会出席問題

このような社会科学研究会の活動について学校側は把握していなかった模様だが、一九二五(大正一四)年に次のような事態が生じていた。

七月一三日、文部省実業学務局長から校長宛に「本月十六日、京都帝国大学内ニ於テ社会科学聯合大会開催ノ為メ、貴校生徒一名代表出席ノ趣ナルモ、右ハ不穩当ト認メラル、ニ付、出席セサル様御措置相成リタシ」という電報が送られてきた(『秘文書綴』一九二五年度 以下、本項はこれによる)。これに驚愕した学校当局は「極力各方面ヲ調査シタルモ、其ノ形跡ヲ認メス、何カノ間違ヒナルベシ」と回答したところ、警視庁から「本校生徒出席スヘキ筈」という通報があり、あらためて調査をおこなったが、「真事実」を見出せなかった。一六日夕刻、京都帝大から「本校生徒ノ出席者無之旨」の通知があり、ひとまずこの問題は落着した(『実業学務局長宛小樽高商校長電報』七月二九日付)。

大原社会問題研究所編『日本労働年鑑』一九二六年版には、この第二回学生連合会全国大会について、「各校代表



学連大会出席問題（「秘文書綴」1925）

出席者八十名。各高等学校、山口、神戸、小樽、高岡、長崎高等商業学校の学生は入場を禁止され」とある。すでに二四年一〇月の全国高校長会議において社会科学研究会解散の方向が打ち出されると、まもなくほとんどが解散を強要されたが、それが各高商にも波及してきたのである。

七月二七日付の実業学務局長宛の小樽高商校長の電報には、「本校ハ北日本ニ於ケル重要ノ地ニ存在スルヲ以テ、平素思想ノ善導ニ細心ノ注意ヲ払ヒツ、アルニ、首題ノ如キ事ヲ聞クハ誠ニ遺憾ニ存候」とある。「北日本ニ於ケル重要ノ地」とは、北海道各地、樺太・千島列島、さらにシベリアに向けて経済・交通の要衝となっていた小樽という地勢上の重要性、そして北海道における人文・社会科学系高等教育機関という自負だろう。それを十分に自覚し、「平素思想ノ善導ニ細心ノ注意ヲ払ヒツ、ア」つたというが、その「思想ノ善導」の具体的な内容は不明である。

この事件の惹起を受けて学校当局では「若シヤト存ゼラル」こととして、二四年一二月の学則改正によって選択科目中に加えられた「社会学」が、「誤り伝ヘラレタルモノニハ非ルヤ」と推測を加える。当時、これについては地元の小樽警察署「高等刑事部長」から問合せもあり、「危険思想ト社会学トハ全然異ル事」を説明し、さらに「思想上ニ就テハ聯絡シテ、未然ニ防ガント打合せ」もしたという。かつて、初期社会主義運動の草創期、「社会学」が「社会主義」と混同されたことが想起されるが、一九二〇年代にあってもこうした誤解が存在し、「社会主義」||「危険思想」に対して過敏に反応したのである。この二五年七月の時点ではまだ校内の社会科学研究会の存在をつかんでいないとはいえず、

その動静について警戒を強め、情報収集に乗りだしつつあったことは確かであろう。

### 軍教事件の惹起

一九二五（大正一四）年一〇月一五日、小樽高商の全学年の参加する軍事教練の一つとして野外演習がおこなわれる当日の『小樽新聞』朝刊二面・三面の欄外に、「高商野外演習」の記事が載った。「高商では今十五日、全校生の野外演習を朝里川水源地付近に於て催す事となつたが、午前九時校門を出発し、主に地図の研究と伝令の演習を為す筈である」として、「当日の想定」が示された。その二には「無政府主義者は〇〇〇〇を煽動し、此機に於て札幌市及小樽市を全滅せしめんと」とあった。これが『小樽新聞』に掲載された経緯について、後日『緑丘』第六号（二五年二月一七日）は、「十月十四日、本校服務陸軍歩兵少佐鈴木教官は其の立案せる想定を教務部主事教授村瀬教授に示し、其の承認を求め、後之を謄写版印刷に付せり、当時偶小樽新聞記者学校に居合せ、翌日執行の教練に關し尋ぬる処ありたるを以て、教務部主事は想定文中「不逞鮮人」の四字を「〇〇〇〇」として其の一葉を交付せり」と報じている。教務部主事村瀬玄は「簿記」・「商業実践」を担当しており、留学から帰国してまもなくだった。「不逞鮮人」を伏せ字とする措置をとりつつも、小樽新聞記者も含め、想定自体を不穩当とする意識はもっていないなかった。このとき伴房次郎校長は東京に出張中であり、想定文を目にしていけない公算が強い。

鈴木少佐が立案し、一五日朝、集合した学生たちに配布（各クラス五枚ずつ）した「想定」は、まず天狗嶽（天狗山）を中心とする大地震により、小樽・札幌市内の家屋は倒壊し、折からの西風で火災が勢いを増し、「今や小樽市民は人心恟々（きようきよう）として、適従する所を知らず」という状況が示され、ついで問題の部分となる（『緑丘』第六号掲載のものによる）。

二、無政府主義者団は不逞鮮人を煽動し、此機に於て札幌及小樽を全滅せしめんと小樽公園に於て画策しつゝ、あるを知りたる小樽在郷軍人団は、忽ち奮起して之と格闘の後東方に撃退せしも、敵は潮見台高地の天嶮に抛り頑強に抵抗し、肉飛び骨砕け、鮮血満山の紅葉と化せしも獅子奮迅一步も退かず、為に在郷軍人団の追撃は一時頓挫するの止む無きに至れり

そこで、小樽高商生徒隊の出動となり、「其任務は在郷軍人団と協力し、敵を殲滅するにあり」とされる。いうまでもなく大地震による都市の壊滅状態と「人心恟々」、無政府主義者・「不逞鮮人」による破壊行動という想定は、二三年九月の関東大震災時の被災状況および官憲・一般民衆の無政府主義者・「不逞鮮人」への根柢なき警戒と迫害を下敷きとしている。

学生たちは、また教員も、当日、この想定にもとづく野外演習に何ら反応しなかった。授業の一部となった「軍事教練」そのものにも学生らの受講態度が真剣で熱心なものでなかったことは、「正服、和服、正帽、カンカン帽又は無帽、靴に下駄という具合に、全く色とりどりの格好で教練を受けた」（中村太郎「緑丘を遙かに偲んで」『緑丘五十年史』所収）という学生の服装ぶりが物語る。

まだ戦時という緊迫感のない段階では、平板で退屈な教室の授業から解放される野外演習に学生らは「悦んで」参加した。小樽高商軍教事件の発端となる秋の野外演習も例外ではなかった。「たまたま全校生のレクリエーションに代えて小樽郊外にピクニックに出かける事があった。単なる遠足では名分が立たないと思われたか、演習ということになった」（大塚武雄「緑丘」新聞創刊のころ）同前、「クラス内でも私共のグループは演習の想定なぞはどうでもよい。秋晴れの一日をニガ手の教授から解放されて野山をかけ廻れるのだから、小学生の遠足くらいの楽しみはある。：一日中のんびりした演習を終り、夕闇迫るころかがり火を燃し、飯盒炊爨に楽しい一時を過して解散したのであつ

た」(大和田正彦「軍教事件の思い出」という二つの証言は、配属将校の意図・想定とは異なった学生側のノートンキさを率直に語ったものである。師範学校や中学校においては教材配置や野外演習なども厳格におこなわれたはずだが、高校・専門学校や大学では、まだしばらくの間、こうしたルーズさが許されていた。配属将校や学校当局が軍教反対の動きを警戒し、厳格な運用を抑制しないし遠慮したことが大きな要因だろう。

『緑丘』は二月一七日発行の第六号に至って初めて「天下の視聴を聚めた 軍教想定問題の真相」を報じるが、「当日は軍用地図見方の実際演習が主たる目的で、全校生は銃は勿論、佩剣はいけんもせず、唯小樽近辺の地図を携帯したのであります。秩序だった遠足と云ふ形」という状況はその通りであろう。

この想定さだめの「不穏不公正」は際立っていたとはいえ、唯一突出したのもといえなさそうである。一〇月二八日に山形県鶴岡中学で実施された「発火演習」の想定は、「我国内は今や大乱に次ぐに大乱起り、我庄内近傍袖浦(日本海岸の一漁村)方面にも社会主義の一団が突如ほつ興し、南下しつゝ、あり」というものだった(『東京朝日新聞』一〇月三日)。小樽高商軍教事件後はその教訓を踏まえて突飛な想定は避けられるようになるが、まだ「軍事教練」実施第一年目においてはこうした「不穏不公正」な想定が出現する余地はあったのである。

### 想定への抗議

野外演習自体は一〇月一五日午後二時に終了し、学生たちは帰宅した。おそらくその夜になって、演習に参加した社研のメンバーが下宿に持ち帰った「想定」の印刷物を、訪ねてきた政治研究会小樽支部代表・小樽総同盟組合執行委員長の境一雄が目にして、その不当性を問題にし、ここに事件が惹起した。演習を欠席していたリーダーの斉藤磯吉も、この場に居合わせ、事件の重要性を認識した。

学校側が作成した「経緯」(『緑丘』第六号所収)によると、「十六日午前九時頃、政治研究会小樽支部代表、小樽総労

働組合執行委員<sup>マ</sup>境一雄、小樽在住朝鮮人金龍植外数名は、校長出張不在中なるを以て首席教授中村和之雄を其の宅に訪ひ、前日実施せる野外教練を以て不穩当不公正なりと爲し、之に対する学校当局の声明書を要求せり」と抗議行動の第一歩が踏み出された。この一六日には「小樽総労働組合 小樽在住鮮人一同 政治研究会小樽支部 小樽無産青年同盟 政治研究会札幌支部 北潮時報社」の連名で「抗議声明書」も発表された。「明白に「不逞鮮人」と云ふが如き文字を使用し、其の演習の直接的対抗者、或は仮想敵を以てするに朝鮮人とするが如きは、此れ、重大なる社会問題たると同時に人種的問題である」と追るとともに、「明白に、軍事教育による学校の軍隊化、軍備化にして、教育上の一大問題」と批判する。ついで、次のように想定の急所を突く。

他方、異人種間に在りて一片のパンを求め苦しみつ、ある、幾千幾万の、吾等の兄弟たる朝鮮人に対し、<sup>マ</sup>稍もすれば「不逞」の名を冠し、悪宣伝を以てし、白日の下にその「殲滅格闘」の実習を教育機関たる学校が之を行ふに至つては、社会上、ゆるすべからざる所の罪悪である

学校当局にとつて、一六日朝の境・金らの訪問と抗議は唐突な予想外なものであった。中村和之雄は即答を避け、「翌日午前十時」の会見を約束した。校長不在のなか、その夜、中村首席教授・村瀬玄教務部主事・鈴木少佐ほか数名の職員が協議し、「十月十五日本校の実施したる野外教練想定中誤解を招致する虞ある語句を使用したるは、教育上遺憾とす」という内容を口頭で答えると決める。翌一七日午前一〇時、境ら「十数名」の抗議団は先の「抗議声明書」を手渡して、文書による回答と校長との会見を求めた。急遽一九日に帰校した伴校長は、一連の事態の説明を受けたあと、対策の練り直しを図つたとみられる。

新聞が報道するのはやや遅く、一九日の『北海タイムス』が初めてである。「不穩当なる想定に各団体育起 小樽

高商の野外演習に軍事教官の発したる」という見出しで、「想定」の一部が引用される。この報道を契機に小樽高商軍教事件が全国的に知られることになった（『小樽新聞』の最初の報道は一〇月二七日付）。翌二〇日には「札幌発」として『東京日日新聞』が、また「小樽発」として『読売新聞』がほぼ同内容を報じることになる。

二一日の午前、代表者八名と伴校長の会見がおこなわれた。校長は「野外教練の想定中には無用の語を羅列し、聊か思慮を欠きたるを憾みとする旨」（経緯）を述べたものの、抗議団の求める声明書の公表はあくまでも拒否した。抗議団の二三日付の「抗議質問書」によれば、校長は「軍事教育の目的は団体教練に在り」と述べており、想定そのものを「不穏不公正」とは認めなかった。伴校長は「不逞鮮人」という「一句の使用にのみ不穏不公正を認むる」としたのに対して、抗議団側は「一觀念一字句に対して抗議するに非ずして、全想定に対して不公正と主張するもの」であった。

事件の惹起直後の段階では学校内にも別の動きが存在していた。一七日の抗議で中村首席教授らは「全想定の不穏不公正なること」を認め、「社会の疑惑を招き、朝鮮人に不安の感を与へ、其の激怒を誘発せしめたることに就き、其の責を負ふ」という言質をあたえていた可能性が高い。それは猛烈な抗議に押されてという側面だけでなく、校内に存在する本格的な「軍事教練」実施に対する批判的な見解を背景にしていたのではないか。これに関しては、二三日の『北海タイムス』が興味深い記事を載せている。「学校側に於て本問題の発生するや、非常な狼狽をなし、廿一日緊急教授会を催し、本問題の前後策について協議を行」ったというのである。

端なくも論議沸騰を見るに至つた抑々該想定を決定するに先立ち、多数教授は不逞鮮人及び無政府主義等の文字を挿入するは不穏当なるを以て撤回を主張せも、之に対し一部少壮教授連は仮想なるが故に何等不穏ならずとして反対し、之を作製配布したのが斯る問題惹起の因をなした



やや時間経過が混乱しているが、当初、おおよそ「多教教授」が「想定」そのものの撤回を求める一方で、「少壮教授連」はそれに反対し、文書として「作製配布」したことが拙かったという立場をとったようである。この前後の小樽高商の教員のポジションとして、前者の代表格は南亮三郎と手塚寿郎、後者の代表格は苦米地英俊・ト部岩太郎であろう。高松勤は、もちろん前者だが、社会科学研究会の後ろ盾ということもあり、あまり表だつた発言はしなかつたのではあるまいか。

この記事は最後に「本問題の責任上、或は一、二教授の辞職を見るに至るやも測り難い形勢に在る」と観測している。当初の時点で学校内に「全想定の不穏不公正」について肯定する意見があつたこと、そして「多教教授」「対「少壮教授連」という対立があり、「一、二教授の辞職」も取沙汰されたことは確かであろう。

ところが、二五日付の『北海タイムス』は学校内の意向の急展開を報じる。まず、「同想定発表に際しては教授の殆ど全部は予り知らず、新聞に発表されて始めて内容を知つた様な」状況だが、「一般にその不穏当と非常識を認め、殊に少壮教授間には不評判を招いて居る」という。ここで、「少壮教授」の使い方は二三日付記事と逆転している。二三日付が「少教教授」的な意味合いだったが、二五日付では文字通りの若手教授というニュアンスだろう。

しかし、これらの若手の「少壮教授」も「この事に関して多く語るを欲せず、軍事教育の可否等の根本問題に触れては宜しく察す可し的な態度を取つて居る」とする（それを「経済学、社会問題等を専攻して人々だけに無理のない事」と皮肉るが、ここに南亮三郎が含まれていることは間違いない）。すでに二二日の抗議団との会見で件校長のとつた強硬姿勢は学校内では知られていたはずであり、同日の緊急教授会でも校長の意向表明や指示があつたことが考えられる。校長の対応に公然と反する言動はとれなくなり、新聞記者らに対しても口が重くなつてきたのである。この「少壮教授」の腰砕けの態度は、手嶋恒二郎が後年の回想のなかで語る思い——「当時の小樽高商には、

殊のほかは数多くの自らリベラリストをもつて任ずる教官がおったというわけであるが、あの事件の処分に関連して示したその態度というものは、どれもこれも、つまり似而非にひなるという形容詞をつけなければならぬ体のものであった」(『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』——と照応する)。

二五日付の『北海タイムス』記事は、さらに三つのことも報じている。一つは鈴木少佐に関する動静で、「同問題を大した意に介する模様なく、平常通り授業を続けて居」り、陸軍当局や第七師団からも「未だ何等の通知に接しない由」という。また、教務部主事の村瀬玄の「教務主任マとしての責任は負ふ」という発言や、中村首席教授の「今回の問題発生に対し、学校当局の不注意を遺憾とし、各方面より来る抗議に対しては学校として答ふ可き筋の者は出来得る限り弁明をなす方針である」という、伴校長に比べて柔軟な発言を載せる。一三日付の「一、二教授の辞職」とは、おそらく村瀬と中村を想定していたことがわかる。しかし、学校側としては、また文部省としても、「二教授の辞職」は「想定の不穩不公正」を認めることにつながるため、容認できるものではなかった。村瀬は翌二六年四月に東京商大に転任するが、この「教務主任としての責任」との関係は不明である。一〇年後、伴校長の交代に際し、中村は首席教授であったにもかかわらず勇退を迫られ、新校長に苦米地が就任することになるが、その遠因の一つにこの軍教事件が関わっていることも考えられる。

もう一つは、学生の動静に関する観測で、「校内学生の間問題に対する態度は至極穩健であり、渦中に入る様な形跡の何等認められない」という。それは、野外演習が実質的に「郊外遠足」だったためであり、鈴木少佐も「学生間に非常に好感」を与えているためである。二五日段階では社研学生が動き始めてはいたものの、一般学生はまだ平静だったと推測される。「経緯」でも結びの部分で「本事件発生後、学校職員及生徒間に何等動揺の形跡を認めず」とするが、半分は実態を隠し、半分は当たっているといえる。

伴校長が「軍事教育の目的は団体教練に在り」として抗議を受けつけけない強硬姿勢をとり、学校内の異論を封殺

したのは、社会的に大きな議論を呼んでいた「軍事教練」の本格的な開始まもなくの時点で、反対運動を活気づけるような謝罪や譲歩をするわけにはいかない、という決意だった。それは文部省の指示を待たずともない判断と対応であった。当然ながら文部省からの懲憚もあつたはずで、後述するような学生社会科学連合会の抗議を受けて、文部省は小樽高商に「真相の報告」を求めてきた。これに対して小樽高商では二二日の抗議団との交渉までの経過をまとめ、文部省に報告している（二九日付の『北海タイムス』に掲載されるほか、後日、『緑丘』第六号にも「経緯」と題して掲載される）。

### 社研の抗議運動と「穏健派」学生

社会科学研究会では学校当局の対応ぶりを注視しつつ、その強硬姿勢がはつきりすると、責任追及の行動に踏み出した。一〇月二九日、学生有志が伴校長に会見して反省を迫るとともに、「決議書」と「要求書」を手渡し、翌三〇日には「檄」を配布するが（新聞社にもこれらの文書を積極的に提供して、世論の喚起を図った）、そうした文書の起草・印刷の作業は数日前から開始されていただろう。二九日の抗議の人数は『北海タイムス』（二〇月三二日）では「各学級学生代表二十数名」、「小樽新聞」（二一月三日）では「十名」とくいちがっているが、これらには学生の署名があつた。「要求書」は次のような内容である（以上、『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』）。

#### 要求書

- (一) 吾等八関東大震災当時ノ自警団及憲兵隊ノ狂態ヲ真似タルガ如キ軍事教育野外演習想定ヲ以テ「緑ヶ丘」ノ人道ト正義ヲ汚辱シタル学校当局ガ潔ク、ソノ責任ヲ明ラカニセラレンコトヲ要求ス
- (二) 吾等ハ学校当局ガアラルル手段ヲ尽シテ該想定ノ不穩ナル所以ヲ学生全体ニ明示シ、学生ヲシテ徹底的

伴校長殿

二其ノ非ヲ悟ラシムルコトヲ要求ス、曖昧模糊ニ葬リ去ラントスルガ如キ態度ニ反対スル  
(三) 吾等ハ、今回ノ如キ日本国民ヲ仮想敵トスル軍事教育ヲ今後絶対ニ施サル、コトナキヲ要求ス

大正十四年十月二十九日

小樽高商学生有志



社会科学研究会「檄」

これらの起草にあたったのは社研メンバーのうち黒田力造と手嶋恒二郎  
らで、「それにみんなの知恵を加えて出来上がった」。「要求書」の「曖昧模  
糊ニ葬リ去ラントスルガ如キ態度ニ反対スル」の部分は、斉藤磯吉らの主  
張によって挿入されたものという(『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』)。新聞報道に  
よれば、伴校長は「中村教頭と交々時期が総てを解決すべしと応答」(『北海  
タイムス』一〇月三日)したほか、「学生としてとる可からざる行動であると訓  
戒」(『小樽新聞』一一月三日)したという。

一〇月二八日午後の学校との応酬を区切りに、小樽総労働組合などが市  
民に向けた軍教反対運動に転じる一方で、学校内での反対運動の主役は社  
会科学研究会に代わった。二九日、伴校長との会見でにべもなく一蹴され  
ると、社研は「檄」の配布を断行する。「小樽高商学生有志」の名で活字印  
刷された「檄」は、三〇日に「学生の帰校の折散布」(『小樽新聞』一一月三日)  
され、また三一日の「新設グラウンド竣工記念祝賀大運動会」(会場は小樽

公園グラウンド)の際にも配られた。同時に学生社会科学連合会や各大学・高校などの社会科学研究会に郵送された。三十一日の『北海タイムス』は全文を掲載する。高橋興平によれば起草者は黒田力造である(「小樽高商時代」『いしだゼミの友』三〇)。「軍事教育に關し 無批判の看過は良心的不具者たることを強調し 全国の学生諸君に檄す!」という見出しについて、次のように呼びかけるのである。

諸君、諸君は之れに盲従するか?

否! 否! 吾々はお互にかかる軍事教育を受けることの如何に良心に忍びざるところであり、如何に吾々の心を憤激せしめ、之と徹底的に抗争し闘撃することを誓はしめたか、を知つてゐる。吾々はお互の熱愛する学園に、自由と正義が吐血して倒れてゐるのを見て尚、起たざる程のお上品な偽善者ではないことを知つてゐる。そして吾々の胸から胸へ流れる血汐が、吾々に何を叫ぶべきかを教へる。

軍事教育を倒せ!

無批判の看過は良心的不具者たることを意味する。

全国の学生諸君、内部から軍教に対する積極的反対運動を起せ!

「檄」配布後の高商社研の学内での動きについてみると、事件沈静化のための「穩健派」学生の攻勢や、学校当局からの事情聴取などの圧迫によって守勢に回つた。一方で、学連や大学・高校の各社研から「激励の電報が寄せられ、また本校の社会科学研究会の中心メンバーであった斉藤磯吉氏が上京してこの連合会の会議に出席するなど「の動き」(『緑丘五十年史』)があつた。一〇月二十九日に文部省に押しかけた学連の抗議団のなかには北海道の代表も含まれていたが、あるいはここに斉藤が加わっていたかもしれない。

一〇月三十一日の『北海タイムス』によれば、抗議団の質問に対する学校当局の回答を「曖昧不徹底」として、「各学級通じて学生達は此の学校当局の態度を非難し、猛然として内部より積極的に反対運動を起すに至」ったという。さらに、十一月三日の同紙は「母校のために学生連起つ 校内は蜂の巣の様」と題して、「愛校精神の発露と母校の対面<sup>マ</sup>のために再三学校当局の反省を求め」る学生と、「軍事想定は何等不穩なるものに非ず、正当事なりとて反対の叫びを挙げ」る「二年生の一部」の学生とが対立し、「両者間の睨み合から或は直接行動に出んとする不穩なる情勢」であると報じる。

一方、十一月三日の『小樽新聞』は「大部分穩健派」という見出しで、社研の活動を「煽動的口吻」とみなし、「一般の学生はテンデ耳を藉<sup>か</sup>さざる有様」で、三〇日の「檄」配布に反発した「学校擁護派とも目す可き穩健なる大多数の学生は、彼等の輕挙盲動に憤慨し、之に対抗し、鎮圧す可く寄<sup>よ</sup>々協議中」とする。

この三日の『小樽新聞』と符合するのが、『緑丘』第六号掲載の編纂部の手になる「学生多数声明書に署名し」の文章である。これによれば、配布された社研の「檄」、および『北海タイムス』などで「校内は蜂の巣の様」と報じられたことを受けて、これらを「看過して世人をして徒らに誤信せしむるに忍びず」と判断した学生たちは、二日から三日にかけて「該問題に対しては絶対<sup>絶対</sup>に超然たる態度を持し、冷静これを貫き、穩健着実に学業に精勵し居る事実を声明」する署名をクラスごとに集め、「殆ど全校生挙げてこれに賛同」することになり、その結果を新聞社に伝えて訂正を求めた。先の三日付の『小樽新聞』はこの動きを伝えるものであり、さらに五日付の紙面では「小樽高商生の反動運動 多数の穩健派誤解を闡明<sup>せんめい</sup>す」とする。それによれば、「約二十名程の非難派のみ署名せざる」状況であった。

大和田正彦によれば、「各クラス毎に右派に属する者を数名選び、その人々が学校当局へ諒解を得て密かに」学生大会を開催し、署名を集め、社研を強く非難したという（軍教事件の思い出）。渡辺惣蔵『北海道社会運動史』も、「狼

狼した学校当局は、十一月二日各クラスを動かして学校信任の署名運動を起して学生の切崩しをはじめ」たとする。「穏健派」のなかには、学校当局とつながった動きもあったと思われる。署名をボイコットした大和田の証言は具体的で、社研の寺田・黒田・斉藤が学生大会の壇上に立って「静かに、しかも理路を尽して自分達の行動の間違いのないことを説明した」という。

「穏健派」学生の核の一つとなったのは大平善梧・中野清一・西川正巳・西野嘉一郎らの「弁論部」部員で、「校内の問題は校内で解決すべきだ」という主張からだった（西野「思い出の記」『緑丘五十年史』）。もう一つの核となった編集部（新聞部）の大塚武雄は、「何よりも学園内が決して騒然としていない事だけでも天下に声明する必要がある」という立場で行動したという（大塚「緑丘」新聞創刊のころ）。大和田正彦は「学校には憲兵や刑事が入りし、労働団体の人らしい者も校舎の陰に佇んでいるなど、異常な空気の中に我々は登校していた」（『軍教事件の思い出』）と回想している。

『緑丘』第六号は一面巻頭の「大正十四年を送る」という論説の第三項目に「想定文事件」を取り上げる。社会科学研究会の行動に批判的な編纂部の手になるだけに、「余りに宣伝に奔走し、又實際運動に興味を持ち過ぎたのではあるまいか。自由研究、論究批判の域を脱して、外形的運動に自らの使命を忘れたのではないか」と指摘する。と同時に「公平なる立場」からみて想定は「常識を有する程の者は明かに之が正否を判断し得る」とし、「学生の思想研究を危険視し、之を恐るゝものある」とみることが誤解だとする視点ももっている。これが、大勢となった「穏健派」の見解を代表するものだろう。

#### 高商当局の抑圧措置

事件惹起当初は抗議団に押され気味のところもあった小樽高商当局は、伴校長の帰校とともに強硬姿勢に転じて

「鎧袖一触的態度」で臨んだ。一〇月三〇日・三十一日に社研の「檄」が校内で配布され、全国に発送される事態に、十一月三日、伴校長は全校生に対して「此際各自慎重の態度を持し、軽挙の行動なきを努むべき」〔小樽新聞〕十一月六日）を訓示した。前述の「穏健派」学生の行動の背後には、学校側の誘導や懲憚という動きもあったと思われる。編集部が「伴校長私宅を訪れ、真相の取材とわれわれの執るべき方途とを相談に行った」ところ、「今暫く書くな」と報道差し止めとなった」（大塚『緑丘』新聞創刊のころ）という。

学校当局の鋒先は社会科学研究会に向った。社研メンバーの一人、高橋（石田）は次のように回想する（小樽高商時代）『「しだせ」の友』三〇）。

学校当局は大変ろうばいした。その様子は、高松先生を通してわれわれの耳に入ってくる。やがて主謀者は誰かという事になった。この年の夏頃からであつたらうか、斉藤君は一身上の都合で休学という事になっていた。休学の彼を表面に出す事は出来ない。上級生の黒田君や寺田君、それに私どもが次々と学生部に呼ばれた。学生主事の先生（倫理学の先生）は、斉藤君が扇動したのだらう、とかまをかけてくる。この事はだれも否認した。そして自分たちみんなをやつたので、特別に主謀者などはないと答えた。動機を聞かれるとみんな堂々と、ヒューマニズムの立場から論ずる、またクロポトキンやマルクス主義者の正しさも主張する、といった風である。この倫理の先生も「クロポトキンは経済学におけるマルクスの如き立場にある」という言葉がでるようになった。呼び出された者は、だれも勝利者のように得意になっていた

しかし、事態は急転する。高松から伝わった情報として、「文部省から断乎処分せよ、との通達が来たので犠牲はまぬがれないという。ただ誰をどのように処罰していいか、その軽重に当局が困っている」（高橋『小樽高商時代』とい



う。手嶋によれば、「我々の処分問題が議せられる頃には教授会で我々の立場を支持してくれたのは、ひとり××先生くらいのものであったと思う」（『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』）。この「××先生」とは順当に言えば高松勤だが、社研の顧問格である高松が教授会で擁護的発言をなしたかどうか、やや疑問なしとしない。教授会でもっとも強硬な処分を主張したのが苦米地と卜部であったことは間違いない。

窮地に陥った社研メンバーは、協議のうえ、「みんなそれぞれの事情があるだろうから、処分をうけるものが、志願することにしよう」と決め、高橋によれば「一名が名乗り出たという。高橋・手嶋・山本安次郎らで（『小樽高商時代』、黒田力造も含まれていたはずだが、以前から休学中の斉藤磯吉については不明である（十一月五日の『小樽新聞』には「斉藤外十五名」が無期停学を命ぜられたとある）。学校側が二三日に言い渡した処分者は、新聞の報道によれば、無期停学一四名と譴責一名である。その理由は、「今次の反軍教運動に際し、外部の思想団体と策動し、学生として不謹慎極まる態度に出で、教訓に悖る」（『北海タイムス』十一月四日）というものであった。『緑丘』第六号の編纂部の説明では、「檄」に「羅列されたる矯激なる語句と態度の穩健を欠きたる事等が嚴乎たる校則に触れ」たためとする。校則第二七条が適用された。なお、文部省学生部『学生思想運動の沿革』（一九三三年三月）には無期停学一六名とある。

手嶋は「我々がひとかたまりになって、あの校長室で時の校長伴さんから宣告をうけた日は、北海道のことだからもう雪も大部に積っていた寒い日の夕暮だった」（『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』）と描写する。停学は自宅謹慎であり、「宣告あると同時に学校の措置を怨みつ、同夜急行にて多くの同級生に見送られ、其れ其れ柵を纏めて帰郷の途に着き、同夜の停車場は時ならぬ悲壮なシーンを展開した」という。これを報じた十一月四日の『北海タイムス』は、学校の措置を「余りに残酷」とし、「停学生に多少の非難あるにしても、吾には個人的に非常に同情を寄せている」という同級生の声を載せている。高橋も「停学組は一緒に小樽を去り、連絡船でも一緒だった。みんな一緒の

ときは凱旋將軍のように意気が昂揚する。しかし、独りになるとさすがにさびしく、泣けてくる。こっそり歎異抄を出して読む。なにかしらジーンと胸にこたえてくる」(「小樽高商時代」と回想する。

この強硬な処分について、学生の同情が集まるほか(それ以上の具体的な救援活動はなかったが)、外部からの抗議もあいついだ。戦後の『緑丘』(第二〇九号、一九四九年二月一〇日付 渡辺『北海道社会運動史』より重引)は、「札幌の労働者団体はいきりたった。鈴木源重、木田茂晴氏等は直接に学校に刺を通じてその取消し方を要望してきた。市井では処分反対市民演説会まで開かれようとしていた」と記している。しかし、学校当局はそれらを一切無視した。

この措置について、一月一五日の『小樽新聞』が報じるころでは、文部省の武部欽一実業学務局長は「停学問題は初耳だ、何もこちらで命令した訳でない、悪い学生が停学を食ふのは当然の事だ」と語ったという。だが、それは信じがたい。それを推測させるのは、伴校長のこの間の動向である。一月一日付で文部省に「校長上京ノ義ニ付稟請」をおこなっている。一九日から一二日間の予定で、用件は「去ル十月十五日挙行ノ野外演習想定問題ニ関シ報告ノ為メ」であった(稟請書の草案では「報告」のところが「陳情」となっていた)。この稟請前の段階で学校側は社研メンバーに対する処分内容を固めていたと推測され、それを教授会で決定し、学生たちに宣告した後、文部省に「報告」を持参する、という手筈を整えていたのだろう。文部省からは、処分宣告後の一七日付で許可が出され(以上、「秘書書綴」一九二五年度、伴校長は予定通りに文部省に「報告」に出向いたはずである。処分の決定前に文部省と緊密な連絡をとっていたとみるべきだろう。

処分宣告の約一か月後となる二月一八日の教授会で「改悛の情著しきものあり」(「小樽新聞」二五年二月一九日)と判断して、黒田ら一四名の停学処分が解除された。なお、「今学校から問い合せのざんげ状を書いているんだ。思わずブツと吹き出したくなるほどの真面目くさった、しほらしい文章だ、これから清書しようというんだが、まあ一服」(ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝)という手嶋宛の黒田力造書簡にあるように、学校側は停学解除の条件として

「改悛の情」を計る反省文の提出を義務づけたようだ。それでも黒田は「ごんげ状」を書くかたわら、「インターナショナルの歴史」を学習するように、「改悛の情」は偽装にすぎず、軍教反対の運動を展開したことに後悔の念は持っていない。手嶋も事件から五〇年を経て、なお「今日にいたっても、この私はその処分妥当性について、これを認める気持には到底なり得ない」「学校当局の責任者の、甚だしい早とちりというものであった」（同前）と書く。

また、手嶋の回想によれば、「この謹慎中、我々の指導者であった斉藤磯吉氏は、首謀者と目されて有無を言わず放校になってしまった」。高橋は「あとで彼は、高松先生や南先生と相談の上、自発的に退学した」（『小樽高商時代』「いしだゼミの友」）と書く。中央の学生社会科学連合会の会議に小樽高商社研を代表して出席したことなどが、停学処分以上にきびしい退学処分となった理由だろうか。

#### 軍教事件の収束

『緑丘』第八号（二六年三月五日）のコラムに、「高松教授辞任の噂さがある、吾々は、学生間にあれ程の人望と敬愛とを享けて居る同教授が、今更学生を捨て、去らるゝ事を信じ得ない、単なる噂さなることを祈る」という記事が載る。軍教事件の動揺は収束したものの、その余波は社研の顧問格であった高松を襲いつつあることがわかる。高松自身が社研メンバーへの停学・退学処分に責任を感じて身の処し方を考えていただろうし、苦米地らの強硬派による暗黙の責任追及も予測されるところである。

高松への圧迫は次第に強まり、ついに二七年度末での辞職となる（大倉高等商業学校〔現在の東京経済大学〕への転任）。『緑丘』第一三号（二六年二月一日）の「緑丘ゴシップ」には、「予て問題の高松教授の辞職、実現を見る如し。今にして吾人、何をか言はむ、只惜別の情を披瀝する耳のみ。門弟の犠牲者は南洲に終らず。願くば師よ、顕在な

れ」とある。

この高松の辞職と同時期に、鈴木少佐も二年の任期を終えて転任する。ということとは、鈴木への処分は何もなかったことになる。社研関係の学生への停学処分を報じた一月一日の『北海タイムス』は、最後に「此の多くの犠牲者を出した学校当局が、想定立案の責任者に対し如何なる態度に出ざるや」と観測していたが、責任は不問に付されたのである。一月九日付の第七師団宛の「配属将校勤務成績」の「其他考科ニツキ、参考トナルベキ件」は、次のような記述となっている（「秘書書綴」一九二五年度）。

去ル十月十五日挙行ノ野外演習ニ関シ問題ヲ惹起シタルハ遺憾ナレドモ、青少年軍事訓練ニ対シ、反対ノ主義

者ガ為ニセントセシ所ニシテ、鈴木少佐ノ性格成績ヲ云為スベ

キモノニ非ズ

青少年軍事訓練ノ実施上効果ヲ有効タラシメ、将来ノ参考資

料ヲ得タルモノナリト思惟ス

最後の一文は傍線が引かれ、削除されている。ここにも学校当局の「鎧袖一触的態度」は貫徹しており、「青少年軍事訓練」への批判は封殺されている。軍教反対運動は「反対ノ主義者ガ為ニセントセシ所」と一蹴され、「人種的問題」「教育上の一大問題」というような認識を一切拒否している。

したがって、鈴木少佐に対する信頼は厚く、その後の「軍事教練」

四九

北風傳政和存成後通松・市		
第七師団本隊大前隊副宛		
本署四月廿五日會同成後通松・市及通政宛	記	北風傳政和存成後通松・市第七師団本隊大前隊副宛
一、性格、品行	記	北風傳政和存成後通松・市第七師団本隊大前隊副宛
二、教育、訓練	記	北風傳政和存成後通松・市第七師団本隊大前隊副宛
三、待遇、生活	記	北風傳政和存成後通松・市第七師団本隊大前隊副宛
四、その他	記	北風傳政和存成後通松・市第七師団本隊大前隊副宛
北風傳政和存成後通松・市第七師団本隊大前隊副宛		
一九二五年一月九日付		
第七師団本隊大前隊副宛		

配属将校勤務成績（「秘書書綴」1925）

は予定通りに実施される。むしろ「軍事教練」を予定通りに実施することで、反対運動の影響を極力抑えようとする意図があったはずである。通常の教練のほかに、まだ杜研学生への処分も下らない一月一日（五日の予定が、降雪のため延期）、二年・三年生による野外演習が実施された。『緑丘』第五号（五年二月二六日）が報じる「想定は簡単だが 内容の充実した発火演習」という記事中には、「背囊を負ひ、佩剣はいけんしてズラリと校庭に整列して見ると、軍教反対などどこへやら、なかなか棄て難い所がある」という一節がある。「戦の火蓋は切られ、銃声天狗山を震撼し」という訓練が展開されるが、その後の「テント露営と炊餐」こそ学生の楽しみとするところだった。軍教反対運動のさなかではあったが、大半の学生はこれを深刻に捉えていなかったといえよう。一月二五日には一年生の野外演習もおこなわれ、その交戦の状況は「天狗嵐の中に毆おうち々たる砲撃の物凄おそろき」と描写された（『緑丘』第六号）。

そして、翌二六年一月二七日、第七師団による初めての「軍教査閲」が実施された。「一年級各個教練及小隊密集教練、二年級各個教練及部隊教練、三年級各個教練、部隊教練、陣中勤務及筆記作業」という内容で、査閲官の久木村少将は「些少の欠点は有すと雖も、成績頗る良好」と評価した。そのうえで、「本校は曩むかしに想定事件ありて、社会より疑惑の念を抱かれ居るも、今回の査閲成績が其の疑惑を一掃せる」と述べた（『緑丘』第八号）。配属将校の鈴木の勤務成績も満足すべきものとされた。なお、『緑丘』編集部は、この査閲に対して「当局が寛大なる方針に出たる事は策を得たるもの」と歓迎する。それは「徒いならに反対論者の憤怨を新たにする如き峻烈なる手段は、軍教本来の目的遂行上、当然避けられるべきであつた」からである。学校当局も、陸軍当局も、この査閲実施に緊張していたことがわかる。

### 『北方文芸』創刊

『校友会々誌』が文芸作品の不掲載方針に転換したのは、那河捷平や佐々木妙二を中心とする高商の学生文芸研

究会により『北方文芸』が刊行されるようになってからである。一九二六（大正一五）年五月一〇日の『緑丘』第九号は「一気呵成に生誕せる 学生文芸研究会」として、四月二七日、一四名の出席した会員の作品合評会と機関文芸誌『北方文芸』の刊行決定を伝える。まもなく五月末に創刊号が発刊される。第二号（二六年七月）の「余白雑記」では、「北海道に於ける「文芸春秋」であると云つても、敢へて過言でないと思ふ。何せ、大したものだ。換言すれば、此の「北方文芸」は全道は愚か、東北以北に於ける此の種の文芸雑誌を完全にリードしてゐる」と自賛する。『緑丘』第一三号（二六年二月一五日）にも、第三号の「北方文芸発刊近し」として「正に学園の文学的雰囲気代表する権威者の如き觀を呈して居る」とある。

第四号発刊の時点で、文芸研究会は椎名幾三郎（「商業学・商業実践」と高橋益実（「フランス語」）を顧問とし、会員は五〇名以上を擁していた。『北方文芸』は学内にとどまらず、学外に読者・寄稿者を広げていった。『緑丘』第三六号（一九二九年一月二九日）には、「北方文壇の第一線に活躍して巻を重ねる毎に名声を博し、其の地位を確立した」とある。小林多喜二は「田口の「姉との記憶」」（第四号、二七年六月）、「残されるもの」（第五号、二七年一〇月）、「誰かに宛てた記録」（第六号、二八年六月）、「こう変つてゐるのだ。」（評論、第七号、二九年六月）を寄稿する。また、第六号には伊藤整も詩「林檎園の六月」を寄せている。

一九二八年六月三〇日には、小樽新聞社の後援を得て、「北方文芸」主催の文芸講演会が開かれた。東京の文学集団「不同調社」の北海道講演の一つとして、中村武羅夫・野島辰次・間宮茂輔らが登壇している。また、二九年五月、土方与志・丸山定夫・山本安英らの新築地劇団の小樽公演にあたっては、文芸研究会は小樽映画協会とともに「多難なる日本演劇運動の将来の為に、精進努力しつゝ、ある此劇団に対して、諸兄の熱誠なる支持宣伝切望します」（『緑丘』第三号、六月一日）という告知をおこなう。これらに先立ち、二七年五月二〇日、改造社文芸講演会で来樽した芥川龍之介と里見敦の歓迎会を多喜二らが催すが、そこには文芸研究会の学生も出席していた。



『北方文芸』第四号

プロレタリア文学傾斜と廃刊  
『北方文芸』は第四号あたりから、プロレタリア文学に傾斜していく。第四号には多喜二の「社会の「えぐりだし」」（吹雪いた夜の感想）『小樽新聞』、二八年一月三〇日）の実践の試みの一つである「田口の「姉との記憶」」を掲載し、さらに第五号・第六号ではともに多喜二の創作を巻頭に載せる。注目すべきは、第五号の巻末で、一頁を使って「読め!! 「文芸戦線」を読め!」と題し、「北方文芸」の読者であるあらゆる人は、男も女も、そして一人も洩れることなく「文芸戦線」を読まなければならない。これは我々に与へられた歴史的任務ではないか」と呼びかけていることである。その『文芸戦線』（二七年一〇月）には、多喜二のプロレタリア文壇デビュー作というべき「女囚徒」が掲載されていた。

『緑丘』第四二二号（三〇年五月二七日）は「百八十度廻転せる文芸研究会」と題して、「人は明かに本誌より流れ行く時代の色彩を感知し、如何に多くの学生が真摯に完全なる社会意識を把握せんと努めつ、あるかを知ることが出来る」と報じた。『北方文芸』第八号（三〇年五月）がプロレタリア文芸雑誌としての色彩を鮮明にしたのである。「編輯後記」で川島豊秋が「この小冊子の中に盛られ、織込まれてゐる、或る変化（或ひは進歩とも言えよう）、又は、或る動き（或ひは前進とも言えよう）」に言及するように、それは意識的になされた。たとえば、島龍吉の「新興劇団の階級性に就て」はプロレタリア演劇に関する評論で、「あらゆる方面よりプロレタリア劇団は迫害せられるに拘らず、一九三〇年に於てプロレタリア劇団は圧倒的進展をなしてゐる。これはプロレタリアートの進出するかぎり当然なことである」とする。

第一〇号（三〇年一〇月）はさらにその度合いを強めた。やはり川島

の「編輯後記」には次のようにある（第九号は校内配布のみ、未見）。

内容的に私の主観を混へる事は許されないが、全作品を通じて不可避的な或るものが、統一された一個の社会観の段階に於て、力強く蠢うごめいて居る事が感受せられる。文芸思想上の一転化がかくして明確に、そして広汎に展開されて居る事は事実である。時代的な文芸行脚が反ブルヂユアー的傾向を辿る時、それが正しき文芸的努力であるか否かに就いては、私は明答出来ない。

只、事象の観察が飽まで客観的、総合的、社会的になつてゐる事が、『北方文芸本号全作品』を通じて疑ひもなく見受けられる。その他、作品上の速度性が、或る点まで考慮されてゐる事は見逃せない収穫である。

松尾正路「アンドレ・ヂツド」や浜林生之助「異郷の月」などを載せる一方で、島「プロレタリア演劇運動の根本方針」、創作欄の伊藤信一（多喜二の友人）「ゴモの遺族」、谷不羈夫「堆肥の思想」、佐々木正制「彼と彼女」、木坂潤二「工場と母と私」、間宮健三「俺には出来ない」、そして川島豊秋「小さき闘志」などは、「統一された一個の社会観」に貫かれたプロレタリア文学の範疇に入る。川島らの働きかけだけでなく、当時の緑丘にプロレタリア文学への共鳴者がかなり存在していたことが推測される。

しかし、これは「学校文芸」としては許されなかった。『緑丘』第四八号（三〇年二月五日）は、「突如、「北方文芸」廃刊の厳命をうく」という見出しで、学校側が一月一八日、『北方文芸』廃刊と学生文芸研究会の解散を厳命したと報じた。卜部生徒主事談として「階級意識に基く作品の発表は駄目」とあり、第一〇号の内容が問題視された。廃刊を命じた理由は、「一、北方文芸第十号が余りに一方的に過ぎたる事、一、かかる雑誌の存続は学生の訓育上よろしからざる事、一、箇々の作品の検閲に於いては之を容認したるも（うち、二篇は検閲を経ざるものあり）、之を



総合したる場合に一方的に体系づけられたること」という。

文部省学生部『思想調査資料』第一六輯（一九三三年二月）掲載の「プロレタリア文学運動の沿革と現勢」では、一九三〇年ころの状況として「学生・生徒の自発的企図によるプロレタリア文学運動」に言及し、「同人雑誌中の同人が左傾すると共に新たに左傾分子の結成による左傾芸術団体が学内に生れ、それ等が左傾文芸雑誌を刊行するに至つてゐる」と述べ、『大学左派』などととも小樽高商生を中心とする『北方文芸』をあげている（『文部省思想局 思想調査資料集成』第五卷所収）。

なお、官憲側の記録である北海道警察部特高課編『本道ニ於ケル左翼労働運動沿革史』によれば、『北方文芸』の名は登場しないものの、川島豊秋の名は日本赤色救援会の小樽支部の表と『戦旗』配布網の小樽支局学生班の表に二度登場する。この『沿革史』には多喜二や寺田行雄の名も記録されている。川島が多喜二と面識をもっていたことは確実で、その関係を通じての多喜二の『北方文芸』への寄稿があったはずである。推測を逞しゅうすれば、後輩の学生たちへのエールとして、『北方文芸』の数度の寄稿、そして左翼的傾向化に多喜二の積極的な働きかけがあったといえるかもしれない。

前掲『沿革史』には『戦旗』小樽支局の学生班の責任者として、また救援会小樽支部・『第二無産者新聞』小樽支部の配布網のなかに、高商生の間宮健三の名前も登場する。間宮は『緑丘』第三五号と第三六号に「アントン・チエーホフ二十五年紀念」という文章を寄稿しているが、その末尾近くでは「労働能力なき吾人インテリゲンチヤはプロレタリアの「友人」たり得る時はあつても、終にその「同輩」たり得る時はないと私は思ふ」と書きつけている。川島とともに間宮も、多喜二の近くにいた人物である。

## その後の文芸研究会

『北方文芸』の廃刊とともに、文芸研究会の解散も余儀なくされたあと、小樽高商学生の文芸愛好者は短歌、短歌、俳句などの小グループにより小雑誌の刊行を断続的につづけていたが、ようやく一九三二（昭和七）年二月、『北回帰線』という雑誌の発刊に至る。一月二十六日の『緑丘』第六八号は、「廃刊後三年を経過し 文芸研究会雑誌復活す」と報じた。しかし、これは「専ら純文芸に関してあり、創作物禁載の制約をうけて」いた。また、この発刊が短歌会、緑丘吟舎、短歌会などの同人に相談なしでなされたとして、抗議を受ける一幕もあった。三三年一月、小樽高商文芸研究会として正式に発足するが、学校側では「文芸委員会」を設け、研究会責任者の誓約書の提出、原稿の校内関係者限定、外部に販売しないことなど、「文芸研究会の諸種の組織事業に関して限界を与へ」（『緑丘』第七二号、三三年四月三〇日）た。

『北回帰線』は第二号まで発刊されたが、それらの所蔵は確認されていない。三三年二月刊の第二号は、十六夜駿「詩歌に於ける感情把握と其表現過程に関する私見」、田村清美「三十一文字に就ての妄想」、泉信一「西鶴」の作品を透してみた「町人の生活相」の文芸評論三編のほか、「短歌集」、水芭蕉「俳句集」、緑丘歌人「短歌集」という構成だった（『緑丘』第七〇号、三三年二月三日）。

文芸研究会では雑誌発刊とともに、「ナチス焚書事件」に関する座談会を計画したものの、監生部の「注意」で「保留」となる（『緑丘』第七四号、三三年六月二五日）など、活動には制約が多かった。誌名も『北回帰線』から『緑丘文芸』に変更されている。三四年になると、「小説掲載禁止の扼」（同、第八二号、三四年九月二四日）が解かれて、新雑誌の刊行が準備されたが、実際に刊行に至ったのかは確認できない。

三五年四月の独立団体懇談会の場で、文芸研究会の代表は「何時出来たかのかはよく判りませんが、とにかく當時は社会的な風潮として、自由主義やらマルキシズムががんばつてゐて、所謂プロレタリア小説でなくちや文学で

ない時まで云はれてゐたんです、其が漸次フアツシヨに変わり、プロ文学が押へられ、インテリは青白く迷想に陥り、能動精神とか新浪漫主義とかがまあ盛んになつてゐる様です」として、「最近は機関誌はないし、而も借金がある様で、でも今年は何々しつかりした人達がゐますから（笑声）、其点大丈夫です」と述べている。この懇談会では、演劇研究会の学生から「文芸研究会は兎角学校当局から色眼鏡で見られ勝ちで困る、そんな気分は一掃して欲しい」（同、第八七号、三五年五月一五日）という発言も飛び出している。

### 小林多喜二の記憶

文芸研究会のメンバーにとつて、小林多喜二と伊藤整は特別な存在であつた。『北方文芸』のプロレタリア文学への傾斜に多喜二の直接的・間接的な働きかけがあつたらしいことは、すでに指摘した。『北方文芸』第四号の「編輯後記」（島田芳穂）には「創作欄に小林氏の戴けたのは全く嬉しい。同氏をここで紹介するなんて野暮臭いから抜きにする」とあり、第五号・第六号では多喜二の創作を巻頭に載せる。『緑丘』第三六号（一九二九年一月二九日）では、第八号「発刊近し」として「現代文壇の雄小林多喜二氏其他数々の雄編滿載の筈」と報じられた（実際には掲載されず）。

これらに応えるかのように、多喜二自身も『北方文芸』第七号掲載の「こう変つてゐるのだ」で、文芸研究会のメンバーや後輩の高商生に向けて文学論を展開する。かつて高商在学時前後には「漠然と、小説を書くことを「自己完成」のためだ、と考えたことがあつた」が、それから小説のあり方は「「恐ろしい」程の変化」を遂げ、「経済的、政治的立場の上での芸術についてもを云うようになり、ものを「行う」ようになった」とする。そして、「社会は、生々とした社会的に価値ある内容を求めているのだ。——無雑作に、漠然と、興のおもむくまゝに書くことをやめよう、諸君！」と呼びかける。



「ジャーナリズムは伝へる」(『緑丘』71, 1933. 3. 22)

『緑丘』第三八号(三〇年一月二七日)には、前述した川島豊秋の「足の向く儘 財布戦線異状あり」というエッセーが載る。川島は「思想、文芸哲学の方面の本がよく売れるそうである」としたうえで、「先輩小林多喜二氏の蟹工船が二百七十冊、ルマルクの西部戦線異状なしが百三十冊売れた中で、その大部分は学生の手に渡つたそうであるが、文芸思想の転換期を如実に物語つて居るではないか」と書く。小樽高商の学生が多くを占めると思われるが、「現代文壇の雄」として多喜二の名は母校において広く知れ渡つていたことをも推測させる。なお、このエッセーの載つた面には花園町「丸文書店」の広告がでており、「最近当店で一番よく売れてゐる新刊書」として、『蟹工船』(一九二九年一月刊の「日本プロレタリア作家叢書」版、五〇銭)と並んで、高商教授の高橋次郎『スキー術』(一九二九年刊)があげられている(ほかに藤田嗣治『巴里の横顔』)。

その後、『緑丘』紙上に多喜二の名が載るのは、特高警察による虐殺の計報である。第七一号(三三年三月二日)は欠号であるが、スクラップ・ブックに「ジャーナリズムは伝へる 先輩作家小林多喜二氏の死」と題した記事が残されている(第七一

めに学校当局により頒布禁止となった可能性が強い。「吾々は今茲に彼の業績の如何を語る自由を持たぬ。又それを語り得ぬ」としながらも、敬意と深い理解をもって、多喜二の生涯を描く。「彼が文芸部をリードし、北方文化に異彩を放つた事は勿論である」として、その在学中の姿を次のように伝える（卒業論文の筆跡が写真版で掲載される）。

彼は非凡な頭腦の持主であると共に、真実で親切な、やさしい性格だった。文学は既に一九二〇年頃から志し、卒業前後の一九二四年代には所謂その方向転換期に入つて居た。即ちトルストイより、アンリ・バルビュスの（クラルテ）運動に参加して居た。彼は卒業論文提出に際し、正規の商業経済論文を書くを欲せず、当時の審査教授の特別の許可を辛うじて得、バルビュスの戯曲とクロポトキンの翻訳で責を免れたと言ふ。

この文章では「異れる社会に住みて」や「吾々の世界から永遠に離れて行つた」という表現があり、検閲上の配慮からか、多喜二と一線を画そうとしている形跡はあるが、それでも全体の基調は静かに多喜二の死を追悼し、先輩の卒業生としてその大きな業績を正当に評価している。表立って多喜二とその死に言及できないとはいへ、その存在は小樽と小樽高商に結びつけて記憶されていたと思われる。高商の学生は、多喜二の遺骨が小樽駅に着くのを迎えようとした。また、編纂部員は多喜二の姉チマを訪ねている（『丘友便り』第一七号）。

多喜二の記憶は、特に文芸研究会には強く刻みこまれており、時に地表に顔をだす。三四年五月一〇日の『緑丘』第七九号では、文芸研究会の紹介中に「北方文芸当時、学生インテリ層を捲込んだ文学思想に強き関心を持つた吾々の先輩は、多くの試作的プロ的創作を発表した為（故小林多喜二氏は此のグルツベの惑星であつた）、廃刊の運命に逢ひ」とある。また、前述の三五年四月の独立団体懇談会の場で、文芸研究会員は「嘗つては偉大な政治家多喜二」や伊藤整が輩出していると発言する（これに対して、生徒主事浜林生之助は「偉大な政治家」は「不穏当だから取

消した方がい、」とする。『緑丘』第八七号)。次章の範囲になるが、三六年六月ころの「独立団体座談会」でも、文芸研究会の学生は「伊藤整、小林多喜二の先輩を文壇に送りました」(『緑丘』第九四号、三六年七月五日)と述べている。さらに、一九四二年五月二五日の『緑丘』第一五九号に掲載された「読書調査」(三年・二年対象)では、一人の学生が多喜二の『蟹工船』をあげている。戦時下に、「国禁の書」に近い『蟹工船』を愛読書としてアンケートに答えたこと、編集部がその結果を『緑丘』紙上に掲げたことは、驚嘆に値する。

### 思想取締

小樽高商社会科学研究会員の学連大会出席問題がおこった際、一九二五(大正一四)年七月二七日、伴校長が文部省に送った電報には「本校ハ北日本ニ於ケル重要ノ地ニ存在スルヲ以テ、平素思想ノ善導ニ細心ノ注意ヲ払ヒツ、アル」とあった。ここではまだ一般的に学生の勉学と生活が校則から逸脱しないように「平素思想ノ善導ニ細心ノ注意ヲ払」っているという程度の意味だが、つづく軍教事件の惹起を機に、学生思想問題への警戒を強めたことは間違いない。それでも主要な社会科学研究会メンバーを停学処分に付すなどの強硬姿勢を示し、社研を禁止したあとは、その威嚇効果もあって、独自の積極的な思想善導策を打ち出したわけではない。

一九二七年三月三一日付で、校長宛に文部省専門学務局長から「社会科学研究等ノ為ニ使用セラルルコト無之様留意相成度旨」の内務省警保局長からの通告が通牒されている(「閲覧禁止図書ニ関スル綴」)。送付された禁止刊行物目録にもとづき、図書館では洋書四五冊と幸徳秋水『廿世紀之怪物 帝国主義』・『平民主義』を所蔵していた。これらについては、別置・閲覧禁止の措置をとったと思われる。

文部省では一九二八年の三・一五事件に多数の学生が関与していたことに衝撃を受け(小樽高商の在學生は含まれていない)、取締策と思想善導策を相次いで打ち出し、各大学・高校などもその対策に追われた。

高校や専門学校で思想取締・思想善導の対策にあたる役職として、生徒主事・生徒主事補が新設された。小樽高商の場合は、二八年一〇月三〇日、生徒主事に田上市之丞、生徒主事補に三箇清が任命されたが、一二月二四日付で卜部岩太郎が生徒主事となった（卜部は監生部長も務める）。

卜部は文部省の主催する学生主事・生徒主事の会議に出席する。たとえば、一九九年一二月の会議から帰校すると、「監生部に於ても所謂教育的見地から、峻厳ならざる理解ある同情ある訓戒並びに指導が為される」ことを表明するとともに、「今後相当文芸方面に対する或る種の制限乃至は圧迫が加へられる事」（『緑丘』第三八号、三〇年一月二七日）を示唆した。これが、一月の『北方文芸』廃刊の措置となる。その後、前述したような応援団内に設けた評議員制や校友会自治化の試みなどは、監生部と生徒主事が壁となつて実施存続が阻まれていく。

伴校長の立場は、三三年三月五日の卒業式の告辞の一節——「諸君に望む、諸君は先づ忠誠なる日東帝国の臣民たることに徹底せよ、神聖なる我皇室、特殊なる我国体に対する尊崇と負誇とを夢寝にも忘却すること勿れ、かの矯激なる言論、偏倚せる思想に魅惑せられて、光輝ある歴史を棄て、確固たる現実を疎にして、大和民族が三千年來築き来れる国性に疑を挟み、国基を危くするが如きは、天人共に許さざる逆徒たることを観念せざるべからず」（『小樽新聞』、三三年三月六日）——にみることができ（例年より激しいこの口調は、直前の多喜一の死と関連があるかもしれない）。

三一年六月の全国直轄学校学生主事生徒主事会議に出席してきた卜部は、次のように語る（『緑丘』第五六号、七月一〇日）。

最近頻発する学校騒動の当該各校よりの報告、山口高校、新潟高校の今春校友会廃止後の経過発表等があり、本校は全く聞き役として出席した形である。高校はマルキシズム研究を個人的のものたるを否とを問はず、厳禁の方針を採り、これに違反する者は容赦なく処罰する、その点高商は一步進んでゐると言へよう。即ち衆知

の如く、学生一般にマルキシズムの何たるかを明かに知らしめ、然る上に批判力を与へんとする方針であつて、此の間相当の懸隔が存する。学消問題の如きも学校当局が学生の消費生活に眞の利益を与へ得る様、適當の指導を加へるならば、上述の如き偏向は矯正し得るであらうと。

全般的に高校では自治会、学生消費組合、社会科学文献の読書会などにより思想運動が活発だったため、「マルキシズム研究」厳禁と厳罰という方針を確立していたのに比べ、思想運動が低調であつた高商系では、あまり強圧的な措置はとられなかつた。小樽高商においても、新聞『緑丘』の検閲、『北方文芸』廃刊や校友会の自治的動きへの制約など、監生部・生徒主事による肝腎などところでは抑圧統制が働くとはいへ、まだ一九三〇年代前半には、ある程度の自由主義的な気運が学内には残つており、学校・教員側も学生の自主的な活動に比較的寛容だった。小樽高商における「学消問題」も、前述のように学校の監督下に共済部として発足する。

緊張が走る場面もあつた。三〇年一月二七日、「試験の初日に 不穩ビラ貼付さる」という事件が発生したのである。「学校当局は狼狽して直ちに之を剥ぎ取らした」が、「犯人は外部の者らしい」ということで決着した（『緑丘』第四八号、二月二九日）。その直後、この事件の余波もあつてか、プロレタリア文学への傾斜を強めた『北方文芸』に対して、「階級意識に基づく作品の発表は駄目」（下部岩太郎生徒主事『緑丘』第四八号、三〇年二月二九日）という理由で廃刊の厳命を下すが、文芸研究会の学生が停学などの処分を受けた形跡はない。

名古屋高商では日本共産青年同盟の細胞発覚（三二年一月）、高松高商ではストライキ（三二年一月）や日本共産党資金網・読書会の発覚（三三年三月）、和歌山高商でも読書会発覚、『赤旗』配布の発覚（三三年六月）などが惹起しているが、この最高揚した段階には、小樽高商はそうした事件に発展するものはなかつた。それでも、『緑丘』第六七号（三二年一月二五日）が「受難の学生群」と題して、「思想悪化就職困難の十字架を背ひ 過渡期の流れに」



と報じるように、緊張感がただよっていたことは確かであろう。そして、三三年四月三〇日の『緑丘』第七二号は、「幸はひ（？）にも我が学園には十年一日の如く波静かにして、何等積極的団体も活動もなく、謂はゞ惰眠に似たるも、社会的事象に超然として象牙の塔の高踏的矜持をよく把持せるものと言ひ得べし」と自嘲気味に記している。

しかし、他校の左翼学生運動が沈静化させられたあとに、小樽高商では思想事件が惹起する。文芸研究会の流れをくむ学生のなかから、一九三四（昭和九）年四月ころ「社会科学研究会」が組織されていたが、三五年一月、その存在が発覚し、三人が検挙された事件である。警察では「一切左翼思想の研究及実践に携はらざることを誓約」して釈放となり、学校側も「嚴重注意」を与えた（文部省思想局『彙報』第三七輯、三五年四月）。その後、道内全般でおこなわれた七月の日本労働組合全国協議会（全協）への大弾圧に連座して五人が検挙された。容疑は、活動資金の提供や「漸次自学の組織活動に發展せんとする状況」とされた。「学校当局に於ては、父兄を招致して協議の上、本人等の将来を監督指導すること」（『彙報』第四一輯、三六年一月）とした。

「社会科学研究会」とはいっても、左翼文献（レーニン『唯物論と経験批判論』）の翻訳を一〇回ほど下宿などで輪読する程度の活動であった。学校側も退学などの強硬処分をとらなかったとはいえ、「家族的結合」を緑丘精神の発露とみる立場からは、学内のこうした組織は根絶されねばならなかった。

### 思想善導

文部省では全国の学校に学生思想運動の取締の励行とともに、「思想善導」の本格的実施を指示する。その一つが「指導教官制度」であった。小樽高商でも一九三〇年の新年度から実施する。『緑丘』第四一号（三〇年四月二五日）では次のようにその意図を解説する。

専門程度の学校に於ける教育上の一つの欠陥は、智識教育に重きを置く結果、従つて諸教授との交渉についてもその方面の接触のみにて、人格的薫育に欠くる点があることである。本校には従来監生部あり、一般学生の指導的立場に立ち、又寄宿舎には舎監があつて、夫々その欠陥を補つてはゐるが、近時生徒数も次第に増加し、又通学制も多い事実を鑑み、愈々指導教官制なるものを実施して、万全を期する運びに至つた。此の制度は、一定数の学生を一グループとし、各教授が夫々そのグループの指導者となつて、或ひは家庭訪問をなし、或は種々の相談をもなし、人格的交渉を保ちつゝ、薫育の事実を挙げんとするものである。

翌第四二号（五月二七日）に、「各方面受持教授」が告知される。寄宿舎は各舎監が、自宅生・下宿生には「緑町方面」「花園町方面」などの七方面にそれぞれ二、三名の教員が割振られた。そこには「学生は各自の指導教官に積極的に接して、その実跡を挙ぐべきである」とあるが、学生も、また教員側も、この制度を活用した形跡はみられない。そのためか、三二年度には「指導教官の希望者氏名を各学生に記入させ」、一教員が最大二五名までを受け持つことに修正したが（『緑丘』第六五号、三二年七月二四日）、これも実際には利用されなかつたようである。

「生徒ヲシテ広く一般思想問題、社会問題ニ関シ中正穩健ナル識見ト批判力トヲ養ハシメ、又誤ツテ外来思想ニノミ傾注スルコトヲ避ケ、ヨク日本精神ノ本義ニ目醒メシムル目的」（文部省思想局「思想局要項」、一九三四年）で、学者らに六時間から一二時間の特別講義を開講する「特別講義制度」も実施している。といつても、第一回目である一九三一年一〇月の小泉信三（慶応義塾大学教授）の講義は、創立二〇周年の記念講演として実施されている。「近世社会思想評論」の題の下で、「社会思想の意義より説き起し、マルクシズムの特殊な立場を明にし、マルクスの所説を簡単に紹介し、近世に於けるマルクシズム右翼と、マルクシズム左翼との対立及び其の理論を分析し」（『緑丘』第五七号、一〇月三〇日）たアカデミックな内容で、「日本精神ノ本義」強調ではなく、「中正穩健ナル識見ト批判力トヲ養ハ



作田莊一

シメ」るものだった。

三三年度と三三三年度は「特別講義」を実施していない。三四年度は「思想善導」講演の常連組である作田莊一（京大教授）で、「国民科学としての国民経済学の再建」を講義している。

また、文部省では「思想善導」策として、各学校に「穩健ナル研究団体・修養団体ノ奨励」を指示しているが、小樽高商では積極的に取り組んだ形跡はない。

全般的に学生は学校当局の実施する「思想善導」を冷やかに、批判的にみていた。これらが実施されても「思想善導」の成果があがるはずもなかった。小樽高商の場合も例外ではなく、したがって、学校当局の取組みも形式的なものにとどまった。一九三〇年七月一〇日の『緑丘』第四四号の監生部（卜部岩太郎）と編纂部（川島豊秋ら）の懇談会の前半は、次のような「思想善導」問答となっていた。

川島「文部省は思想善導の講演等で学生を指導する事が出来ると思つてゐるでせうか」

卜部「いや、色々の方法を用ひるが、其の特効薬の一つさ」

川島「特効薬は無いんぢやないですか、講演等よりも、僕等の内面的な悩みを考へて戴いて、その方面に指導がもつと切実に僕達には感じられる様に思ひますが」

卜部「君達のは貧乏人を無くするとか、怠惰者も楽に暮らせるとか、社会を改造でもし様と云ふのではないか」  
川島「いや、そんな大きな問題よりも、先づ僕等の個人的な悩みから解決して行きたいと焦燥してゐるのです」

卜部「国家がどうなつても構わないと云ふのならい、が、この良い国家はより良き発展を望むのであるから、若しもの場合を考へると、そんな訳には行かない」

古沢「抑さえれば抑さえる程、却て盛んになるのではないですか」

卜部「いや、学生等は一夜漬で鵜呑みにする者もあるし」

「勤儉力行以て万難を排撃し前途を開拓せよと云ひ、又純粹なる国家主義の立場に立つ卜部教授」（同前）と川島らの見解はかみ合わないとしても、こうした懇談会が実施され、その記録が『緑丘』紙上に掲載されるということ自体は、小樽高商に流れる自由主義的気運の一端を示すといつてよい。

高橋正雄は三二年四月二六日の『緑丘』第六二号に寄稿した「学校と学生の思想的社會関連」のなかで、「現代の実相に触れず、青年の心理と要求とを洞察せずして、古いことや有りがたいことを引張り出して、所謂思想善導なる説法が与へられたときは、学生に反感、軽蔑、失望を起さしむるのみである」と論じていた。

### 「満州事変」の余波

一九三一（昭和六）年九月一八日の柳条湖事件を発端とする「満州事変」は、国民を一举に排外主義的方向に導き、準戦時体制への転換を実現したが、それは小樽高商にどのような影響をおよぼしただろうか。総じていえば、この北辺の学校にも着実に戦時体制への移行は準備され、いくつかの局面でその姿を現しつつあったといえよう。

「満州事変」直後の一〇月三〇日の『緑丘』第五七号では関係の記事はまだないが、一月三〇日の第五八号の巻頭には室谷賢治郎の「満州事変と国際連盟」という論説が載る。かつて修学旅行の引率者として「満州」を歩いた経験をもつ室谷は、「今回の満州事変に於ては、吾が正義の闡明せんめいせられる迄は、連盟に対し金輪際膝を屈するが如

きことあつてはならぬ。(中略) 連盟が滿蒙を列国の共同管理の下に置かうと提唱するが如きこと無き以前に、吾国としては此の地を日本の保護領と為す主張を敢て出すべきものである」と強硬論を主張する。これは、当時にあつては一般的な論調であり、以後の小樽高商関係者もほぼ同じ見解を展開する。

三二年夏、「新興国家滿州国の産業政治教旨の方面に対し視察」をして帰った卜部岩太郎は、「事変前迄はあらゆる侮べつと圧迫を蒙つて居たのが、事変後は全く掌を換へすが如く日本人万能の有様です、本校出身者の話でも従来頗る不利の立場に置かれて居つたが、其の後は頗る円滑に進み、国力の偉大さをしみじみ痛感したと言つて居つたが、全く市中を往来するにも日の丸の国旗を立て、ゆけば、至る処、大手を振つて歩ける様な気持でナル程と感じた次第です」(『小樽新聞』九月三〇日)と語る(卜部は『緑丘』第六六号から第六八号にも「滿州瞥見記」を掲載)。

国際連盟協会高商支部長である苫米地英俊は、国際連盟からの脱退通告に関して、「日本はこの十年余り、随分忍ぶべからざる屈恥を忍ばされ、その上国家の生命線が脅かされるに至りました、これが滿州事變の発端で、如何なる人でも如何なる国家でもその生命線を守り得るのは当然であり、又適法の行為であります、東洋永久平和の脅威たる滿州国際管理の緒口を開く恐れに十分あるリットン報告書の結論に従つて、事件をおさめる勧告書を決議したから、日本は不得止脱退したのであります」と述べる(『連盟脱退後の「日本」と「世界」』『小樽新聞』三三年四月九日、なお、これはラジオ放送の原稿とみられる)。

中国語の原岡武は三三年夏、「滿州国」を視察した結論として、「滿蒙は日本の生命線といふが、この生命線を肉弾を以て固めた軍人軍属の奉公振に絶大な敬意を表すると共に、将来これが実果を一層収めんとするためには、共存共栄の精神より親しみの情を害す事なく、滿州国—国人を真に理解し、彼地に働くものは勿論、故国にゐるものも国情を研究し、両国人の親善をよりよくする事が義務なりと考へた」とし、「彼等をよりよく理解するために滿州語の研究」(同、三三年九月一〇日)が重要だとする。

伴校長も三三年三月の卒業式告辞で、「我数万の精銳は身命を君国に捧げて満蒙の曠野に転戦し、国際連盟の動向は頓に險悪に赴き、国家の前途樂觀を許さざる情勢にあり、宜しく国民一致してこの難関を打開せざるべからざる機運に際会す、この時において世に立たんとする諸君の任務や重大なると共に、波瀾重畳の障壁聳立するを覚悟せざるべからず」（同、三三年三月六日）と述べる。そして、三四年九月から一〇月にかけて、自身が「産業及教育上ノ視察」（秘文書綴）、一九三四年度を目的に、中国の北京・天津や「満州国」各地を見て回る。その体験を通じて、「満州国の経営に至つては、将来国民として最も重かつ大なる任務で、まさしく日本人の能力を試めすべき大試金石であるが、総ての方面に対し、これを成就せしめなければならぬといふ覚悟と自信を強く感じた」（『小樽新聞』、三四年一〇月三日）と語る。

「語学乙類」の設置などの教育態勢、「満蒙研究」などの研究態勢の整備は一九三〇年代後半の苫米地英俊校長期となるが、三〇年代の前半においても、「満州事変」および「満州国」建国に関連して校内でもいくつかの動きがみられた。

学校側が主催する「満蒙問題講演会」がしばしば開かれている。三一年一二月七日の講演では、第七師団参謀の落合少佐が「今に及んで満蒙問題に対し積極的解決策を講ずるに非れば、将来、米、露の進出に依り、我国を危機に導く事は明かである」と結ぶと、「満場の拍手」がおこる（『緑丘』第五九号、二月二五日）。三二年九月には第一三旅団長の谷実夫少将が講演のなかで、「爆弾三勇士の真相と、日本軍の苦闘」を述べると、「聴衆は声涙に誘はれた」という（同、第六六号、三三年一〇月三日）。

三三年六月、満蒙植民地協会長杉浦春之輔の「満蒙の全貌」という講演、三四年一月の卒業生で「満州国」監察官武岡嘉一の「満州国の現状を語る」という講演もあった。卜部・原岡、さらに伴校長らの「満州国」視察の報告もなされた。

国際連盟高商支部でも三一年一月、「大島〔高精〕博士の「滿蒙現地を踏査して」と題する講演を催し、満州の現状、支那兵の無智、惨忍性等より、国際連盟の批判、我が国外交の弱点、国防問題、所謂特殊権益等について聞く所」あったほか、各寮に「滿蒙地図」を配布するなどの活動をはじめている（『緑丘』第五八号、三一年一月三〇日）。その後、日本が国際連盟の脱退通告をすると、国際協会高商支部と改称して活動を継続する。

教職員と学生有志の新団体も生まれた。『満州国』視察から帰った卜部岩太郎が呼びかけ、三二年二月二〇日に発足した「東亜事情研究会」である。『緑丘』第六八号（二月二六日）は、次のように報じる。

其の趣旨は東亜に於ける政治、哲学、教育、宗教、風俗、言語、外交、軍事、交通、産業、貿易、移民等に関する諸項目を研究し、東亜文化の発展に資せんとするものである。

以上の目的に向つて、文献の蒐集、実情の調査並びに研究発表、講演等を行ふ筈で、第一回例会を去る廿日午後一時より高商俱樂部にて開催し、当日は会員として会する者百五十名、何れも皆滿蒙を中心として、将来雲蒸龍變の士となる、たのもしき人々ばかりであつた。

会長は伴校長、副会長は中村和之雄、理事は苦米地・卜部・原岡、そして配属将校の深草厚之中佐という顔ぶれである。翌三三年二月の研究発表会の様子は、「滿蒙熱に浮された会員は満州国の地図を握り、或ひは匪賊討伐を論じ、熱河に於ける日、支、露の関係、延いては風雲急を告ぐるジュネーブの空気と連盟脱退説に勝手な熱を上げ、夜の更けるを知らなかつた」（『緑丘』第七〇号、二月三日）という。次第に活動は停滞しようだが、三五年春の時点では「会員は約二、三十名」（同、第八七号、五月二五日）だった。

また、三三年二月、「心身鍛錬ヲ目的トシ、主トシテ射撃術ノ向上練磨ヲ図ル」を趣旨として設立された高商射



東亜事情研究会（1933）

撃会も、「満州事変」後の軍事熱の高まりの産物である。中村和之雄を会長に、配属将校の米山米鹿中佐らが顧問となった（同、第七五号、二月二八日）。

ほかに公的な学校の取組としては、三三年の夏から実施された「満州産業建設学徒研究団」がある。「學術講習」「現地演習」「戦跡見学」などの内容で、全国の大学・高校などから千名が派遣され、小樽高商からは学生三名と配属将校が参加した（同、第七四号、三三年六月二五日）。その一人は「参加記」のなかで、柳条湖事件の発端となった北大営について、謀略の当事者であった河本大作から説明を受けたうえで、「全く当夜の事件を発生せしめるのに無理もない。小銃、機関銃の洗礼を受け、惨憺たる姿の記念にと、銃殻を拾ひながら、当夜の戦ひの如何に凄惨を極めたかを偲んだ」（同、第七七号、三四年二月二五日）と書く。三四年には二名が参加する。

一九三三年からは「軍需景気襲来」によつて就職戦線が好転し、「満州国」・満鉄方面への就職が急増したことは前述した。また、大同学院への入学者もあった。その一人、米沢四郎は入学早々の体験記「満州より」を『緑丘』に寄稿している（第七五号から第七七号）。「満州事変」直後、全国的に愛国熱が高まり、募金運動が各地で開始されるなか、小樽高商でも実施されている。一九三一年一



二月五日の校友会理事会で「満蒙出征兵士家族慰問金募集」が可決されると、寮およびクラス単位の募集活動がなされ、「丁度学生にとっては不如意な時」であったが、短期間に八〇余円が集まった（『緑丘』第五九号、二月二五旦）。三年には全国の高専校による「愛国高専号」を陸・海軍にそれぞれ献納する募金が呼びかけられたが、実際には小樽高商の割当とされた約三〇〇円の半分程度しか集まらなかった。三四年六月二二日の『緑丘』第八〇号には、「非常時の叫びの喧しい折柄やかま、その集まり高多きを期待されてゐたに拘らず、余りに少きはどうかしたことだ、驚く外はない」という記事が載る。

この募金の不振はどのようにみるべきだろうか。東亜事情研究会や高商射撃会を創設するなど、一部の学生は「満州事変」のもたらした「満蒙」熱や戦争熱に影響を受けたことは確かであるが、まだ多くの学生は自らの勉学や生活には直接関わりのあることと考えていなかったことを示そう。そこが、戦争と否応なく向き合うことを余儀なくされた一九三〇年代後半の学生との相違である。

次の『緑丘』紙上の二つのコラムの立場が小樽高商生の実相を示しているといえようか。

チャップリンが来やうと、犬養首相が暗殺されやうと、学生群は無表情だ。隣の家に火が燃えて来る迄、閉じた目を開かうともしない、我不関焉、近くのどこかの国民に似てゐる。（第六三号、三二年五月二九日）

右翼団体の結成を競ふ此の頃の大学、高専。だが、津軽の海を隔て、居るせいか、花咲き匂ふ平和の学園。永へなれ。（第七三号、三三年五月三一日）

前者は何事にも「無表情」＝無関心で、自己の小世界に安住している小樽高商生を含む学生全般の社会性や積極

性の欠如を嘆いている。それは批判されるべきとはいえ、後者では緑丘が永遠に「花咲き匂ふ平和の学園」であり、左右両翼の思想運動にも、あるいは戦争熱の熱狂にも巻き込まれたいくないという願望がただよう。

## 第六節 小樽のなかで

函館大火募金と凶作地救援運動

一九三四（昭和九）年三月二一日、函館は大火に見舞われ、市街地の三分の一、二万四一八六戸が焼失し、二一六六名が死亡する大災害がおこった。小樽高商の在学生一〇名は罹災したものの無事であった。また、同窓生約一〇〇名の在住者のうち、一名が行方不明となり、三九名が罹災した。

この事態に伴校長は中野清一・木曾栄作・斉藤直の三教員を派遣し、高商関係者の被害状況を調査させた。その報告が同窓会の臨時役員会でなされると、まず救恤金五〇〇円を送るとともに、全国の同窓会員に向けて「義捐金募集」をすることになった。また、『緑丘』は特別号を臨時に発行し（四月二日）、伴校長「御依頼状」、苦米地英俊「温き心にすがりて」、木曾「災害現地を尋ねて」、中野・斉藤「諸君に告ぐ」などを掲載した。各地の同窓生のほか、校内からも募金が寄せられた。

一月一〇日から四日間、小樽高商の有志学生は小樽中学・小樽商業・市立中学・北海商業などの中学生らと「小樽学生東北、北海道凶作地救援会」を結成し、小樽市内で大々的な募金活動を展開した。経済研究会のメンバーの呼びかけに北海道経済事情研究会員、編纂部・講演部、さらに東北地方出身の在校生らが応え、「この運動を校内のみならず全学生的なものとし、尚市民大衆の同情をも喚起、全市を救援線に総動員せん」という意気込みで、次のような「趣旨書」を配布する。

寒冷の冬空に蒼ざめた農民の奏でる「青春葬送曲」の哀韻を、地帯の域外に黙視出来やうか、臨時議会には凶

作救済案が上程され、帝都に於ける街頭募金、各新聞社への義捐金寄託、官吏の義損等々、数々の救援運動に呼応して、茲に我々学徒は樽都学生を糾合し、一般大衆に呼びかけやうと企画したのである。(中略) 微力乍ら我々は必須の飯米を待望する被害地に一寸の布片、一粒の食糧を送つて缺乏を補ふことこそ、吾々の責務の一斑を果す意義をもつことを確信し、本校学生は勿論、当市中学校の結合を基調として市民大衆の同情に訴へんとするものである。

各学校長を顧問格に、東京朝日新聞社の後援というお墨付きを得て、みぞれの降る寒さのなか、市中各所での街頭募金と戸別訪問がおこなわれた。予想以上の結果で、校外募金が八二四円、校内募金も一九一円に上り、一〇〇七円が送金された。

『緑丘』第八四号(三四年二月三日)が一面全部を使って「学園空前の感激的壮挙」「絶望に喘ぐ農民に 光あれ」と起つた学園」と報じるように、ヒロイックな雰囲気も感じられるが、学生たちは学ぶことも多かつたようである。一つは、「学生は徒らに象牙の学問のみに幽閉さるべきではない、餓死せんとする同胞を外に何の経済学、何の倫理学があらうか」として、「学生よ、塔を出でよ!」という社会意識に目覚める。もう一つは、街頭募金のひとつが「中層、下層階級から得た本当の浄財だ」として、「窮乏の農村を救ふ義金は、都会の下層から出される。といふことは、シミジミ経験されたことである。これなんかも矢張り社会の矛盾の一つではないかと痛感」する。一過性の義挙にとどまったとはいえ、学生たちは自ら主体的に行動することで得難い経験を積んだ。

なお、この学生の募金活動に先立ち、一月五日、「商品学」を専門とする西田彰三は市立図書館で「東北北海道における凶作について」という講演をおこなっている。その内容は、すぐに『小樽新聞』に掲載された(二月二日から三日まで二回連載)。また、この前後、西田は「東北及北海道の飢饉に就て」と題する論文を『緑丘』紙上にも掲

載している（第八二号から第八七号まで）。専門的な立場から、東北農村救済には「政府米の払下、救急土木事業」などのほか、「中小地主の自作農小作農への転落、自作農の小作農への転落は年々増加することは、明かなること」という見通しに立って、「根本的対策として、土地制度の根本的改革」（第八七号、三五年五月一五日）が必須と提言する。

「成人教育講座」

「教育の事業は唯に学校施設のみを以てしては不十分であり、生涯の事業たるべきものであるとの理念」に立つて、文部省の委嘱により、小樽高商では「成人教育講座」を実施している。「成規の学校教育を受けざる一般成人に聴講せしむるを原則とするゆゑ、講義は高等小学校卒業程度を基準とし、専ら聴講者の実生活に適切ならしめ、その内容は出来得る限り、専門の智識を平易に授け、国民生活の実情に適當ならしめ」（『小樽新聞』一九三二年七月三日）という目的で、第一回目は一九二五（大正一四）年七月から九月にかけて小樽高商を会場とした講座は、次のようなものであった。聴講料は無料である。

- |                   |       |
|-------------------|-------|
| 一、最近学生簿記学原理       | 村瀬 玄  |
| 一、企業ヲ中心トスル経済組織ノ変遷 | 室谷賢治郎 |
| 一、流通経済ノ理論         | 南 亮三郎 |
| 一、私法一般 付公民教育概論    | 伴 房次郎 |

一九二八年夏の講座は「男子部」と「婦人部」に分けて開講されている。「婦人部」の場合、伴「公民生活」、西田彰三「日用品ノ見方」、品川秀三「台所用品講話」（以上、「緑丘学園三十五年史」稿本）という内容で、七月二五日から八

月四日まで一〇日間、毎日二時間の本格的な講義である。この講座は毎年夏の恒例行事となり、「市民の絶対的好評裡」に、三一年には「聴講者は百十九人の多数を占め、中、婦人聴講者八名」（『緑丘』第五九号、三一年二月二五日）という盛況だった。

一九三二年には小樽のほかに函館で、三三年には小樽・函館・室蘭で開講されている。三四年には小樽（小樽市と共催）・室蘭（室蘭市・同商工協会と共催）で開講されている。

この「成人教育講座」とは別に、三三年度と三五年度、やはり文部省の委嘱により「公民教育講座」が開かれている。「町村自治の発達、政治の厳肅公正は、公民教育の普及徹底に俟つところ誠に大なるものあり」という観点から、文部省では「一般民衆を対象とする社会教育」にも本格的に目を向けるようになり、三二年度から「公民教育講座」を実施する。「直轄学校に委嘱開設の途を講じたるは学校拡張事業の一となし、直轄学校の教職員等をして余力を以て地方の社会教育に貢献せしめんとする趣旨」（文部省社会教育局『公民教育実施概況』（昭和一〇年度））である。小樽高商の場合、この両年度は通常の「成人教育講座」も実施している。

三五年度（八月一五日から九月二日）の場合をみると、稲穂女子尋常高等小学校を会場に、三井物産小樽支店長津久井誠一郎「北海道ト満州ノ経済関係」（四時間）、卜部「日本精神ノ政治的顕現」（六時間）、大野純一「予算ノ話」（同）、井上紫電「憲法講話」（同）の四科目が並ぶ。申込者は一四四名で、全体を聴講した修了者は八五名であった。職業別では銀行会社員、官公吏、商業従事者の順で、年齢は二〇代と三〇代で大半を占める。後述する小樽公民会は、「聴講者ノ募集ヨリ輔導ニ至ル迄熱心ニ尽力」した。

終了後の文部省への報告書によれば、受講者の「聴講態度、慎重静粛ニシテ一般的智識ヲ啓発セラル、点多大ナリシモノト認め」、「講習員ハ概シテ時間数ノ少キヲ遺憾トセル模様ナリ、即チ各科目ニ就キ徹底的指導ヲ希望セル状態ニシテ、相当期間連続実施ヲ希望セル者モ有リタリ」（『公民教育実施概況』（昭和一〇年度））という。「成人教育講座」

の各講座が一〇時間程度であったことからすると、「公民教育講座」は時間数の点でやや物足らなかつたといえよう。なお、次章の範囲となるが、この「成人教育講座」は戦時下の一九四四年度まで継続して実施されている（四一年からは青森でも開講している）。四四年夏は次のような科目・講師で実施された（緑丘学園三五年史）稿本。科目名から判断すると、大方は戦時下の国策に沿った内容だったことが推測される。

(一) 一般講座

小樽市稲穂女子国民学校

戦争の世界史的意義

苔米地英俊

企業の国家的性格

室谷賢治郎

統制経済とインフレーション

高橋 次郎

日本財政の構造変化

丸山 泰男

軍需生産と軍需管理

海軍大佐

森山 昌邦

戦争と食糧問題

北海道食糧営団理事長

小谷 義雄

函館女子高等国民学校

米国の政治機構

浜林生之助

共栄圏の民族政策

南 亮三郎

切符制度と貨幣経済

長尾 義三

統制経済とインフレーション

高橋 次郎

共栄圏の文化政策

松尾 正路

## (二) 婦人講座

戦争の世界史的意義

苔米地英俊

米英の国民性について

浜林生之助

東亜経済の特性

玉井 武

軍需生産と軍需管理

海軍大佐 森山 昌邦

戦争と食糧問題

北海道食糧宮団理事長 小谷 義雄

さらに特筆すべきは、この「成人教育講座」聴講修了者の有志から「修養研学」を目的に「小樽公民会」が発足し、主に例会講演会と懇談会を継続していることである。一九二八年二月一日、会長を伴房次郎高商校長、幹事を札幌太郎吉（緑町郵便局長）とし、小樽高商倶楽部で発会式がおこなわれた。札幌のほかに水上泰行、大庭要蔵、神保一郎らが中心メンバーであった。「本会ハ公民トシテノ常識ヲ涵養シ、人格ノ向上ニ努メ、会員相互ノ親睦ヲ計リ、公民教育ノ普及及發達並ニ社会諸般教化事業ノ達成ヲ図ルヲ以テ目的トス」という目的を掲げた。会員は、「文部省主催成人・公民教育講座修了者並ニ其他ノ有志ヲ以テ組織ス」とされ、会員の成人教育講座聴講が推奨された。手塚寿郎「民族と社会思想」、室谷賢治郎「英国に於ける無産政党の發達」という二八年三月の講演会を手始めに、例会がおこなわれた。小樽区裁判所判事箕浦清「陪審法につきて」（二八年八月）や原岡武「滿蒙事変と世界大戦」（三一年二月）などの時事的な講演のほか、会員による「滿鮮に旅して」「本道物産と滿州国」「北千島の話」などもあり、三六年末までに六九回を数え、小樽高商の教員の登壇回数はほぼ半分にのぼった（配属将校を含む）。来樽した福田徳三・石原純・河東碧梧桐・笠木良明・高田保馬・作田莊一・河田嗣郎らも講師を務めている。また、例会とは別に、卜部岩太郎による短期集中の「論語講究会」と「孟子講究会」も開催された。三六年現在で、会員は総勢一四



二名を数えた（以上、小樽公民会『小樽公民会概要』）。

講演会や懇談会の記録を載せた『小樽公民会々報』も一九三〇年から発刊されている。

### 各種講習会

「真の北日本に於ける文化醸成の中枢機関」（『小樽新聞』、一九二二年一〇月七日社説）たらんとして、北海道における人文・社会科学の高等教育機関である小樽高商の地域への貢献は、各種講習会の実施にもみることが出来る。英語関係の講習会は頻繁に開かれたはずだが、その全貌は不明である。たとえば、一九二八（昭和三）七月、文部省の委嘱を受けて臨時教員養成所では臨教卒業生のための「英語講習会」を開く。定員は五〇名で、中等学校英語教員も対象となった（『緑丘』第二六号、二八年七月三日）。

三四年七月には実業学校教員夏季講習会が開かれた。全道から五〇名が参加し、「模擬実践」を中心に、糸魚川祐三郎らが指導にあたった。その重点を「取引条件、取引手続等を再吟味し、実商慣習に接近せる事。商業書式及諸帳簿の広汎なる改訂をなし、新時代に適応せしめたる事。指導票制度を廃し、「実践ハンドブック」を使用し、復修者の実践自由の範囲拡大したる事」におき、実践修了後には研究報告と討議がおこなわれた（『緑丘』第八一号、三四年八月三日）。

